

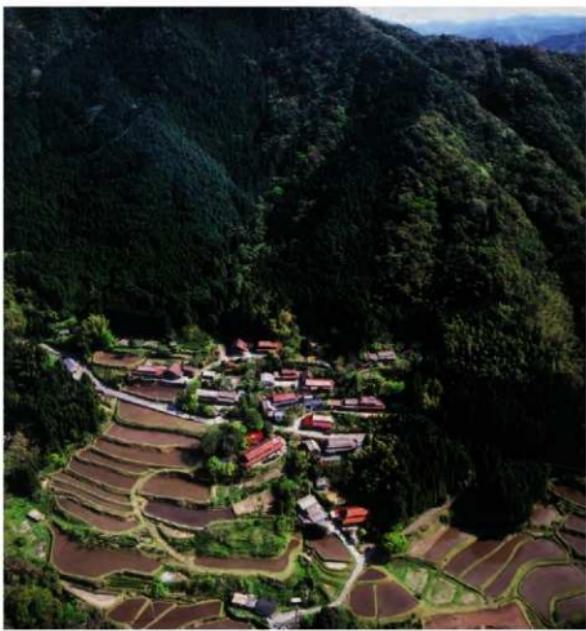
福岡県営五ヶ山ダム関係文化財調査報告Ⅲ

五ヶ山Ⅱ

東小河内遺跡

福岡県文化財調査報告書 第248集

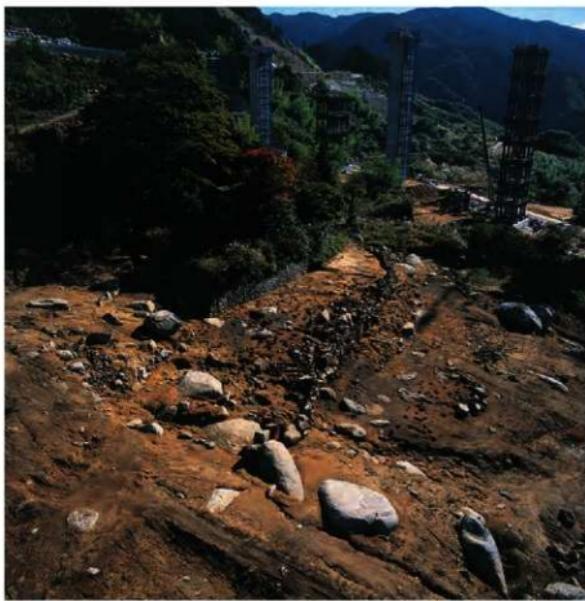
平成25年度



(1) 発掘前の東小河内集落俯瞰（西から）



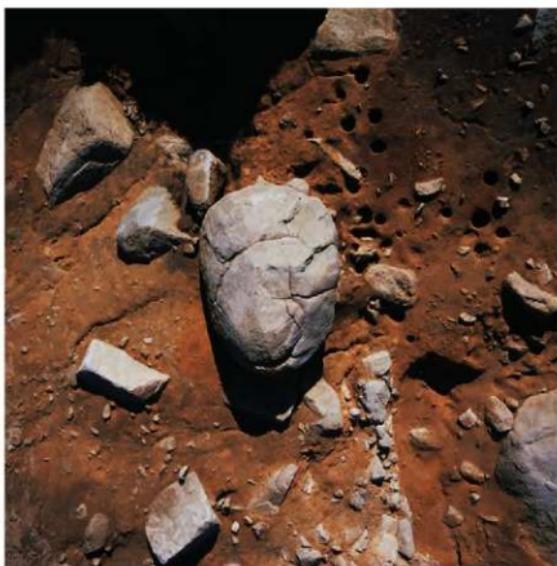
(2) 東小河内遺跡 5 区～8 区俯瞰（西から）



(1) 東小河内遺跡 5区～8区俯瞰（北西から）



(2) 調査 5区石垣と柱穴群俯瞰



(1) 1号巨石祭祀遺構俯瞰



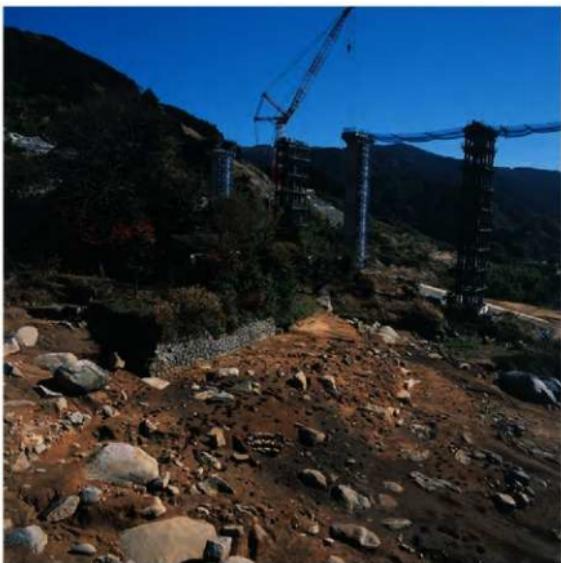
(2) 1号巨石祭祀遺構和鏡出土状態（東から）



(1) 1号巨石祭祀遺構出土和鏡



(2) 調査5区出土の龍泉窯青磁碗（人形手）



(1) 調査 5 区石垣除去後の俯瞰（北西から）



(2) 東小河内遺跡からみた山祇神社の佐賀県指定天然記念物「小川内の杉」

序

本報告書は、平成 21 年度から 22 年度にかけて県営五ヶ山ダム建設に伴い、福岡県県土整備部河川開発課との協議の結果、平成 21 年度は執行委任で 22 年度からは協定書を締結し委託事業として発掘調査を実施した、筑紫郡那珂川町大字五ヶ山所在の東小河内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

五ヶ山ダムに関する埋蔵文化財の調査は、平成 16 年度から開始され、今回で 4 遺跡目の報告書です。平成 19 年度から行った網取遺跡では、15 世紀から 16 世紀を中心とする館跡と考えられる遺構とともに 3,000 枚を越える備蓄錢や輸入陶磁器、鉄滓、茶臼等が発見され、山間部の狭隘な谷間に重要な遺跡の存在が確かめられました。

今回報告します東小河内遺跡では、網取遺跡よりは古い 13 世紀から 16 世紀にかけての館跡が確認されました。館は丘陵の緩斜面に長大な石垣を築き建物を建て、周囲に防御的な柵列遺構も検出され、近くには中世山城の一ノ岳城や虎ヶ岳城が築かれるなど、中世の五ヶ山一帯は緊張状態にあったことが想起されます。

遺跡からは、数多くの輸入陶磁器が出土し、巨石祭祀遺構が 2 個所発見され、その 1 個所には鏡が奉納されるなど、山間部の遺跡としては内容豊富な発見がありました。

網取遺跡および東小河内遺跡の発掘調査は、中世を中心とする五ヶ山の歴史を語る上で大変貴重な資料を得ることが出来ました。発掘調査や整理報告書の作成に当たっては、那珂川町教育委員会をはじめ数多くの皆様方のご協力をいただきましたことに感謝申し上げます。最後に、本報告書が文化財の調査研究および文化財愛護思想の普及に寄与することを願ってやみません。

平成 26 年 3 月 31 日

九州歴史資料館

館長 荒巻俊彦

例 言

- 1 本書は、福岡県営五ヶ山ダム建設に伴い、平成 21 年度から 22 年度にかけて発掘調査を実施した東小河内遺跡の調査報告書である。
- 2 この発掘調査は、福岡県教育委員会が福岡県県土整備部河川開発課と執行委任及び協定書を交わし委託事業として実施したものである。なお、平成 23 年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。
- 3 発掘調査対象地は、平成 20 年の 9 月から東小河内谷全体の試掘調査を実施し、その結果、東小河内集落範囲内に遺跡の分布が見られたことから集落区域全体を 8 区に区分して、平成 21 年 6 月 18 日から平成 23 年 2 月 28 日まで本格的な調査をしたものである。
- 4 調査は、1 区から 4 区までを文化財保護課技術主査の岸本圭（現・九州国立博物館展示課）、5 区から 8 区までを同課参事補佐（再任用）の佐々木隆彦（現・九州歴史資料館文化財調査室調査指導員）が分担した。
- 5 遺物整理は、九州歴史資料館で実施し、掲載した俯瞰写真の中で東小河内集落は、福岡県教育委員会「五ヶ山・小川内」－福岡県文化財調査報告書 第 215 集－2008 に掲載した写真を使用し、遺跡の写真は、熊本航空（株）と空中写真企画と委託契約を交わし撮影し、その他は岸本と佐々木が撮影したものである。出土遺物の写真は、九州歴史資料館の整理指導員の北岡伸一が撮影した。
- 6 近世炭焼窯跡の地形測量と実測は（株）埋蔵文化財サポートシステムと委託契約を締結し実施したものである。
- 7 本書で使用した方位は真北を表し、座標は国土座標第Ⅱ系を示す。
- 8 本書の執筆は下記のとおりである。
 - I 佐々木隆彦
 - II 岸本 圭
 - III-1 -(1) . . . 岸本
 - III-1 -(2) . . . 岸本
 - III-1 -(3) . . . 佐々木
 - III-1 -(4) . . . 佐々木
 - III-1 -(5) . . . 佐々木
 - III-1 -(6) . . . 佐々木
 - III-1 -(7) . . . 佐々木・岸本
 - III-2 佐々木
 - IV 佐々木
- 9 本書の編集は、岸本と協議し佐々木が担当した。

本文目次

I 調査に至る経過	1
1 事前の経緯	1
2 周辺の発掘調査	1
3 分布調査と試掘調査	3
II 遺跡の位置と歴史的環境	7
III 発掘調査の記録	9
1 各区の調査	10
(1) 1区～4区の遺構	10
① 1～4区の遺構概要	10
② 石組遺構	10
③ 土坑	11
④ 埋甕土坑	13
(2) 1区～4区の出土遺物	16
(3) 5区・6区の遺構	19
① 調査区の遺構概要	19
② 館普請	19
③ 掘立柱建物跡	21
④ 土坑	26
⑤ 炭焼窯跡遺構	28
⑥ 石垣	30
⑦ 門跡	31
⑧ 庭園遺構	31
⑨ 祭祀遺構	33
(4) 5区・6区の出土遺物	34
(5) 7区・8区の遺構	62
① 調査区の遺構概要	62
② 掘立柱建物跡	63
③ 土坑	63
④ 排水(水路)遺構	64
⑤ 祭祀遺構	66
⑥ 石垣と石敷遺構	67
(6) 7区・8区の出土遺物	68
(7) その他の出土遺物	78
2 炭焼窯跡の調査	80
IV 総括	83

図版目次

- 卷頭図版 1 (1) 発掘前の東小河内集落俯瞰（西から）
(2) 東小河内遺跡 5 区～8 区俯瞰（西から）
- 2 (1) 東小河内遺跡 5 区～8 区俯瞰（北西から）
(2) 調査 5 区石垣と柱穴群俯瞰
- 3 (1) 1 号巨石祭祀遺構俯瞰
(2) 1 号巨石祭祀遺構和鏡出土状態（東から）
- 4 (1) 1 号巨石祭祀遺構出土和鏡
(2) 調査 5 区出土の龍泉窯青磁碗（人形手）
- 5 (1) 調査 5 区石垣除去後の俯瞰（北西から）
(2) 東小河内遺跡からみた山祇神社の佐賀県指定天然記念物「小川内の杉」
- 図 版 1 (1) 東小河内遺跡 1 区～8 区俯瞰（東から）
(2) 調査 1 区全景（東から）
- 図 版 2 (1) 調査 2 区全景（東から）
(2) 調査 2 区全景（西から）
(3) 調査 3 区全景（北から）
- 図 版 3 (1) 調査 3 区・4 区俯瞰
(2) 東小河内遺跡からみた佐賀県小川内集落跡（東から）
- 図 版 4 (1) 東小河内遺跡 5 区～8 区俯瞰（西から）
(2) 佐賀県小川内からみた東小河内遺跡遠景（西から）
- 図 版 5 (1) 調査 1 区石組遺構（東から）
(2) 調査 1 区石組遺構石蓋除去後の状態（東から）
(3) 調査 1 区 1 号土坑（南から）
- 図 版 6 (1) 調査 1 区 2 号土坑（南から）
(2) 調査 3 区埋甕土坑（南から）
(3) 調査 4 区埋甕土坑（北から）
- 図 版 7 (1) 東小河内遺跡 5 区～7 区俯瞰（南から）
(2) 調査 5 区中世石垣出土状態（土層左端が現代の石垣裏込）
(3) 調査 5 区整地層と石垣裏込石（SN01、北西から）
- 図 版 8 (1) 調査 5 区整地層（SN02、東から）
(2) 調査 5 区整地層（SN03、北西から）
(3) 調査 5 区整地層（SN04、東から）
- 図 版 9 (1) 調査 5 区石垣下の整地層（南から）
(2) 調査 5 区整地層面の柱穴群（北から）
(3) 整地層面出土の火舍
- 図 版 10 (1) 整地層面出土の土鍋
(2) 整地層面出土の土師器
(3) 庭園遺構出土の青磁碗

- 図 版 11 (1) 1号埋石土坑（東から）
(2) 1号埋石土坑完掘状態（北から）
(3) 2号埋石土坑と円形抉りの大石（南東から）
- 図 版 12 (1) 2号埋石土坑の埋石除去後の状態と円形抉りの大石（北西から）
(2) 調査5区炭化物土坑（西から）
(3) 調査6区炭焼窓跡土層堆積状態（南西から）
- 図 版 13 (1) 調査6区炭焼窓跡と覆屋の柱穴（南から）
(2) 調査6区炭焼窓跡と覆屋の柱穴及び溝状遺構（東から）
(3) 調査5区中世石垣とテラス（南西から）
- 図 版 14 (1) 中世石垣とテラス中央部（南から）
(2) 東側中世石垣とテラス（南西から）
(3) 東端中世石垣とテラス（南から）
- 図 版 15 (1) 中世石垣とテラス全容（北西から）
(2) 中世石垣とテラス（北西から）
(3) テラスの盛土状態（北西から）
- 図 版 16 (1) テラスの盛土と下層柱穴（SN04、南東から）
(2) 調査5区整地層下層の焼土
(3) 初期館跡のテラスの柵列痕（横線はⅡ期テラスの盛土底面）
- 図 版 17 (1) 中世石垣と階段状裏込（西から）
(2) 石垣の階段状裏込（北から）
(3) 西端石垣と庭園遺構（南から）
- 図 版 18 (1) 庭園遺構（北東から）
(2) 庭園遺構（南から）
(3) 館跡西端の石列（東から）
- 図 版 19 (1) 1号巨石祭祀遺構（鏡を奉納、東から）
(2) 1号巨石祭祀遺構鏡出土状態（東から）
(3) 1号巨石祭祀遺構（南から）
- 図 版 20 (1) 調査5区～7区の全景（北西から）
(2) 7号掘立柱建物跡（北から）
(3) 調査7区火葬土坑検出時（東から）
- 図 版 21 (1) 調査7区火葬土坑（東から）
(2) 火葬土坑副葬品出土状態
(3) 火葬土坑石除去後の状態
- 図 版 22 (1) 調査7区2号集石土坑（南から）
(2) 調査7区排水（水路）遺構（北から）
(3) 調査7区排水（水路）遺構石除去後（北から）
- 図 版 23 (1) 2号巨石祭祀遺構（南西から）
(2) 2号巨石祭祀遺構の詰石（中層から青磁碗、下層から土師器の坏出土）
(3) 調査7区～8区の土層堆積状態（西から）

- 図 版 24 (1) 調査8区の石組と石敷遺構（西から）
(2) 調査8区の巨石傍の石組（南東から）
(3) 近世炭焼窯跡（北から）
- 図 版 25 (1) 近世炭焼窯跡（南から）
(2) 発掘調査風景
(3) 東小河内遺跡からみた小川内山祇神社の大杉（佐賀県指定天然記念物）
- 図 版 26 調査1区・2区・4区出土遺物
- 図 版 27 調査4区・5区出土遺物
- 図 版 28 調査5区出土遺物
- 図 版 29 調査5区出土遺物
- 図 版 30 調査5区出土遺物
- 図 版 31 調査5区出土遺物
- 図 版 32 調査5区出土遺物
- 図 版 33 調査5区出土遺物
- 図 版 34 調査5区出土遺物
- 図 版 35 調査5区出土遺物
- 図 版 36 調査5区出土遺物
- 図 版 37 調査5区～7区出土遺物
- 図 版 38 調査7区出土遺物
- 図 版 39 調査8区出土遺物
- 図 版 40 調査1区～5区出土銅製品、鉄製品、石製品、土製品
- 図 版 41 調査5区出土石製品
- 図 版 42 調査5区～7区出土石製品、鉄製品、銅製品、土製品
- 図 版 43 調査7区・8区出土石製品、土器と古錢、縄文時代の石器

挿図目次

第1図	五ヶ山ダム用地内発掘調査地点（約1/17,200）	2
第2図	東小河内谷の試掘と調査区（1/5,000）	4
第3図	東小河内遺跡周辺遺跡分布図（1/25,000）	8
第4図	東小河内遺跡調査区割（1/1,000）	9
第5図	調査1区遺構配置実測図（1/100）	10
第6図	石組遺構実測図（1/30）	11
第7図	1号土坑実測図（1/30）	11
第8図	調査2区遺構配置図（1/100）	12
第9図	調査3区遺構配置図（1/100）	13
第10図	調査3区埋甕土坑実測図（1/20）	13
第11図	調査4区遺構配置図（1/150）	14
第12図	調査4区土層断面実測図（1/60）	15
第13図	調査4区埋甕土坑実測図（1/20）	15
第14図	調査1区・2区出土土器実測図（1/3）	16
第15図	調査2区～4区出土土器実測図（1/3）	17
第16図	調査5区・6区遺構配置実測図（1/250）	18
第17図	調査5区各トレンチ土層断面実測図（1/60）	20
第18図	1号・2号掘立柱建物跡実測図（1/60）	22
第19図	3号・4号掘立柱建物跡実測図（1/60）	24
第20図	5号・6号掘立柱建物跡実測図（1/60）	26
第21図	1号・2号埋石土坑実測図（1/40）	27
第22図	炭化物土坑実測図（1/20）	28
第23図	炭焼窯跡実測図（1/30）	28
第24図	調査5区石垣実測図（1/100）	29
第25図	石垣と裏込石実測図（1/100）	30
第26図	石垣の階段状裏込石実測図（1/40）	30
第27図	館跡門跡実測図（1/40）	31
第28図	調査5区庭園遺構実測図（1/150）	32
第29図	1号集石土坑、1号巨石祭祀遺構実測図（1/40）	33
第30図	調査5区出土土器実測図1（1/3）	35
第31図	調査5区出土土器実測図2（1/3）	36
第32図	調査5区出土土器実測図3（1/3）	37
第33図	調査5区出土土器実測図4（1/3）	38
第34図	調査5区出土土器実測図5（1/3・1/4）	39
第35図	調査5区出土土器実測図6（1/3・1/4）	40
第36図	調査5区出土土器実測図7（1/3）	41
第37図	調査5区出土土器実測図8（1/3）	42
第38図	調査5区出土土器実測図9（1/3）	44

第39図	調査5区出土土器実測図10(1/3)	45
第40図	調査5区出土土器実測図11(1/3)	47
第41図	調査5区出土土器実測図12(1/3)	48
第42図	調査5区出土土器実測図13(1/3)	49
第43図	調査5区出土土器・石製品実測図(1/3)	51
第44図	調査5区出土石製品実測図(1/3)	52
第45図	調査5区出土銅製品・鉄製品・土製品・石製品実測図(1/2・1/3)	53
第46図	調査5区出土石製品実測図(1/2)	55
第47図	調査5区出土石製品実測図1(1/2)	57
第48図	調査5区出土石製品実測図2(1/2)	58
第49図	調査5区・6区出土石製品実測図(1/2)	59
第50図	調査6区出土土器実測図(1/3・1/4)	60
第51図	調査6区出土銅鏡拓影図(2/3)	61
第52図	7号掘立柱建物跡実測図(1/60)	62
第53図	火葬土坑、2号集石土坑実測図(1/20)	63
第54図	調査7区排水(水路)遺構実測図(1/60)	65
第55図	2号巨石祭祀遺構実測図(1/60)	66
第56図	調査8区の石垣と敷石遺構実測図(1/100)	67
第57図	調査7区出土土器実測図1(1/3)	69
第58図	調査7区出土土器実測図2(1/3)	70
第59図	調査7区出土土器実測図3(1/3)	71
第60図	調査7区・8区出土土器実測図(1/3・1/6)	73
第61図	調査7区・8区出土銅製品・鉄製品・石製品実測図(1/2)	75
第62図	調査8区出土土器実測図1(1/3)	76
第63図	調査8区出土土器実測図2(1/3)	77
第64図	調査1区・3区・5区・8区出土古錢拓影図(実大)	78
第65図	東小河内遺跡出土の縄文時代の石器実測図(2/3・1/2)	79
第66図	東小河内谷近世炭焼窯跡と地形測量図(1/100)	81
第67図	近世炭焼窯跡実測図(1/60)	82

表 目 次

第1表	1号掘立柱建物跡計測表	21
第2表	2号掘立柱建物跡計測表	23
第3表	3号掘立柱建物跡計測表	23
第4表	4号掘立柱建物跡計測表	25
第5表	5号掘立柱建物跡計測表	25
第6表	6号掘立柱建物跡計測表	25
第7表	7号掘立柱建物跡計測表	62

I 調査に至る経過

1 事前の経緯

昭和 28 年に西日本一帯に及ぶ大水害が発生した。所謂、28 年大水害として今でも言い伝えられている。特に福岡県を南北に流れる筑後川の氾濫は、今日でも間々耳にする大きな出来事であった。この経験を教訓に治水・利水を主目的とした多目的ダムが筑紫郡那珂川町南畠の狭隘な谷間に福岡県営南畠ダム建設が計画された。これが那珂川総合開発事業である。南畠ダムは昭和 35 年に着工され同 41 年に完成している。

更には、昭和 53 年から 54 年にかけての福岡県内の大渇水などさまざまな水害経験を経て、ひときわ大規模な多目的ダムとして五ヶ山ダム建設が浮上してきた。五ヶ山ダム予定地の上流には福岡市営背振山ダムがあり、五ヶ山ダムは南畠ダムと背振山ダムとに挟まれた形で建設される。

五ヶ山ダムは、昭和 54 年にダム建設に向けての予備調査が開始され、昭和 58 年に実施計画調査、昭和 63 年には建設省（現・国土交通省）によりダム事業として採択され、平成 3 年にダム軸が決定した。

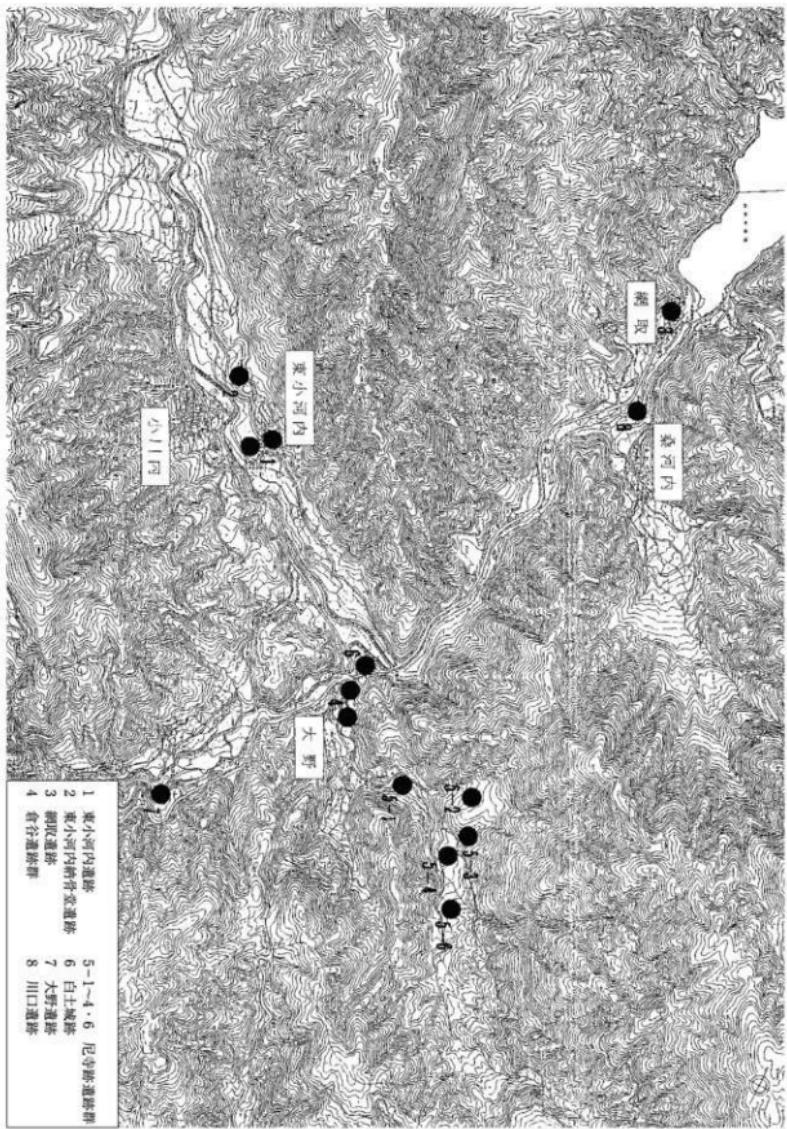
それに先立って、五ヶ山ダム建設に関連する文化財の調査を実施することとなり、当時の福岡県北谷・五ヶ山ダム建設事務所（現・五ヶ山ダム事務所）が主体となり、平成 9 年度から福岡県と佐賀県の文化財部局およびダム関係部局との協議が実施され、6 月には「第 1 回五ヶ山ダム文化財調査連絡協議会」が開催された。これを契機に、福岡県は「五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会」を立ち上げて、ダム建設用地全域の埋蔵文化財を除く文化財および自然史関係、民俗文化財関係の調査を実施する運びとなった。

それとは別に埋蔵文化財については、県土木部（現・県土整備部）河川開発課ならびに五ヶ山ダム建設事務所と県教育庁文化財保護課、那珂川町教育委員会とで調査計画について協議がなされたが、過去の経緯があり、ひとまずは文化財保護課が主体的に係わることとなった。これに基づいて、ダム建設担当課である福岡県土木部（現・県土整備部）河川開発課と文化財保護課とで執行委任の手続きの後、まず、東小河内集落の移転先である筑紫郡那珂川町大字下梶原字入道の入道遺跡群を平成 15 年度から第一次調査として実施し、平成 16 年 12 月までの第二次調査で終了した。

2 周辺の発掘調査

平成 16 年度からはダム本体とそれに関連する調査に着手した。調査地点は、那珂川の支流である大野川右岸の狭い河岸段丘上で、調査地点は 2 個所である。そこでは 17 世紀から 18 世紀頃の墓石や五輪塔を調査している。その後、平成 18 年度には南畠ダムの上流右岸で五ヶ山川口遺跡の調査を実施し、中世頃の五輪塔群を発掘した。五輪塔は散在しており、後世集積されたものであることが判明した。いずれも小規模な発掘調査であった。

平成 20 年度からは国道 385 号線付け替え工事に伴い、網取遺跡の調査が二次にわたり続けられ、やや規模の大きい本格的な調査が行われた。遺跡の内容は、縄文晩期と中世後半頃を中心で、特に中世の構造は濠を備えた 15 ~ 16 世紀頃の館跡が発見され、濠からは李朝期の陶磁



第1図 五ヶ山ダム用地内観測調査地点(約1/17,200)

器、龍泉窯の青磁、明時代の染付や茶臼と多くの鉄滓が出土し衆目されることとなった。

五ヶ山とお茶については、建久2年臨濟宗の開祖栄西が中国の宋から茶の種か木を持ち帰ったとされ、それを背振山石上坊に植えこれがわが国のお茶栽培の発祥の地と一説では言われており、「筑前国統風土記拾遺 第一巻」にも五ヶ山ではお茶の生産が盛んであったことが記載されている。このことを考える時、当該地においては中世後半期頃には既にお茶の生産が盛んで、茶臼を使用し抹茶を生産していたことが考えられる。しかし、茶臼と鉄滓との関連は不明であるものの、少なくともお茶と鉄関連の生産活動を生業としていたことは指摘できる。今後の課題としておきたい。

さらに二次調査中に、地権者から調査区に隣接した近くで壺に納められた備蓄銭を発見し、遺跡の近くに再埋納した旨の話を伺った。地権者と協議の結果、文化財として寄贈する旨の回答があり発掘調査を行ったところ、コンクリート製の井戸枠内に玉砂利と瓦片を充填し、磁器製の火鉢の中に銅錢3,020枚とその上におかれた素焼きの壺が出土した。出土した古銭の初鋳年は古いもので7世紀代、新しいもので15世紀頃に比定され素焼きの壺は近世頃の所産であることから、近世頃に発見されたものが古銭の容器を変えて再度埋納されたと考えられ、このことから古銭と容器の時期差が生じたものと推測される。現在、古銭と壺は九州歴史資料館に保管管理している。

発見によると、近くの斜面に炭窯を作るため掘削していくと出土したらしく、周辺を踏査したところ再埋納した近くに巨岩が鎮座しており、小さな仏像が奉られていたが、炭窯らしき痕跡は発見できなかった。備蓄銭の詳細については、福岡県文化財調査報告書第237集「五ヶ山I」に述べられている。

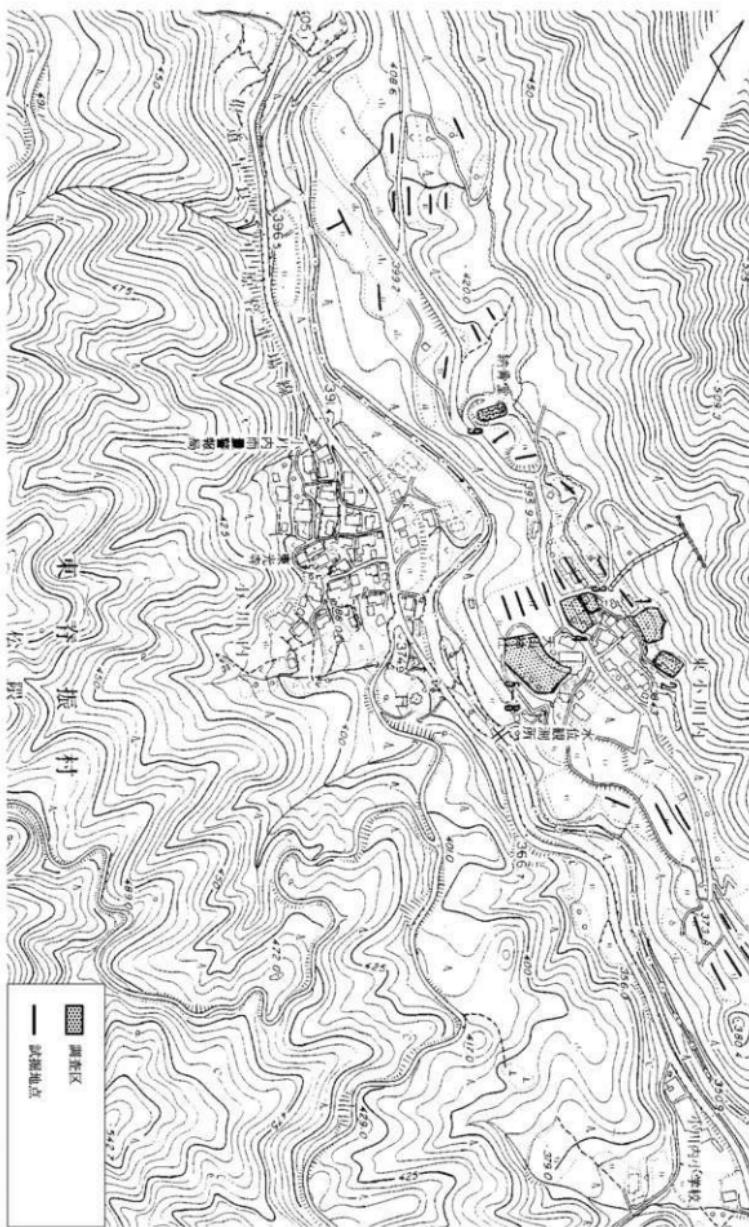
時を同じくして、東小河内谷の高架橋工事を先行する旨の協議が行われた。東小河内谷は、五ヶ山ダム建設用地の中では最も広く深い谷で、那珂川を挟んで右岸に旧佐賀県神埼郡背振村小川集落（現・吉野ヶ里町背振村）、左岸には福岡県筑紫郡那珂川町五ヶ山の東小河内集落が形成されていた。東小河内集落周辺の西側斜面には棚田が設営されており、建設用地内で最も遺跡の存在する可能性が高い所であった。

これらの事情を踏まえて、平成20年度に那珂川町教育委員会文化財担当職員とともに東小河内谷と大野谷、倉谷について全面的な分布調査の後、県による試掘調査に取り掛かることになった。

3 分布調査と試掘調査

上記の理由から、佐々木は網取遺跡の調査から一旦離れ平成20年9月4日から東小河内谷の試掘調査に取り掛かった。試掘調査は、東小河内谷の上流から下流に向けて実施した。まず、作業員による草刈の後、重機によるレンチ掘りの連続で、雑木が密集している所を除き重機の投入できる範囲はすべて試掘調査を実施した。

その結果、東小河内谷の上流域左岸の表土下は岩石や湧水があり遺跡が存在しないことが判明した。さらに、谷の中流域にある納骨堂跡地には多くの五輪塔が集積されていたが、この地はもともと觀音堂があり、それを解体して納骨堂を建設したことであった。既に納骨堂はダム建設のため移転しており、部分的に削平を受けていた。この区域は中世以降の奥津城と考



第2図 東小河谷の試験と調査区 (1/5,000)

えられ、当該地の調査の結果、五輪塔の大半が近世墓により破壊され原位置を保つものは無いことが判明した。

納骨堂跡地の下流にある東小河内集落は、もともと緩斜面の地形に営まれた集落で、そこを籬壇状に造成して家屋建設や水田耕作を行っており、狹隘な谷にしては日当たりがよく居住条件が良好な場所である。その後、住民の引越し終了し家屋が解体された跡地を試掘したところ、解体時に地山が激しく搅乱されており残りの良好な所が少ない状況であった。

東小河内集落の中央を南北に走る幹道の西側斜面は水田耕作が行われ、山神社の直下の水田から中世の土師器や龍泉窯の青磁碗片が出土したことから、一応集落内全域を調査対象とした。当初、東小河内谷には遺跡が存在しないとの推測がなされていたため、遺物が出土した事実を確認したことを踏まえて、改めて分布調査のやり直しを行うことし、那珂川町教育委員会の文化財担当職員と共に東小河内谷、大野谷および倉谷にかけて再度踏査を実施した。

分布調査および試掘調査の結果、東小河内谷については遺物を採集できる個所は多々あるものの、試掘調査では遺跡の確認が出来ないことが多く、遺物はあるが遺跡がないという結果に終わった。

大野谷は若干の遺物の散布は見られたが、遺跡は存在していないことが判明した。倉谷については、東小河内谷よりも狭隘な谷で遺跡の存在は薄いと推測していたが、踏査の結果、東小河内谷と同様に遺物が採集でき遺跡の存在が推測されたため調査対象区域とした。

倉谷の試掘調査は、平成 20 年 11 月 25 日から実施した。試掘調査の結果、数箇所にわたり縄文時代や古墳時代および中世の遺構ならびに遺物を検出した。このため倉谷については、那珂川町教育委員会と協議を行い平成 23 年度から調査に参画することが決まり、発掘調査を一部分担してもらうことになった。倉谷については別途年度を変えて報告する。

以上、分布調査と試掘調査の結果から、本格的な調査は東小河内集落全域を対象に進めることした。本調査は、平成 21 年 6 月 18 日から開始したが、7 月 27 日の大雨により国道 385 号線が土砂崩れで通行止めとなり、その後、9 月 16 日通行止めが解除されたため発掘調査を再開した。第一次調査期間は平成 21 年 6 月 18 日から 7 月 24 日と 9 月 16 日から 22 年 2 月 23 日、3 月 3 日から 15 日までと大雨と積雪のため断続的な調査となった。第二次調査からは、河川開発課との執行委任の手続きから新たに文化財保護課と協定書を交わし委託契約書を締結して、平成 22 年 8 月 30 日から 23 年 2 月 28 日まで実施したが、途中積雪のため平成 23 年 1 月 5 日から 2 月 4 日まで中断した。

平成 21 年度、22 年度の東小河内遺跡の調査関係者は下記のとおりである。

福岡県県土整備部河川開発課	(21 年度)	(22 年度)
課長	後藤俊一	後藤俊一
課長補佐	鍛治寛志	鍛治寛志
課長技術補佐	山本 潔	山本 潔
建設係長	奥村 修	奥村 修
担当職員	秦裕二郎	篠原誠治
五ヶ山ダム事務所		
所長	岡田裕彰	岡田裕彰

庶務課長	鹿子島重樹	鹿子島重樹
工務課長	宇都宮道明	宇都宮道明
工務第二係長	原口和也	
工務第三係長		田口隆二
担当職員	志鶴浩一	志鶴浩一
福岡県教育委員会	(21年度)	(22年度)
教育長	森山良一	杉光 誠
教育次長	亀岡 靖	荒巻俊彦
総務部長	荒巻俊彦	今田義雄
文化財保護課長	平川昌弘	平川昌弘
副課長	池邊元明	伊崎俊秋
参事	小池史哲	小池史哲
調査第一係長	吉村靖徳	吉村靖徳
参事補佐(再任用)	佐々木隆彦	佐々木隆彦
技術主査		岸本 圭
主任技師	岸本 圭	

平成25年度の整理・報告関係者は下記のとおりである。

九州歴史資料館

館長	荒巻俊彦
副館長	篠田隆行
総務室長	圓城寺紀子
参事(文化財調査室長)	飛野博文
企画主幹(々室長補佐)	吉村靖徳
主査(々班長)	小川泰樹
企画主査(総務室班長)	長野良博
主査(保存管理班長)	加藤和哉
主任技師(整理担当)	城門義廣
主査(報告担当)	岸本 圭(現・九州国立博物館展示課)
文化財調査室調査指導員	(報告担当) 佐々木隆彦

II 遺跡の位置と歴史的環境

東小河内遺跡のある福岡県筑紫郡那珂川町は、福岡県の北西部、県庁所在地である福岡市の南に位置する。町の南半分は脊振山麓の山地地形である。町名ともなっている二級河川那珂川は脊振山に源を発し、東流した後に遺跡のある東小河内地区の先にて流路を北に変える。そして町のはば中央を北流し福岡市の中心街を抜け、博多湾に注いでいる。那珂川の上流域は比較的狭い谷部が形成され、筑紫耶馬溪と呼ばれる景勝地とされる。その中で比較的開けた地形となり集落がつくられるのが、南畠ダム周辺と東小河内遺跡周辺である。那珂川は博多湾に注ぐ河川の中でも最も流路延長が長く、35.13kmを測る。

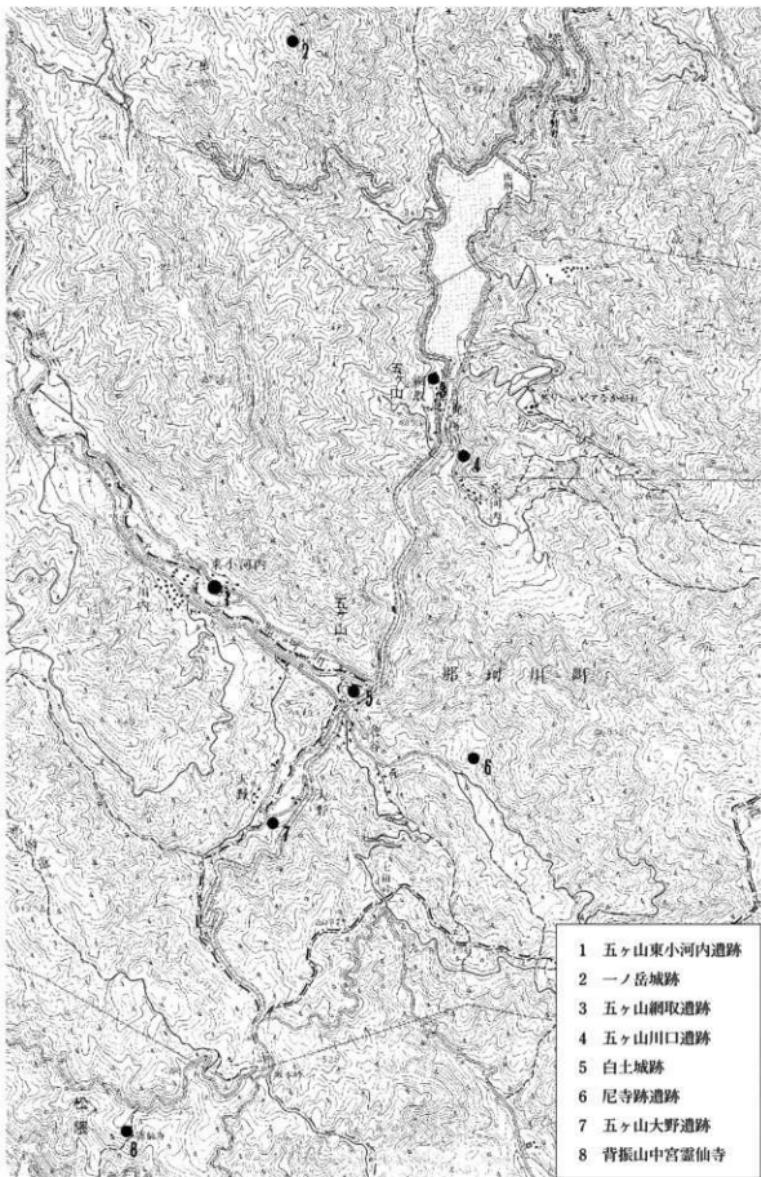
脊振山地は、中央構造線と呼ばれる大規模な断層線により生み出された山地であり、東西に標高1,000mに近い山々が屏風のように連なっている。山地の南側は佐賀平野に向かって急峻な地形となり、山麓には広大な扇状地がひろがる。北側は福岡平野に向かって複雑な形状の尾根が長く伸びる。脊振山地の最高峰である脊振山は標高1,054.8mを測るもので、遠方からもその姿を捉えることができる。このことは古くより大陸から博多湾に出入りする商人や僧侶達にとって航海の目印になったと同時に、厚い信仰を生む対象になった。脊振山頂には脊振山上宮東門寺が建立され、空海や最澄らも入山したという伝承が残る。東門寺や中宮靈仙寺を中心にして多数の末寺や坊が展開したというが、現在は多数の平坦な造成面の中にわずかな堂を残すのみである。これまで佐賀県側で脊振山経塚群や靈仙寺跡の発掘調査が行われ、考古学的な実態解明が試みられている。

また、博多湾と脊振山を結ぶ那珂川に沿うルートは、重要な交通路としての役割を担った。平安時代には筑前・肥前街道として整備され、脊振山の南、皇室領神崎荘（現在の佐賀県神埼市）から脊振坂越（坂本峠越）で、博多の港まで米や貿易品が運ばれたという。

このような重要な交通路であるが故に遺跡周辺には中世山城が点在する。遺跡の北側、標高644mの一ノ岳山頂には、筑紫氏の拠点として重要な役割を果たした一ノ岳城が築かれる。また、遺跡の東側には白土城とされる独立丘陵があり、明確な構造物は認められないものの、筑前・肥前街道と国境との交点であり、地形的にも好位置であるため何らかの役割を担ったと考えるのが自然である。

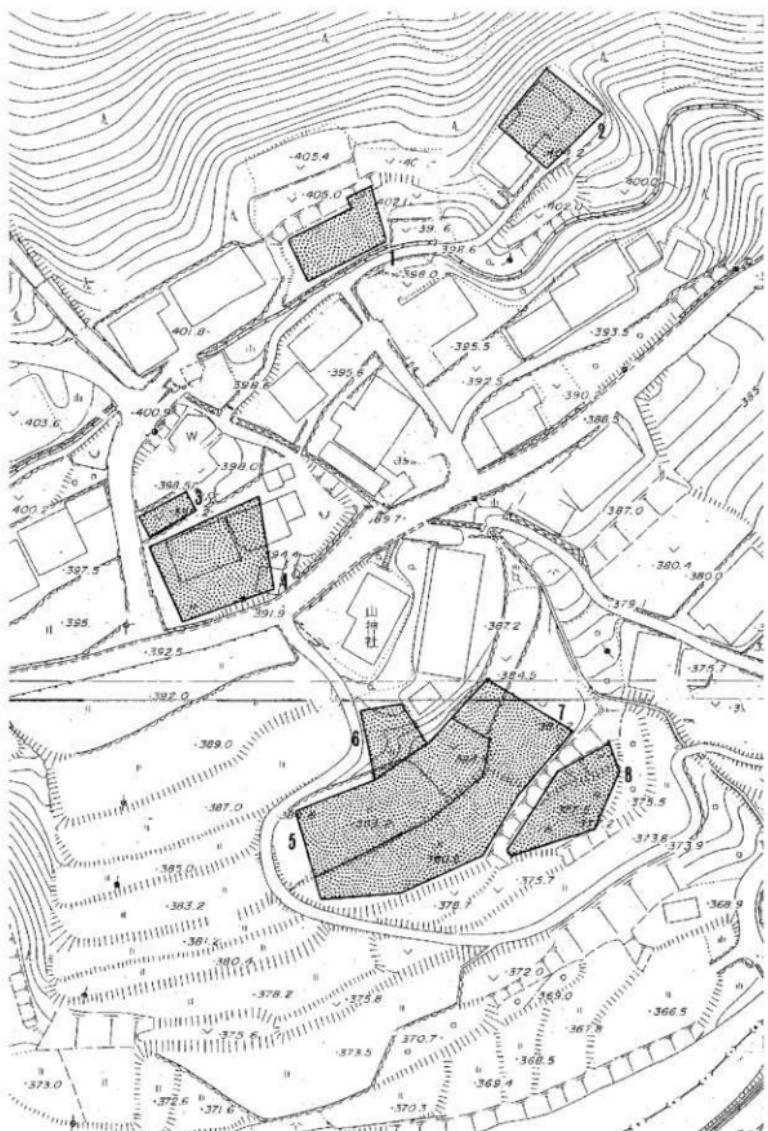
東小河内遺跡の南側直下には那珂川が東流するが、ここが佐賀県との県境であり、かつてから筑前国・肥前国の国境もある。現在でも国境石が39基確認されており、また那珂川の中洲には国境石垣が築かれている。江戸時代には国境の争いがしばしば起こったことが記録に見えるが、こうした国境石や国境石垣の存在からそれを読み取ることができる。

このように、信仰の対象となった脊振山に近い位置であると同時に、筑前・肥前街道に沿う交通の要衝でもあったこと、国境の争いが絶えなかったこと等から、中世から近世にかけて重要な役割を担った地域であったことが想像できる。今回の調査で検出された遺構群から、その歴史の一端を知ることができよう。



第3図 東小河内遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

III 発掘調査の記録



第4図 東小河内遺跡調査区割 (1/1,000)

1 各区の調査

(1) 1区～4区の遺構

①1区の遺構概要（図版1-1・2、第5図）

調査区は南北30m、東西20mの長方形としたが、西側約1/3は斜面となり遺構が確認されず、東側の標高約404mの平坦面を調査対象とした。不整形の土坑とピットを検出したが、建物を復元するには至らなかつた。遺物（第14図）は中世と考えられる土師器が含まれるが、大半が明治以降とみられる陶磁器類であった。

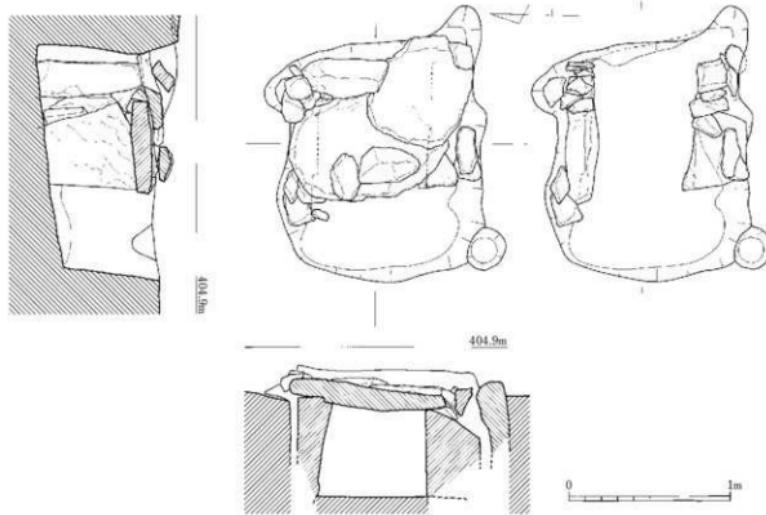
②石組遺構（図版5-

1・2、第6図）

調査区南寄りで検出された石組遺構は花崗岩の扁平な板石3枚で天井とし、側壁もまた扁平な大形石材を直立させて構築する。天井と側壁の間には小石を充填する。奥壁は地山の削り出しで、石材は用いない。床は平坦である。南側に入り口となる掘り方があり、その傾斜は急な立ち上がりとなる。掘り方の規模は幅1.2m、奥行き1.4mを測る。内部には地山に近い色調の砂質土がほぼ一様に堆積し、分層できない。遺物が全く出土せず、時期・性格は不明といわざるを得ない。



第5図 調査1区遺構配置実測図(1/100)



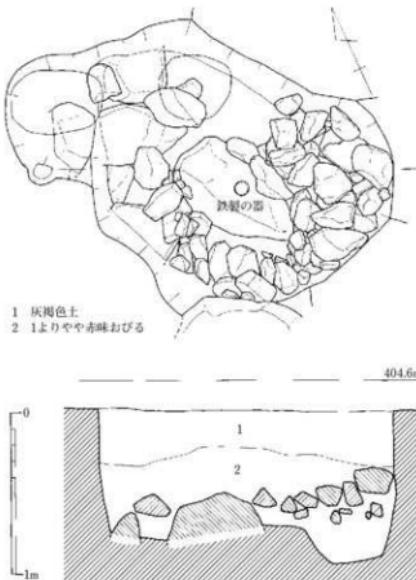
第6図 石組遺構実測図(1/30)

③土坑(図版5-3・6-1、第7図)

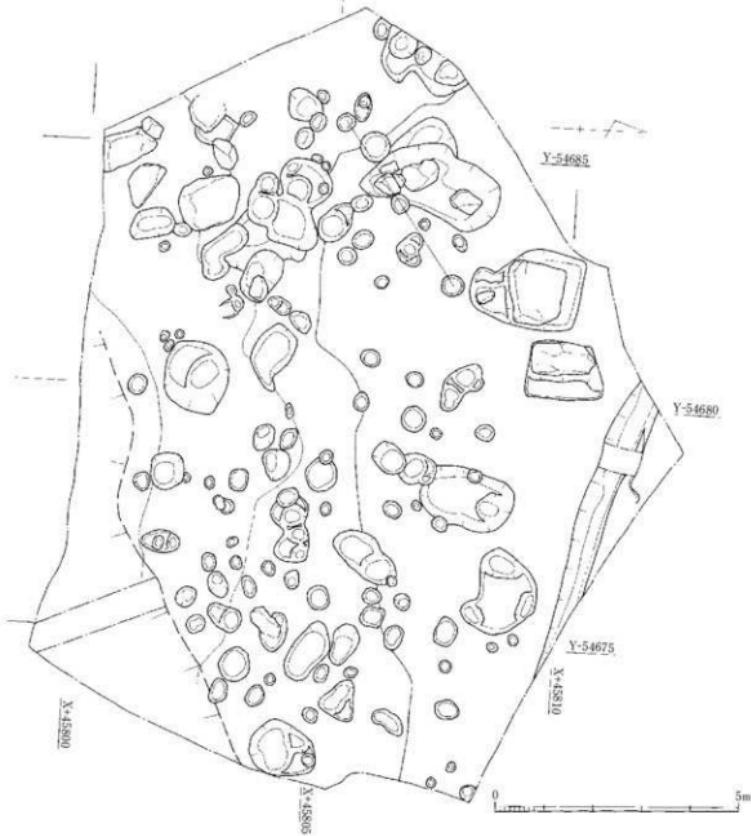
1号土坑は調査区北寄りで検出した。径約6.0mの大きな落ち込みを切る形で位置する。20×25mの円形土坑で、周辺のピットを切る。検出面にて赤褐色の焼土の広がりを複検出したが、その厚さは2.0~3.0cmを測る。遺構の壁は直立に近く、深さは約70cmを測る。土坑の床面中央に地山の巨石が突き出る形となり、南側はU字状に約20cm深くなる。埋土は灰褐色土を基本とし、下層には拳から人頭大の礫が多量に堆積し、石と石の隙間には空間が多い。出土遺物として第14図に掲載した磁器碗・皿がある。明治以降の所産であろう。

①2区の遺構概要(図版2-(1)・(2)、第8図)

東小河内集落内で最も高所の宅地跡で、標高は約404mを測る。山側は急傾



第7図 1号土坑実測図(1/30)



第8図 調査2区遺構配置図 (1/100)

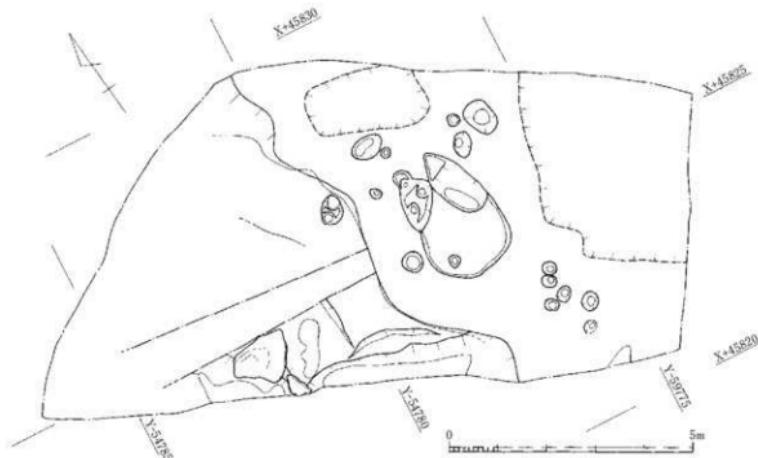
斜がせまり、谷川も急傾斜となる小平坦面である。調査区は南北約10m、東西約15mで設定した。

調査の結果は灰褐色土を含む小ピット・土坑状の落ち込みを多數検出した。土坑状の落ち込みには大形石材を伴うものが多いが、人為的なものではなく地山の石材が突出しているものと判断された。一部に等間隔に並ぶピットが確認されたが、建物としての復元は難しい。

出土遺物（第14・15図）は近世のものが主体であるが、中世のものと見られる土師器も含まれる。ただし調査区の上方の急傾斜地において土師器小片が点在する状況がみられることから、そうした場所から転落してきた可能性も考えられよう。

①3区の遺構概要（図版2-(3)・3-(1)、第9図）

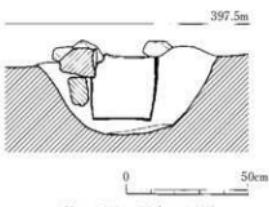
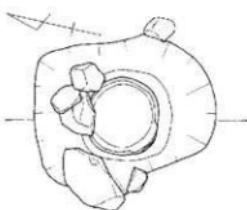
標高397mを測る南北7.0m×東西13.0mの狭い平坦面である。住宅建設による擾乱が著しいが、調査区東側で浅い土坑状の遺構や埋甕・ピットが検出された。



第9図 調査3区遺構配置図(1/100)

調査区西側は谷状に落ち込んでおり、褐色土が堆積するひろがりがみられる。縄文時代の包含層である可能性を考え調査を行ったが、北半分は巨石が多数含まれており掘削できなかつた。調査の結果、最も深い地点で検出面から約1.0m掘削したが、出土遺物は石鏃2点（第65図）とわずかな黒曜石剥片のみであり、土器は出土しなかつた。おそらく4区で検出した同様の埋土の落ち込みに繋がるものであろう。

3区からの出土遺物はごくわずかである。図化できたものは第15図に示す近世以降の磁器のみであった。



第10図 調査3区埋
壟土坑実測図(1/20)

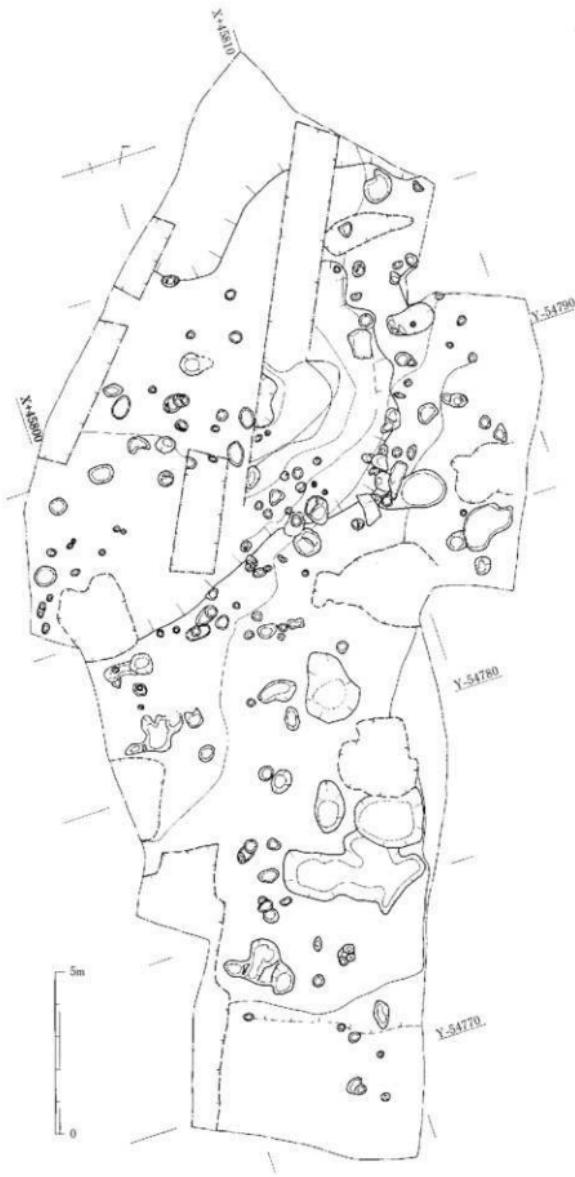
④埋壺土坑（図版6-(2)、第10図）

埋壺は口径26cm、高さ25cmの陶器製。径70cmの土坑中央に設置され、壺の周囲は混じりの多い粘土で固められている。口縁部周辺には拳大の石材が配置されている。おそらく便槽であろう。

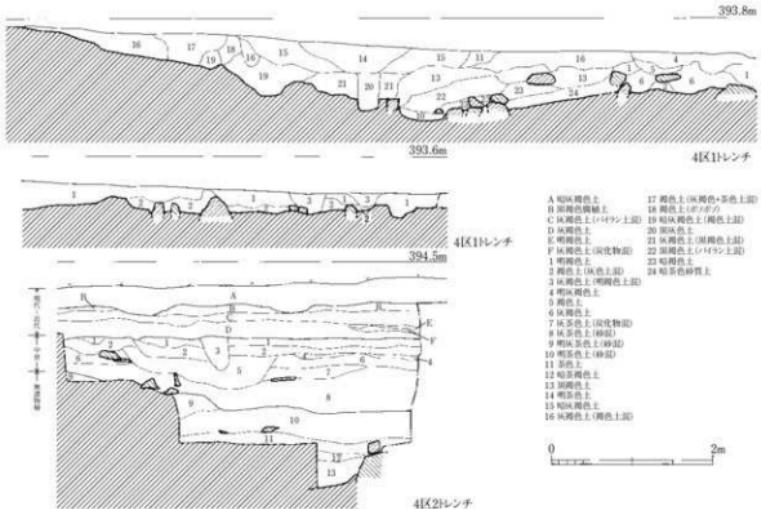
①4区の遺構概要（図版3-(1)、第11図）

3区の南側の下段に位置する標高約395mの広い平坦面で、南北約11m×東西約30mの調査区を設定した。東側約20mの範囲では住宅建設による擾乱が著しいが、不整形の土坑・ピットを検出した。大形の石材を伴う落ち込みが見られるが、人為的なものではなく地山に伴うものと判断される。

調査区中央南端で便槽とみられる陶器製の埋壺検出した。東側約20mの範囲では住宅建設による擾乱が著しいが、不整形の土坑・ピットを検出した。大形の石材を伴う落ち込みが見られるが、人為的なものではなく地山に伴うものと判断される。



第11図 調査4区構造配置図 (1/150)



第12図 調査4区土層断面実測図(1/60)

④埋甕土坑 (図版6-(3)、第13図)

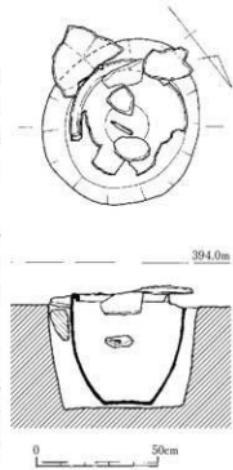
調査区中央南端で便槽とみられる陶器製の埋甕を検出した。口径47cmの直口甕で、胴部は下に向かいすぼまる。口縁部外側に長さ約10cmの楔状の釘2本が縱方向に刺されており、また同様の釘が内側に落ち込んで出土した。検出面の周囲は三和土により土間状に固められる。

調査区西側は3区と同様に褐色土を中心とする堆積がみられた。縄文時代の包含層と考え、トレーニングを行った(第12図)。近世から近代と判断される住居建設面の下には中世に属する遺物包含層が確認され、第15図に示すような土師器片が出土した。

その下層には茶色土層・黒褐色土層が堆積するが、それらの層からは全く遺物が出土しなかった。その下層はおそらく3区の落ち込みにみられた層に続くものと判断される。縄文時代の遺物(石器)がごくわずかに含まれる程度であり、当該期の集落が展開するものではないと考えられる。

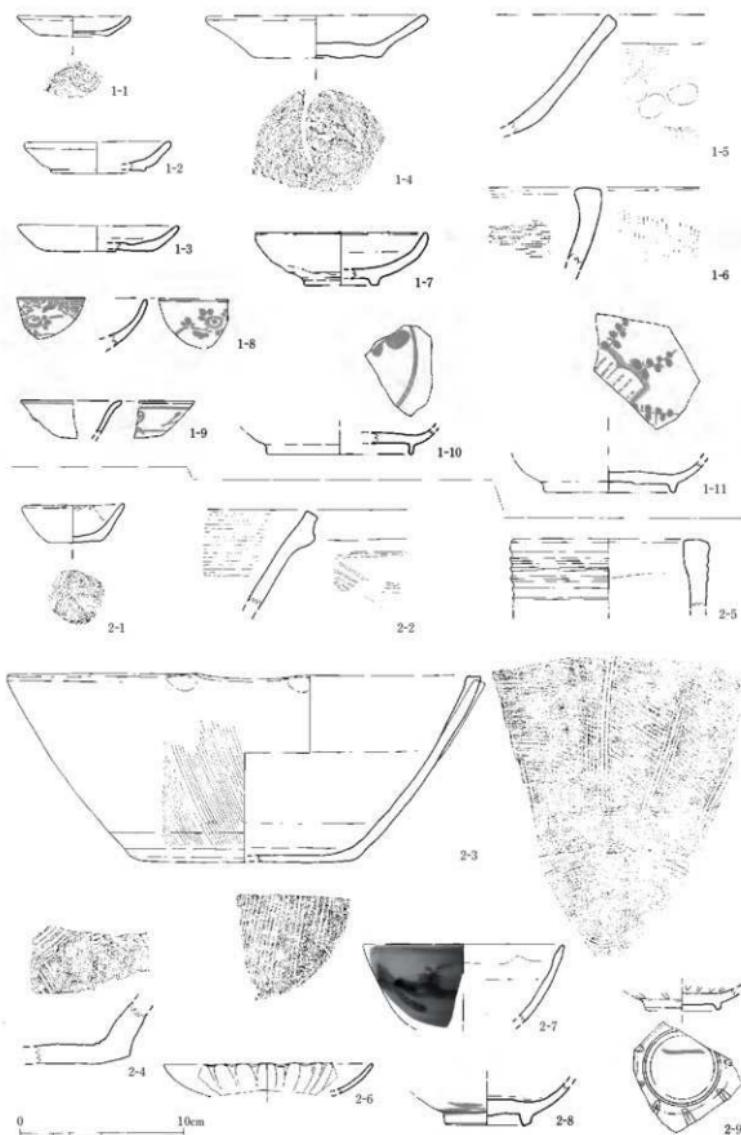
さらに、4区の構造検出調査を行っていた時、過去に東小河内集落の大半が火事で焼失したことを地元の古老から伺った。表土剥ぎの時数センチの厚さで焼土が堆積していたことを確認し、何の焼土かの判断が出来ず苦慮していたためやっと謎が解明された。

以上が1区から4区の調査内容である。東小河内谷では、集落内を東西に走る幹線道路の西側にのみ主要な遺跡が存在し、道路の東側には遺跡がほとんど無いことが判明した。



第13図 調査4区埋甕
土坑実測図(1/20)

(2) 1区～4区の出土遺物



第14図 調査1区・2区出土土器実測図(1/3)

① 1 区の土器 (図版 26、第 14 図)

土師器皿・鉢 (1～6) 1～4 は土師器の皿。底部外面にはいづれも糸切り痕が残る。4 は大径で、油煙が付着することから灯明皿となろう。5・6 は土師器の鉢。

陶磁器皿・碗 (7～11) 7～11 は陶器の小皿。緑灰色の釉が掛かる。8～11 は染付けの磁器碗と皿である。これら 1 区の出土遺物は、土師器は中世に遡ることが考えられる。陶器は明治以降に位置づけられるよう。

② 2 区の土器 (図版 26、第 14・15 図)

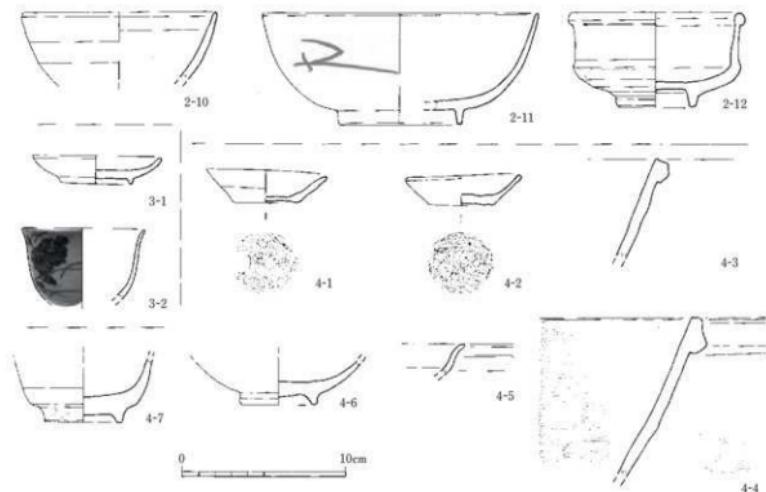
土師器皿・鉢・擂鉢 (1～4) 1 は小形の土師器の皿で、底部外面に糸切り痕が残る。油煙が付着し灯明皿としての用途が考えられる。2 は土師器の鉢。3・4 は土師器の擂鉢で擂目は間隔が広く、底部内面の擂目は連弧状となり、16 世紀代に位置づけられるものである。

陶磁器、染付香炉・皿・碗・鉢 (5～10・12) 5 は端部を肥厚させる直立口縁の陶器であり、香炉と考えられる。6 は磁器皿で口縁は花弁状である。7 は小形の磁器碗。8・9 は陶器碗の底部で、9 は外面に外面に縱方向の彫り込みを連続させる。10 は陶器碗で黒色の鉄釉を掛ける。11 は染付けの磁器碗。12 は陶器の小形鉢で口縁端部は玉縁状に肥厚させる。

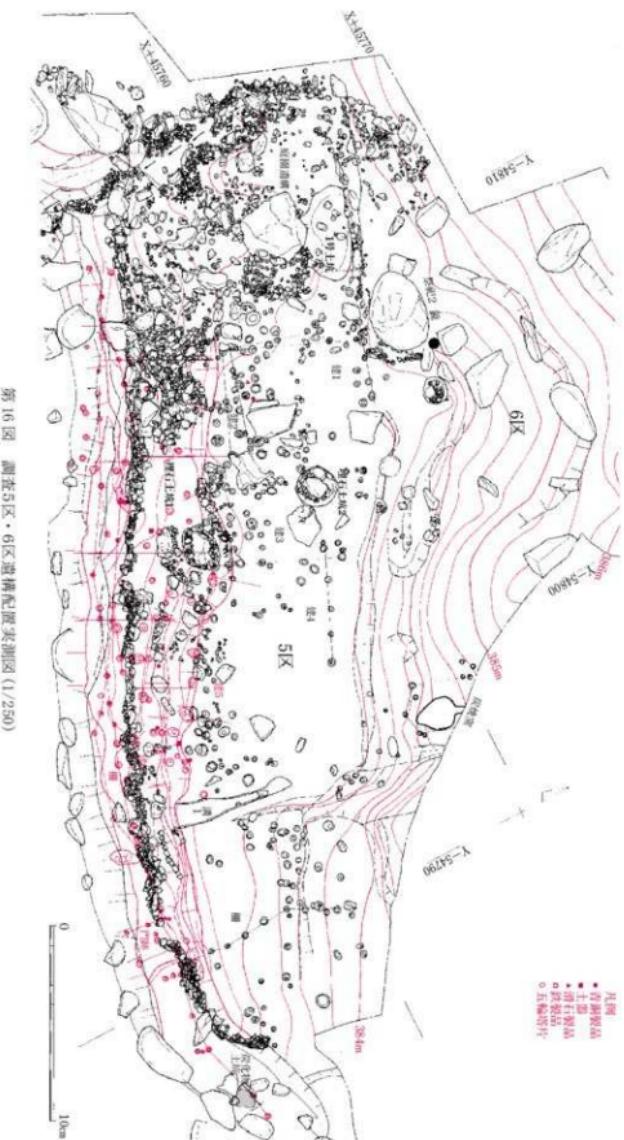
③ 3・4 区の土器 (図版 26・27、第 15 図)

磁器 (3-1・2) 1 は磁器皿。2 は小形の磁器碗。いづれも近世に位置づけられる。

土師器、陶器 (4-1～7) 1・2 は土師器の皿。径は約 7.2cm を測るもので、底部から口縁部に向かって直線的に開く形態。底部外面には糸切りが残る。3・4 は土師器の鉢。直線的に開く体部で、口縁部は方形に肥厚させる。5 は短く外反させる陶器皿。6・7 は陶器碗の底部。



第 15 図 調査 2 区～4 区出土土器実測図 (1/3)



第16図 調査5区・6区地質配置実測図(1/250)

(3) 5区・6区の遺構

①調査区の遺構概要 (図版1-(1)・4-(1)・7-(1)、第16図)

調査5区～6区は集落の中央を南北に走る幹線道路の西側に当たり、一部分は宅地となっていたが大半が水田としての耕作地であった。試掘調査時点での土器の出土や部分的に焼土が確認されていたことで何らかの遺構の存在が推測された個所である。

まず、重機による表土剥ぎと共に現在の石垣を除去していた時、その内側から稚拙な石組み遺構が現れ、少なくとも水田耕作より古い石組みであると確信した。現在の石垣を除去した後、古い石組みの大略を検出した結果、南北に約46.0mの自然石を積み上げた中世の稚拙な石垣を発見した。この石垣で囲繞された個所は出土遺物などから判断して中世の館跡と判断した。以下検出した遺構について詳細に説明する。

②館普請 (巻頭図版1-(2)・2-(1)・(2)、図版7-(2)～9-(1)、第16・17図)

中世の石垣は、現在の石垣から内側約4.0mに築かれていた。調査5区の各トレンチの層序は、石垣に対して直交する形で5ヶ所とテラス1ヶ所を計測した。

第1トレンチは遺跡の北側に設定したもので、この場所は黄褐色のバイラン土と地石の混ざった地山面が-15度以上の角度で斜面を形成している。斜面の上には焦げ茶色土や焼土及び暗灰色と黄白色砂質土、暗黄色粘質土を積み上げ整地面を造っている。地形測量でも分かるように、この個所は全体的に等高線が狭く下段に向かって角度が急になる。石垣の残りも悪く崩壊しやすい所と考えられる。このため石垣の裏込めには多くの花崗岩の角礫が投げ込まれたり組まれたりした痕跡がある。やや崩壊した石垣は地山を整形しき目の石塊を無造作に積み上げている。その下段も地山整形を施し、その上に砂質土と粘質土を交互に積み上げ水平なテラス（犬走り）を設けている。

第2トレンチは、第1トレンチから南へ13.0mの個所に設定したトレンチで、東側は平坦面で南に向かって急激な斜面をなす。傾斜角度は-30度である。石垣の高さはテラスの盛り土下から1.20m強を測る。石垣は割りと整然とした積み方で、裏込めには人頭大の山石を並べた他は暗褐色砂質土と黄色粘土、焼土などで盛土し平坦面を作り出している。石垣の外側は明褐色砂質土と焼土の混ざった黄色粘土で幅1.0mのテラスを設けている。

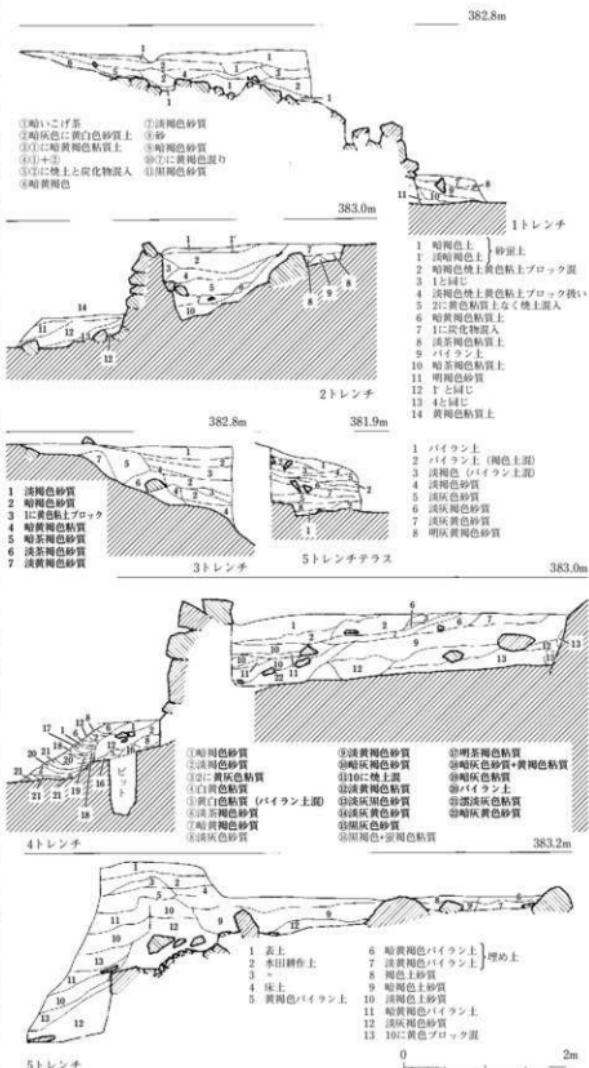
第3トレンチは、最も南東側に設定したトレンチである。石垣の内側整地層のみを計測した。ここは地山角度が-20度で、褐色系の砂質土と黄褐色粘質土を短く交互に積み土して整地している。この場所は平坦面に奥行があり整地範囲が少ない所である。

第4トレンチは、館跡のほぼ中央付近で第1と第5トレンチの間である。ここは地石を境に地山が緩斜面をなし、厚さ80cmほど盛土をしている。褐色系の砂質土と白黄色系の粘質土、それに若干の焼土が混入する。石垣の裏込めには人頭大の花崗岩を投げ込んでいる。石垣の根石の下は40cmほど粘質土を積土しその上から大き目の花崗岩で1.40mの高さまで構築している。石垣の外側には砂質土と粘質土を細かく積み上げテラスを設けているが、先端は削平を受けている。テラスには地山面から深さ70cmのピットが掘られており、柵列のピットかまたは石垣構築時の柱穴の可能性もある。ピット内の覆土は淡褐色砂質土である。

第5トレンチは、第2と第4トレンチの間で、新しい石垣を除去した段階で計測したもので

新しい石垣の裏込め（5と10～13）が残っている。この部分の館に伴う石垣は大半が崩壊している。ここは地山面の傾斜が緩く盛土もほかに比べて薄く地山石が隠れる程度である。石垣の外側には高さ0.8m幅1.10mの盛土でテラスを造り出している。盛土は淡褐色と灰褐色の砂質土を硬く固めている。

以上が5区の整地状況であるが、石垣に囲まれた平坦面は南斜面のわずかな鞍部になった東西25.0m、南北13.0mの広さで、その個所を確保して館の用地としており、後世その面を利用して水田耕作をしていた。更には、調査区の西側は幅9.0mにわたり一段低くなり、そこには大小の花崗岩の角礫が集中した個所があり、特に最西端は小礫が集中しており水流の痕跡が窺われた。この個所は水流に沿って角礫が敷かれ、7区の西側に続く排水施設に繋がっている。また、最西端の石列の西側には礫の集中する個所ではなく、明らかにここで区切られていた。集中する小角礫の中には数点の阿蘇の溶結凝灰岩



第17図 調査5区各トレーナー層断面実測図(1/60)

製の五輪塔の破片も混入していた。

5区のはば中央には箭の痕跡のある花崗岩の大石がある。この大石は箭で破壊しなければ建物は建てられないことから館建設に伴って破壊した可能性も考えられる。この周辺の平坦面は、水田の床土下がバイランドの縮まった地山土で至る所に地山石が露出している。しかし、この平坦面は水田耕作で著しく削平された痕跡は見当たらない。水田耕作のための新しい石垣の高さと中世の石垣の高さを比較するとむしろ中世の整地層に盛土しているようにも看取される。理由は石垣の裏側の整地層に掘られた柱穴は深いものが多く、削られた痕跡は少ないからである。これに比べ縮まった地山面の柱穴は浅く、もともと深く掘る必要がなかったと考えられる。さらには、縮まった地山面に簡略な礎石が置かれていた可能性も否定できない。自然地形が残る調査6区と接する個所の段差はわずかであることからもいえる。

また、5区の東側は平坦部を造らず緩斜面のまま残している。平坦部との境には南北に走る浅い溝が掘られており、この部分が建物との境部の可能性もある。東側の緩斜面には柱穴はあるものの建物の配置は見られないようである。しかしI期(13~14世紀)のテラスの柵列に続く南北方向の柵列が設けられた可能性が考えられる。

③掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (巻頭図版2-(2)、図版9-(2)、第18図)

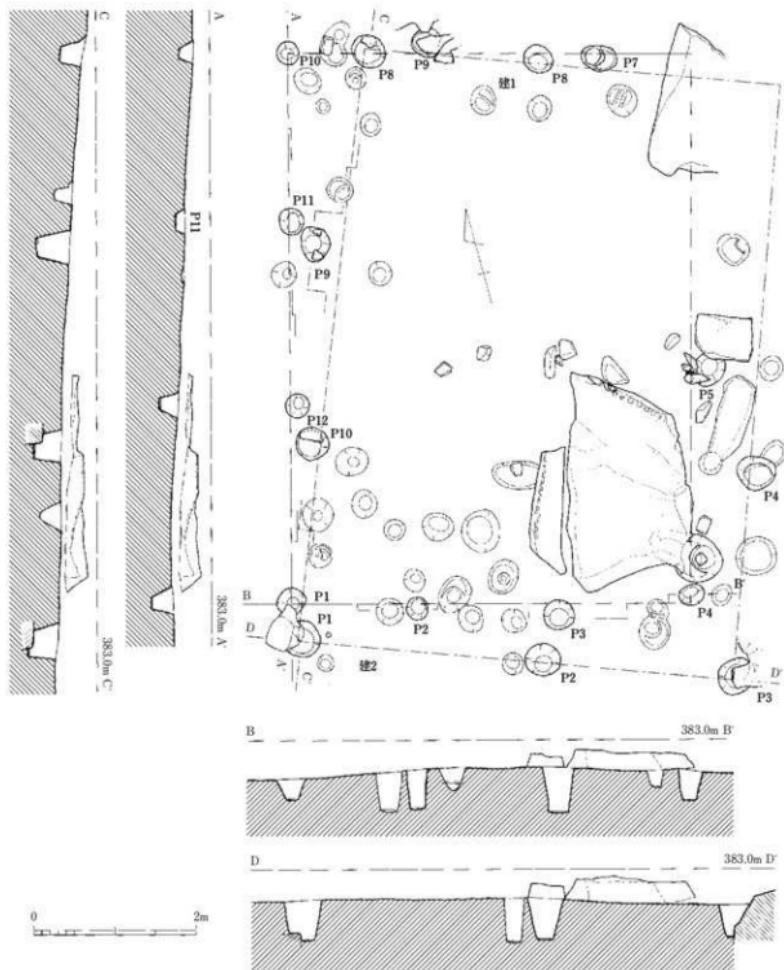
5区平坦部の西側に位置する建物で、規模は梁間3間×桁行間3間である。梁間柱間にに対して桁行柱間が広く造られる。しかし、東側桁行の柱が不明瞭であり、簡略な礎石を用いたことも否定できない。建物の南東端の床下には花崗岩の大石がある。これには箭を打った痕跡があり、この石を破碎した時期が問題となる。つまり、本来大石は大きさからかなり突出していたと見られ、これを避けた建物の建設は無理であり、中世頃の箭の跡と考えたほうが自然である。また、北東側の隅柱は花崗岩の大石があり、この石を柱の礎石に利用していた可能性が考えられる。

個々の柱穴では、全般的に石垣側が深く掘られていて50cm前後である。これに比べ斜面側は20cm前後と浅い。つまり、石垣側は整地層で地盤が脆弱なため深く掘らざるを得ないことを物語っており、奥は地盤の固さ故であろう。桁行の主軸方位はN15度Eを示す。周辺、特に整地層から13~16世紀前後の土師器や青磁の碗などが出土した。

第1表 1号掘立柱建物跡計測表

単位 cm

梁間柱間			梁間間	桁行柱間			桁行間
P1 - P2 150	P2 - P3 170	P3 - P4 160	P1 - P4 490	P1 - P12 245	P12 - P11 225	P11 - P10 210	P1 - P12 675
P7 - P8 —	P8 - P9 140	P9 - P10 170	P7 - P10 (500)	P4 - P5 280	P5 - P6 —	P6 - P7 —	P4 - P7 —



第18図 1号・2号掘立柱建物跡実測図(1/60)

2号掘立柱建物跡（巻頭図版2-(2)、第18図）

1号掘立柱建物跡と完全に重複して建てられた建物で、桁柱軸をわずかに東に振っている。

北側と東側の柱穴は不明な点が多い。地山の固さから簡易な礎石を使った可能性がある。規模は柱間の広い梁間2間×桁行間3間の規模であろう。この建物も1号同様床下に箭の跡のある大石がある。

石垣側の柱穴は1号掘立柱建物跡同様整地層内に50cmと深く掘り安定性を保っている。また、柱穴内には地石を礎盤としているものもある。桁行の主軸方位はN20度Eを示す。同一箇所での重複であり、時間差での建て直しかまたは時期差のある建物の可能性も考えられる。柱穴の重複がないので新旧関係は明らかでない。

第2表 2号掘立柱建物跡計測表

単位 cm

梁間柱間		梁間間	桁行柱間			桁行間
P1 - P2 300	P2 - P3 240	P1 - P3 530	P10 - P9 240	P10 - P9 250	P9 - P8 240	P1 - P8 730
P6 - P7 (230)	P7 - P8 280	P6 - P8 (510)	P3 - P4 250	P4 - P5 —	P5 - P6 —	P3 - P6 (730)

3号掘立柱建物跡（巻頭図版2-(2)、第19図）

1号・2号掘立柱建物跡の東に隣接する建物で、1号・2号埋石土壌、4号掘立柱建物跡と重複していることから、少なくとも埋石土壌と4号掘立柱建物跡は当該掘立柱建物跡とは併存しないことが分かる。新旧関係は、4号建物の柱穴の切り合いがなく3号建物とは不明であるが、埋石土壌より3号建物のほうが新しい。建物の柱穴は東の桁行柱と南側の梁間柱に規則性があるものの、北と西側のそれは不明瞭である。おそらく、地山の硬さから簡易な礎石を使っていたと推測される。また、北よりのP5とP9間の地山の大石には丸く掘り込んだ痕跡が見られる。単なる窪みと考えていたが、P5からP9の梁間の中心部に相当し、柱を置いた可能性が考えられる。そうすると総柱建物になる。現状での規模は、梁間2間×桁行間3間の規模であろう。

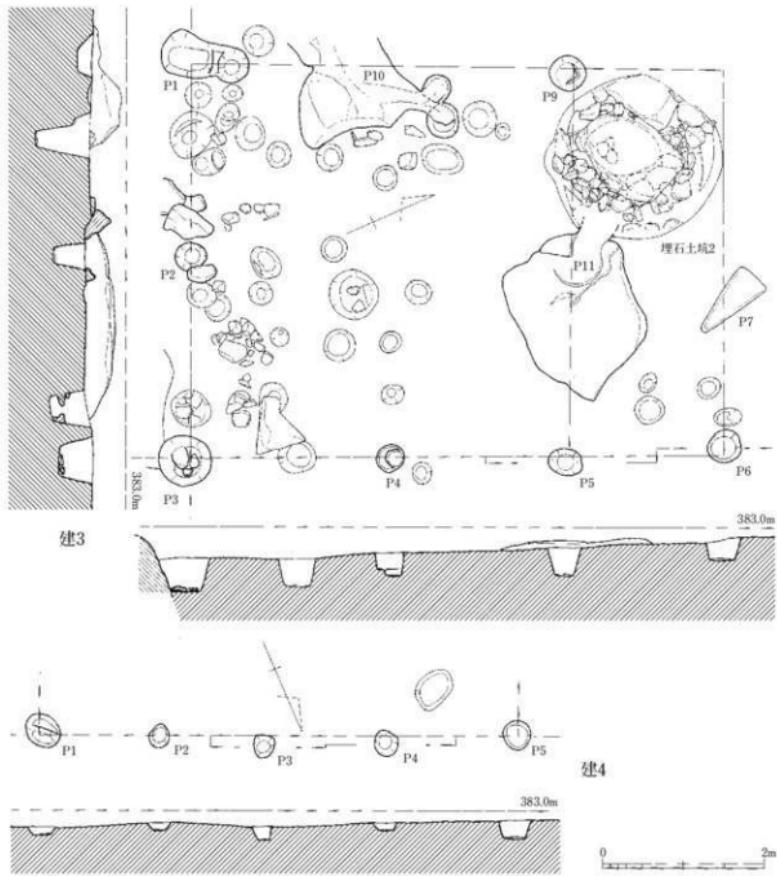
柱穴の中で梁軸のP1にやや疑問が残る。P3の底には小振りの根石を置く。桁行間にに対して梁間間が広く造られ、柱穴の深さも桁行軸の方が地山が硬いためか浅い。桁行軸の方位は2号掘立柱建物に近くN23度Eを示す。

1号から3号掘立柱建物はいづれも桁行を西側の一段低くなった庭園遺構（集石遺構）に向けており、庭園遺構を意識した方位に建てている様にも看取できる。

第3表 3号掘立柱建物跡計測表

単位 cm

梁間柱間		梁間間	桁行柱間			桁行間
P1 - P2 235	P2 - P3 250	P1 - P3 480	P1 - P10 —	P10 - P9 —	P9 - P8 (190)	P1 - P8 (650)
P6 - P7 —	P7 - P8 —	P6 - P8 —	P3 - P4 250	P4 - P5 210	P5 - P6 200	P3 - P6 660



第19図 3号・4号掘立柱建物跡実測図(1/60)

4号掘立柱建物跡（巻頭図版2-(2)、第19図）

調査5区の平坦部北側ほぼ中央付近で検出した主軸を東西に向けた掘立柱建物跡であるが、周辺に対応する柱穴が見当たらないことから構列の可能性も否定できない。ここでは掘立柱建物として扱う。検出した5個の柱穴は主軸線上にあるが、この柱間が梁間なのか桁行間なのかはっきりしない。しかも、柱間は4間で1号から3号までの掘立柱建物跡は梁間や桁行間とも4間のものではなく、柱間が4間の建物は石垣を構築する以前の建物のみである。しかし、これらの建物は柱軸が異なることから、同一時期の可能性は薄い。

柱の深さはいづれも 10cm ~ 20cm と浅く削平を受けた可能性も考えられなくはないが、地山の硬さから本来深く掘削していないと考えられる。現状での主軸方位は N23 度 W を示す。

第 4 表 4号掘立柱建物跡計測表

単位 cm

梁間（桁行）柱間				梁間（桁行）
P1 - P2 140	P2 - P3 130	P3 - P4 150	P4 - P5 165	P1 - P5 585

5号掘立柱建物跡（第 20 図）

調査 5 区の東側平坦部で検出した掘立柱建物跡で、石垣の内側に建てられてはいるものの、石垣裏込めの褐色砂質層を除去した緩斜面からの検出である。建物軸の柱間は 4 間であるが、柱軸が桁行間か梁間かは不明である。石垣裏込め下からの出土であることから、石垣に伴うと考えられる 1 号から 4 号掘立柱建物跡よりは先行する建物であり、本来緩斜面に建てられた建物が新しい普請により東側が平坦に整形されて削平を受け柱穴が削られ建物の西側のみ残った可能性がある。

柱穴では P1 と P5 の隅柱が深く掘られ、柱軸と石垣方向が平行でないことからも時期の違いが分かる。現状の柱軸が桁行間とすれば、建物の主軸方位は N51 度 W を示す。

第 5 表 5号掘立柱建物跡計測表

単位 cm

桁行（梁間）柱間				桁行（梁間）柱間
P1 - P2 220	P2 - P3 190	P3 - P4 150	P4 - P5 170	P1 - P5 720

6号掘立柱建物跡（第 20 図）

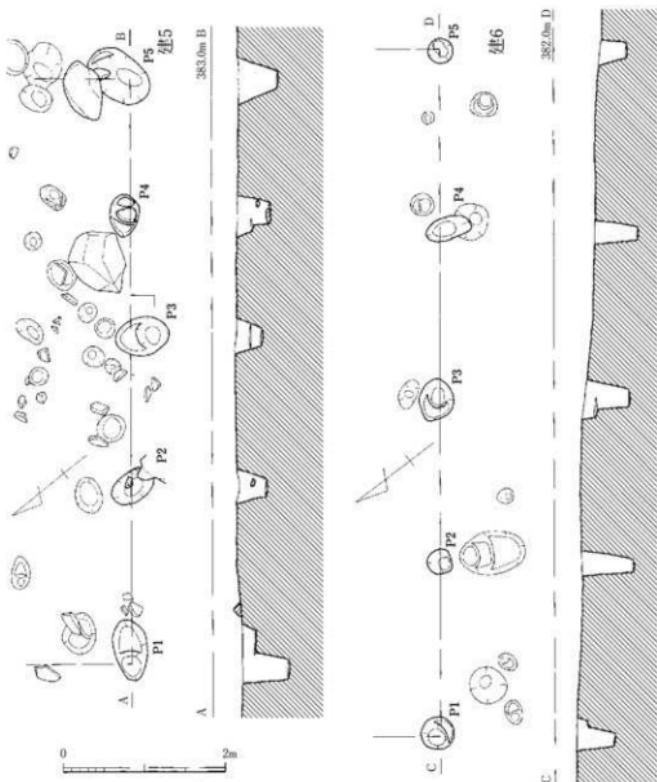
5号掘立柱建物跡同様、石垣とその裏込めを除去した緩斜面から検出した掘立柱建物跡である。この建物も一辺の柱軸のみが遺存しており、桁行間軸か梁間軸かは不明であるが、建物の方位は 5 号掘立柱建物跡とはほぼ同一で、両者の新旧関係は分からぬが建て直しが考えられる。

建物の規模としては、5 号の総柱間の計が 720cm に対して 6 号が 840cm を測り、6 号建物の規模が大きく P5 の隅柱がテラスまで延びている。個々の柱の規模は 5 号掘立柱建物跡の方が大きい。5 号と同じく桁行間とすれば主軸方位は N53 度 W を示し、5 号より若干西側に振れている。

第 6 表 6号掘立柱建物跡計測表

単位 cm

桁行（梁間）柱間				桁行（梁間）柱間
P1 - P2 215	P2 - P3 205	P03 - P4 205	P4 - P5 220	P1 - P5 840



第20図 5号・6号掘立柱建物跡実測図(1/60)

④土坑

1号埋石土坑(図版11-(1)・(2)、第21図)

調査5区のほぼ中央付近で検出した遺構である。当初は単なる地山の大石と考えて調査対象にはしていなかったが、周囲の遺構検出時に大石の周囲の土色が異なるのに気づき精査したところ石の周りに掘り込みのあることが判明した。

大石は断面がおにぎり形をした花崗岩で、平面が2.10m × 1.70m、深さ0.75mの不整円形の土坑に尖り部を上にした形で据えられている。大石の大きさは縦1.70m、横1.10m、高さは1.10mである。周囲の覆土の色は黄褐色の砂質土で明らかに掘り込み面が判別できる。

大石の周りには、人頭大から握り拳大ほどの花崗岩を充填して安定させている。周囲には柱穴が集中しているが、この遺構に伴う柱穴は明らかでない。また、3号建物と重複し、5号と

も隣接していて、何を目的に埋められたのかも定かでない。土壌内からの出土遺物はない。

2号埋石土坑(図版11-(3)・12-(1)、第21図)

調査5区の北側中央付近で検出した土坑で、この土坑は調査当初から掘方の輪郭を確認していた。土坑は3号掘立柱建物跡と重複していて、前述したように隣接する自然石に掘り込まれた窪みが3号建物の礎石として使われたならば3号建物よりも古い可能性がある。

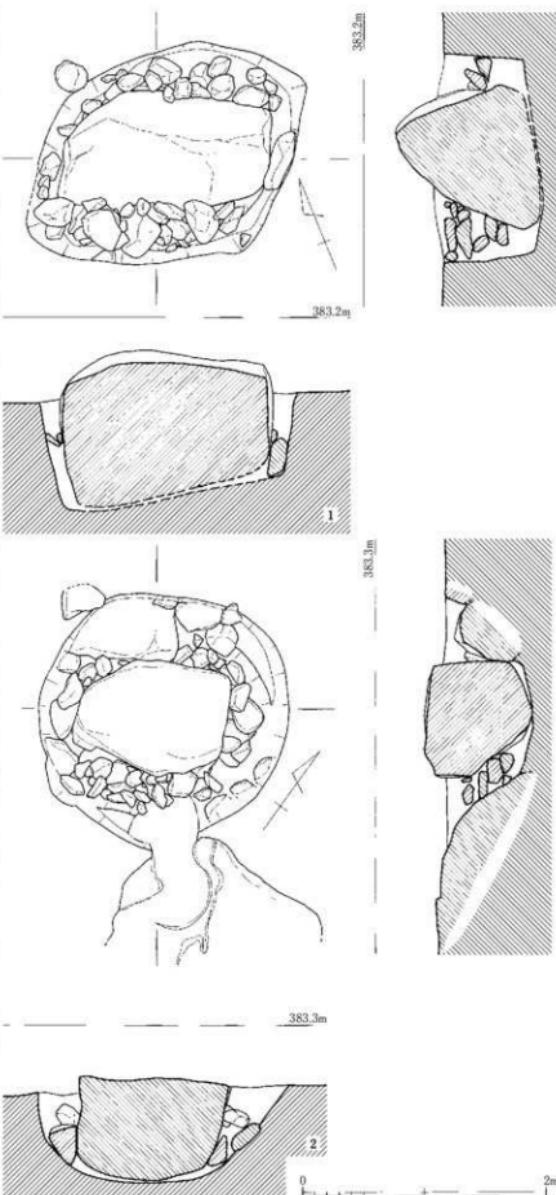
調査時点でこの土坑は当初井戸状遺構を大石で封印したものと推測していた。

土坑は、大きな地山石に接する形で掘り込まれている。平面形状は200mの円形で、深さは0.7mである。その中央に0.9m×1.20m×0.8mの立方体の花崗岩が据えられており、その周囲には大小の花崗岩の角砾を充填し大石を安定させている。

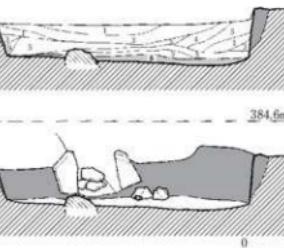
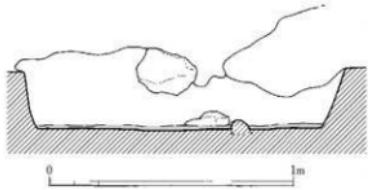
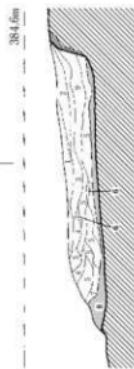
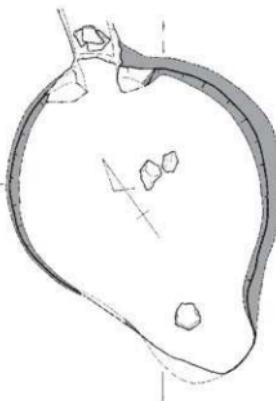
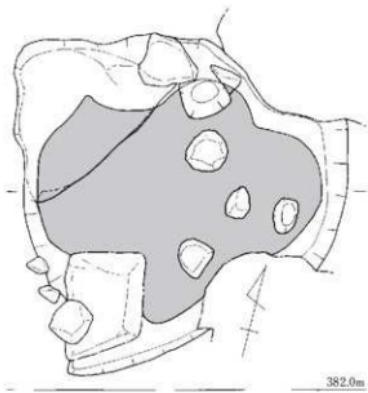
大石の上面は平坦で、封印のための大石と言うよりも何かを置くための石台かも知れない。土坑からの出土遺物はない。

炭化物土坑(図版12-(2)、第22図)

調査5区の最東端のテラ



第21図 1号・2号埋石土坑実測図(1/40)



第22図 炭化物土坑実測図(1/20)

第23図 炭焼窯実測図(1/30)

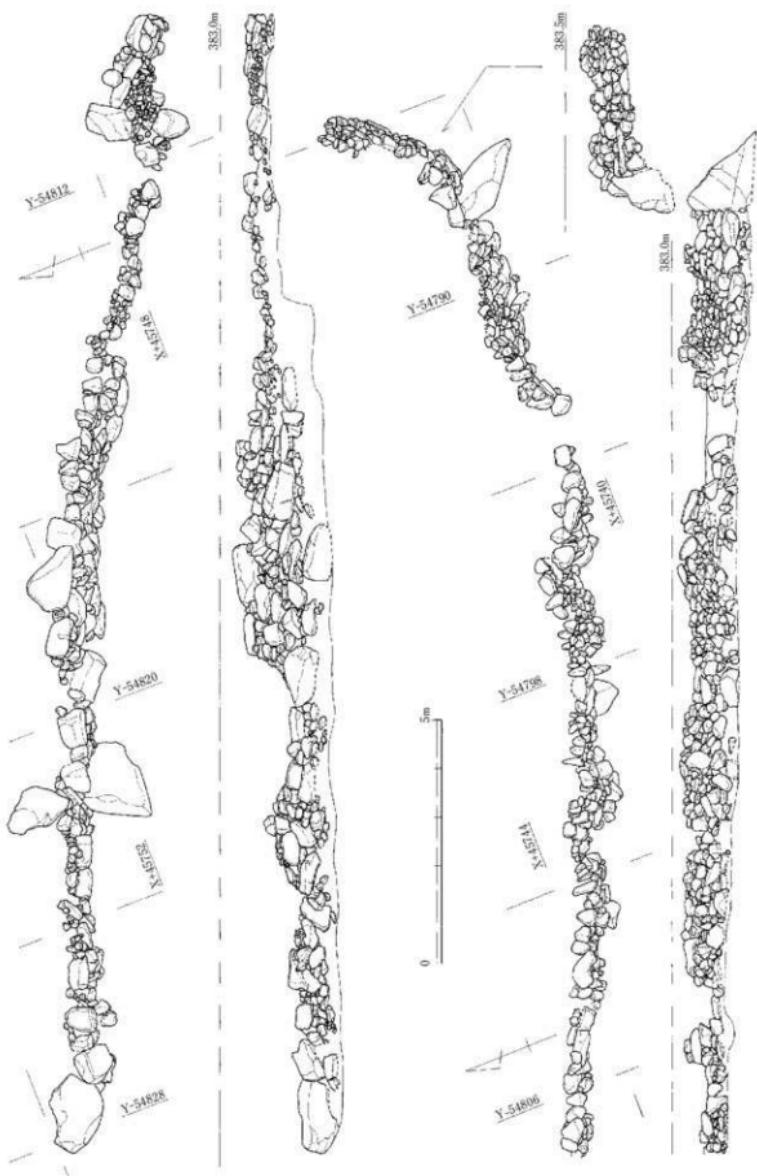
スで検出した下層に炭の細粉が堆積した土坑である。周囲は花崗岩の自然石に開まれており、その窪地に掘られていている。

平面形状は、自然石に開まれておらず不正形となる。炭化物で黒く変色した個所は $1.10m \times 0.9m$ で、土坑の上層は暗褐色土が堆積し、底面に $2 \sim 3cm$ ほど炭化物が堆積していた。底面には 3 個の花崗岩があるが、土坑そのものの機能が定かでない。また、出土遺物も無い。

⑤炭焼窯跡遺構 (図版 12-(3)・13-(1)・(2)、第23図)

調査 6 区の東緩斜面で検出した遺構である。発見当時、径 $1.70m$ の円形状に焼けた部分を検出したが、何の遺構であるかが判断できていなかった。調査が進むにつれて、焼成部と燃焼部があり、焼成部本体が円形を呈し、燃焼部が若干舌状に張り出していた。周囲の壁面は真っ赤に変色しており、強い熱を受けていることが分かる。奥壁中央部両側には、花崗岩の角礫を立て緩い傾斜で煙道が掘られている。煙道内は幅 $0.3m$ で熱で黒く変色しており板石が散在していた。これより上部は民家があり未調査である。

焼成部内には黄褐色や茶褐色の砂質や粘質土が焼土と混ざって堆積しており、最下層には



第24図 調査5区石垣実測図 (1/100)

5.0cmの炭の細粉が堆積していた。床面には3個の花崗岩の角礫があるが、そのほかの出土遺物はない。

以上の結果から、この遺構は小規模な炭焼窯跡と判断した。第17図で示したように、当該遺構の周囲には不規則な柱穴が配されている。柱穴はこの周辺にしか見られないことから、炭焼窯跡の覆屋であろう。更に窯の東側には平行して幅0.6m～1.0mの溝が掘られており、雨水が流れ込まないような施設と考えられる。この溝からは中世頃の土鍋片が出土している。五ヶ山ダム用地内で中世頃の炭焼窯が発掘されたのは今回が初めてで、全国的に見ても類例は少ないのでなかろうか。

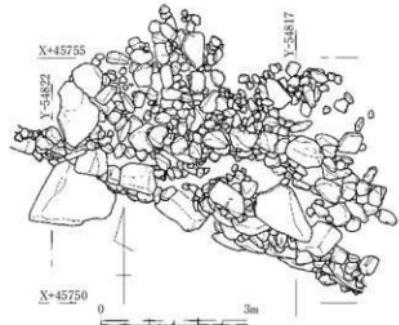
⑥石垣(図版13-(3)～15-(2)、第24～26図)

石垣については(1)の館普請の項で詳細に記述したので、ここでは簡略に述べる。巻頭図版1-(1)・(2)でも分かるように、石垣を検出した5区は東小河内集落の下方に展開する棚田の一角である。調査を開始した時点で現代の棚田の石垣を重機を使って除去していったところ、図版7-2でも分かるように石垣の内側2.5～3.0mで石列を発見した。検出した石列の総延長は46.0m、高さは高い所で1.50m、低い所で0.40mである。

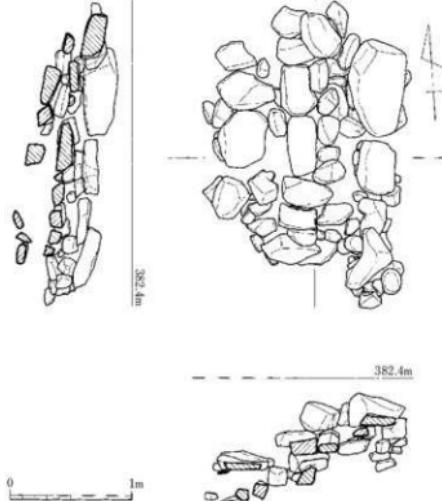
この石列は、稚拙な石垣といえるもので、現地で採集可能な大小の花崗岩を無造作に野面積みしたものである。石垣の東端は地形に沿って弧を描き終わる。東端から西に7.5mの個所で一旦石垣が途切れる。ここは石垣を築く以前の館跡の門跡と符合する所で、石垣構築後も出入り口として使用していたことが考えられる。遺存状態は出入り口と考えられる西側とY軸の-54816～-54820の間が良好である。中央付近は一段しか残っておらず、崩壊したのであろう。

石垣の西側半分は大振りの花崗岩を多用しており、元の地形が急傾斜のためと考えられる。また、庭園遺構(集石遺構)と接する個所の裏込めは階段状に積み上げたり多量の石を使って堅固な造りとなっている。

この石垣と符合する建物は、1号から4号掘立柱建物跡と整地層上面で確認した柱穴群である。出土遺物は、石垣内側の整地



第25図 石垣と裏込石実測図(1/100)



第26図 石垣の階段状裏込石実測図(1/40)

層と石垣内が主である。

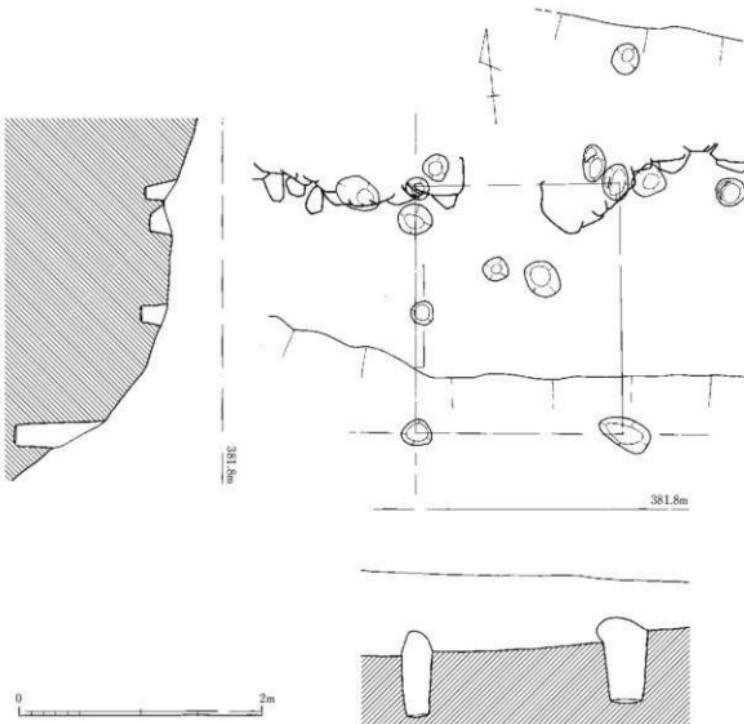
⑦門 跡（第27図）

当該遺構は石垣の調査が終了した後、石垣を除去して調査した結果、5号・6号掘立柱建物と同一層位から相対峙する柱穴を検出した。この柱穴はテラスの東側の奥まった個所に掘られ、これに関連する形で急峻なテラス斜面に深さ55cm～60cmの柱穴が並んで掘られていた。

これらの4本の柱穴は、石垣構築以前に削平して設けられた幅2.00m～2.50m、下段との比高差約2.0mのテラス（犬走り）に設置された施設で、下からテラスまでは階段状かスロープ状の遺構が設置されていたと推測される。この柱穴は、テラスに延びる柵列状の小柱穴に繋がる。この部分に石垣が築かれてないのは以前の出入り口を踏襲したものと考えられる。テラス面は硬く踏みしめられていた。

⑧庭園遺構（図版17-(3)・18-(1)～(2)、第28図）

調査5区の西端に位置する遺構で、館の敷地に隣接する一段低くなった西側の崖地で、現状



第27図 館跡門跡実測図(1/40)



第28図 調査5区庭園造構実測図 (1/150)

での建物レベルとの差は約50cmである。位置的に見ても2号掘立柱建物跡の桁行面に相当し、明らかに関連があると看取できる。

調査当時、単なる集石遺構ぐらいしか考えていなかったが、写真および図面を俯瞰すると、一定の規則性が見て取れる。つまり、北側に隣接する巨石を奉り祭祀を挙行する直下には簡素な石組みが造られ、傍には梢円形の土坑が掘られている。隣接する南には地石の巨石があり、それを中心に低位置に造られている。地石の東側低斜面には明らかな張り石を設けている。石原の中に建物から延びる柱穴が中央部まであるが、これが何なのかは不明である。因みに、東の石群は石垣の裏込めである。

庭園の西端にはやや大振りの地山石と拳や人頭大の石を並べ館の敷地の境界にしており、その西側には全く石は無い。この石列の内側には大小の石を積み上げ流路として造作しているようすが看取できる。この北側延長線上には同じように集石が見られる。本来ここを流れる水路が存在したことを推測させる。また、積み上げられた流路に使われた石には僅かではあるが阿蘇の溶結凝灰岩製の五輪塔の破片が使われている。古い五輪塔を破壊したのであろう。

流路と石垣が接する個所から7区の排水施設の間には扁平な石が底に敷かれており、明らかに水流を意識したかのようである。出土遺物は、土師器の他青磁碗や人形手と呼称される龍泉窯の青磁碗などがある。

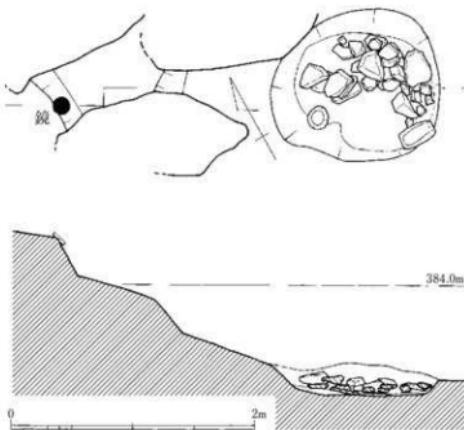
⑨祭祀遺構

1号巨石祭祀跡（巻頭図版3・図版19-(1)~(3)、第29図）

調査6区の西端近くにある花崗岩の巨石傍で検出した。巨石の大きさは長さ4.0m、幅は2.80m、高さは2.0m弱の卵形をしている。

巨石の南と東傍には簡易な石列を組んでおり、更に石の下には山石を詰め込み安定させている。巨石の東側にやや大振りの花崗岩があり、その中の二個の石に挟まれる形で和鏡が背を上にして置かれていた。和鏡には布片や木片などの付着が見られないことから直接埋納したと推測される。

その東側の5区と6区の境には1号集石土坑が検出された。この部分は、抉りを入れたような平坦部が造られ、そこに1.40m×1.20m、深さ0.16mの梢円形の土坑が掘られていた。この土坑に立つと鏡を正面に見据えることが出来る。中には花崗岩の角礫が充填されており、何のための掘り込みなのかは不明である。出土遺物は無い。



第29図 1号集石土坑、1号巨石祭祀遺構実測図(1/40)

(4) 5区・6区の出土遺物

① 5区の土器・石製品 (図版 27 ~ 37・40 ~ 42、第 30 ~ 44 図)

土師皿・壺 (1 ~ 62) 数多くの皿や壺が出土している。出土場所もさまざままで石垣裏の整地層、石垣下層、外側のテラス、建物の柱穴内などからである。すべてが糸切り底で大半が上げ底のつくりである。1 ~ 28 と 31・33・36・39 が体部から口縁部にかけて短く直線に延び、中でも 12・13・15・17 はわずかに丸みを持つ。口径は、18 の 6.0cm から 12 の 9.0cm 内に収まり、器高も 3.0cm 以内である。19 は口縁部に油煙が見られ、灯明皿に使用したものであろう。29 は丸みのある体部である。32 は器壁が厚く口縁部がわずかに外反する。34・35・37・41・45・47・51・53 ~ 62 までは口径、底径がやや大きなタイプで全体に薄手のつくりで、体部が膨らむものや直線的延びるものなどがある。34 は口径 11.6cm、器高 3.0cm である。法量の大きいタイプとしては 55 の口径 15.0cm、底径 10.9cm、器高 3.8cm があり、石垣の下層からの出土で館の上限を示していると考えられる。同様のタイプが 7 区の巨石祭祀遺構の傍から出土している。48 の底部内面には魚の線刻がある。62 は大振りで底径が 6.0cm を測り、直線的に開くタイプである。ほとんどが灰黄色の胎土である。掲載した 30 は白磁の皿で体部が直線的で口縁部が若干外反する。釉調は乳白色を呈する。

土鍋 (63 ~ 105) 土師質鍋は 63 ~ 104 がある。出土場所は、整地層、石垣外のテラス、石垣下層、庭園遺構、と様々であるが、63 は唯一 1 号土坑内からの出土である。出土土器では最も多い器種で、煮炊きに使用したため破損が激しく、必然的に出土量が多い。口縁部に特徴があり、大半が口縁部を下方に肥厚させるタイプである。このタイプには胴部下半に低い凸帯を巡らす。底部は不安定な平底を呈する。調整はハケとナデで仕上げ、指圧痕が多く見られる。

ほとんどが土師質で、15 世紀前後に比定されるタイプである。掲載した 77 は口縁部が肥厚するものの、須恵質で煤の付着が見られないことから用途の異なる鉢であろう。所謂中世須恵器で捏鉢かも知れない。もうひとつのタイプは口縁部をわずかに肥厚させるか直線的に開くもの、わずかに外反させる 82 や 99 のタイプなどがある。この形態の変化のものは共存する。

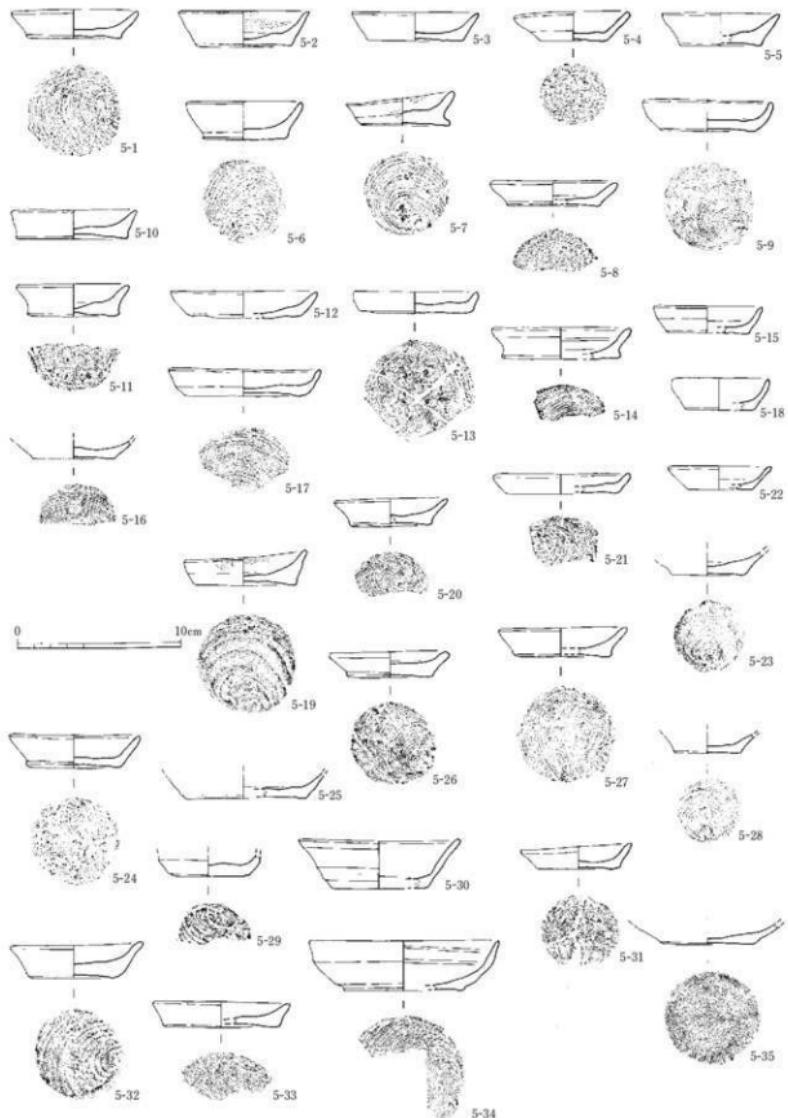
図示した 104 は口縁部を肥厚させ内傾するタイプで、他の用途が考えられるが「応土鍋」として扱った。掲載した 105 が唯一の瓦質鍋で、器壁は厚く造られ底部付近に低い凸帯がめぐる。時期的には 16 世紀代に降るものであろう。

擂鉢・捏鉢 (106 ~ 122) 106 から 113 は擂鉢で擂目が 4 本単位から 8 本単位のものである。112 は石垣外のテラスから、111 は石垣下層から、その他は石垣の整地層からの出土である。壁面調整は外面がナデ、内面は横方向のハケ目仕上げである。

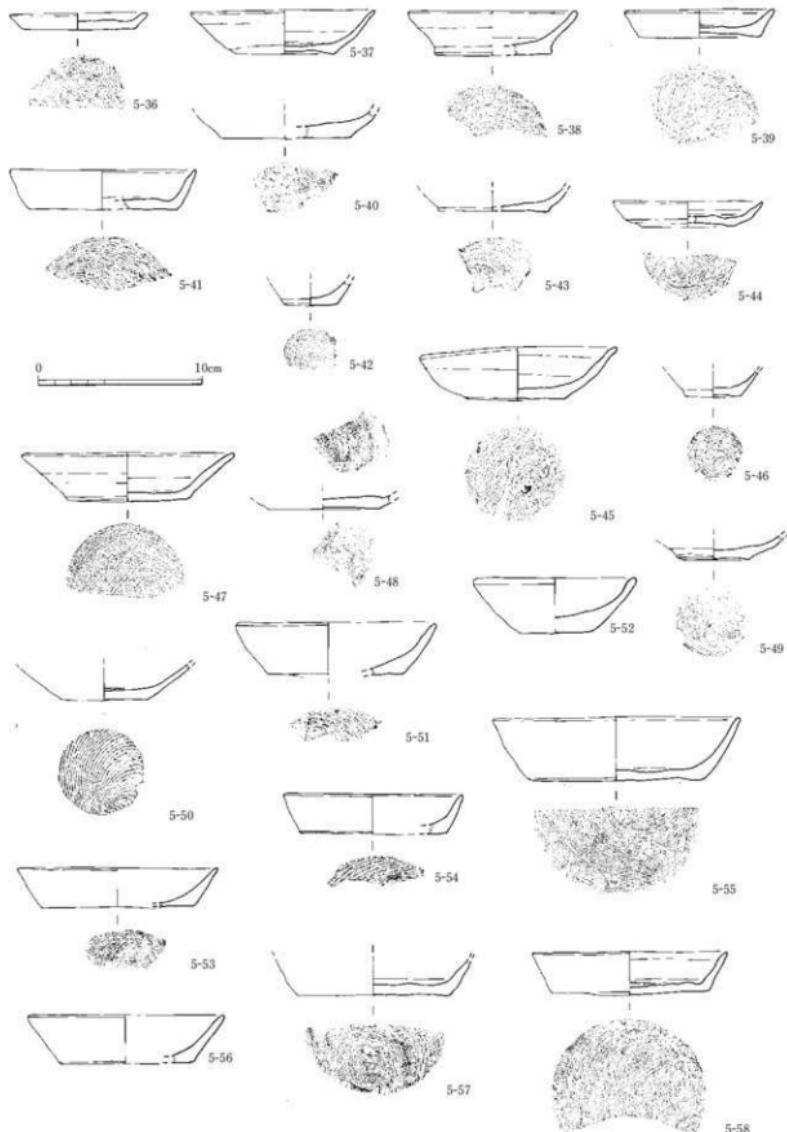
114 から 122 は捏鉢で 118 には一部に擂目が見られ擂鉢であろう。このうちの片口は 114・118・122 がある。114 は土師質の捏鉢で内面ヨコハケ、外面ナデ仕上げで庭園遺構からの出土である。115 は 15 世紀代の捏鉢で瓦質である。116・117・119・120 は東播系の捏鉢である。117 は瓦質で在地系であろう。他は須恵質である。121 は瓦質で 122 は片口の土師質である。

足鍋 (123) 所謂 15 世紀から 16 世紀に出現する周防型の足鍋の口縁部片である。足鍋の出土はこの 1 点のみである。瓦質土器で口縁部内面から外面はナデ、屈折する内面下は粗いハケで仕上げる。庭園遺構からの出土である。

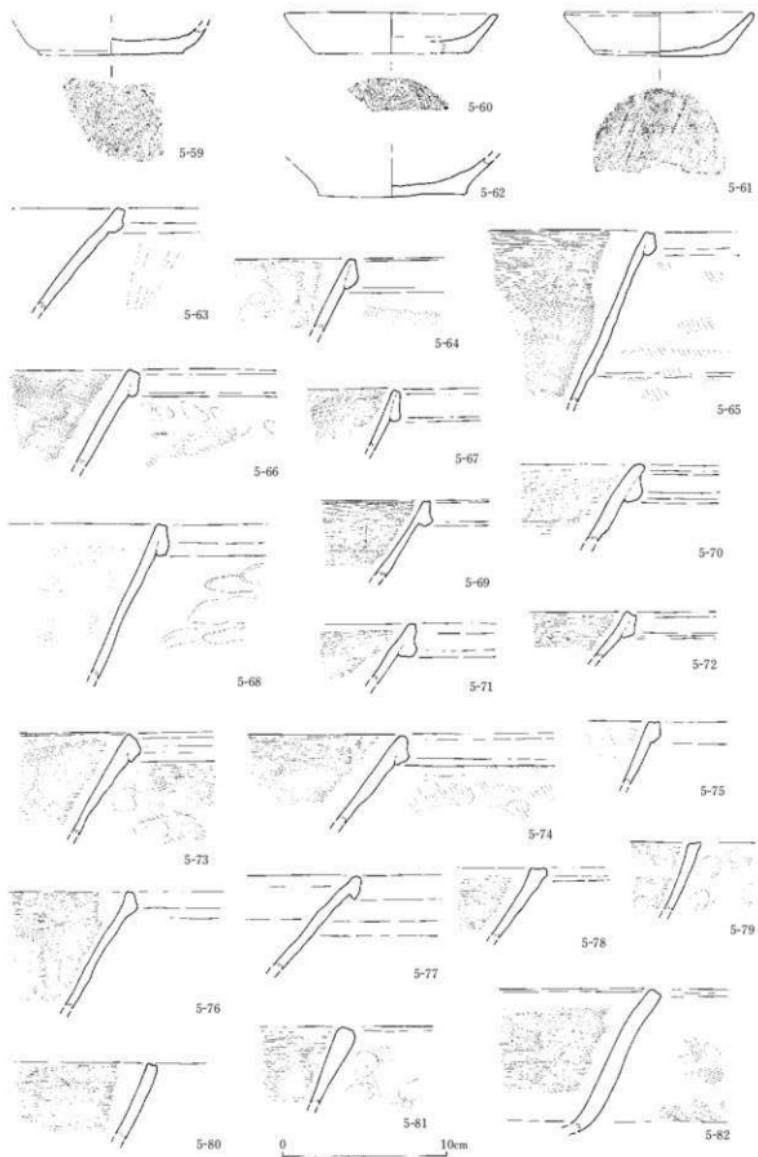
茶釜 (124 ~ 138) 茶釜も小片を入れるとかなりの数が出土している。124 は直に立つ口



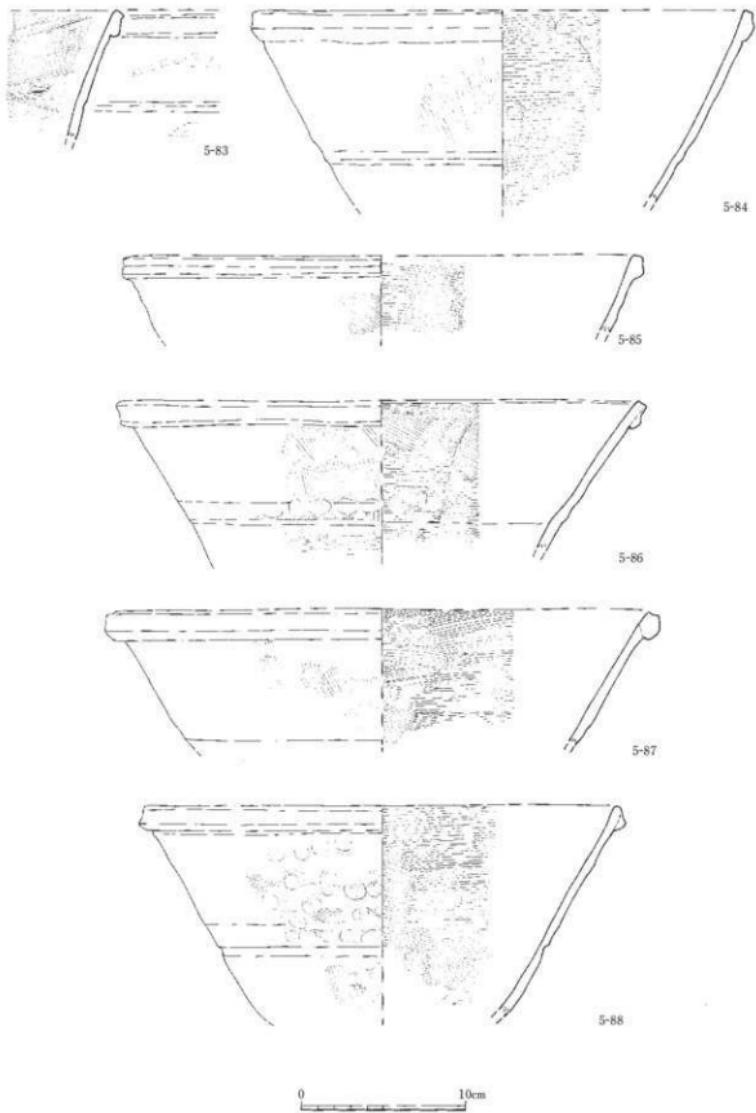
第30図 調査5区出土土器実測図1(1/3)



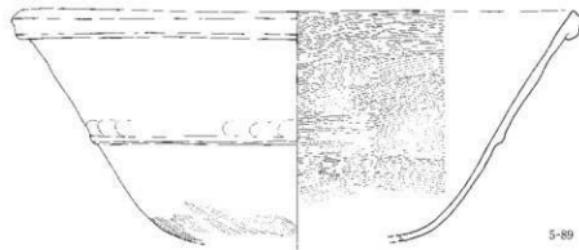
第31図 調査5区出土土器実測図2(1/3)



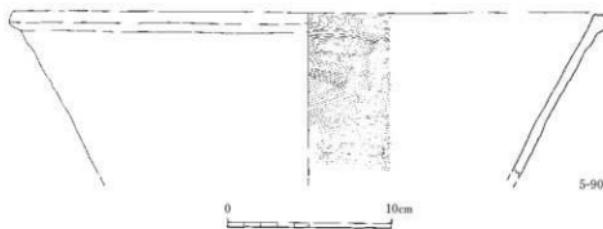
第32図 調査5区出土土器実測図3(1/3)



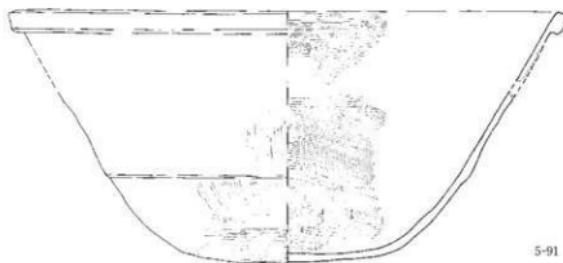
第33図 調査5区出土土器実測図4(1/3)



5-89



5-90



5-91

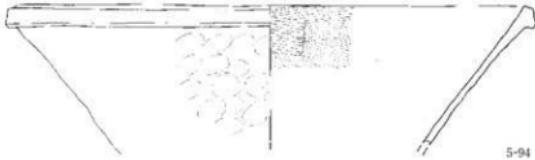


5-92

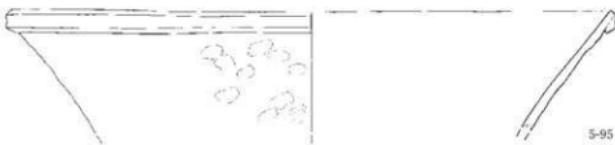


5-93

第34図 調査5区出土土器実測図5(1/3・1/4)



5-94



5-95



5-96

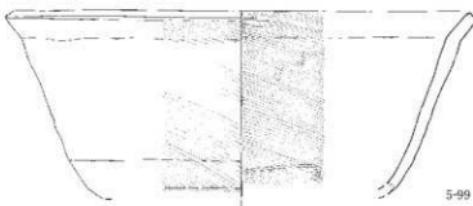


5-97



5-98

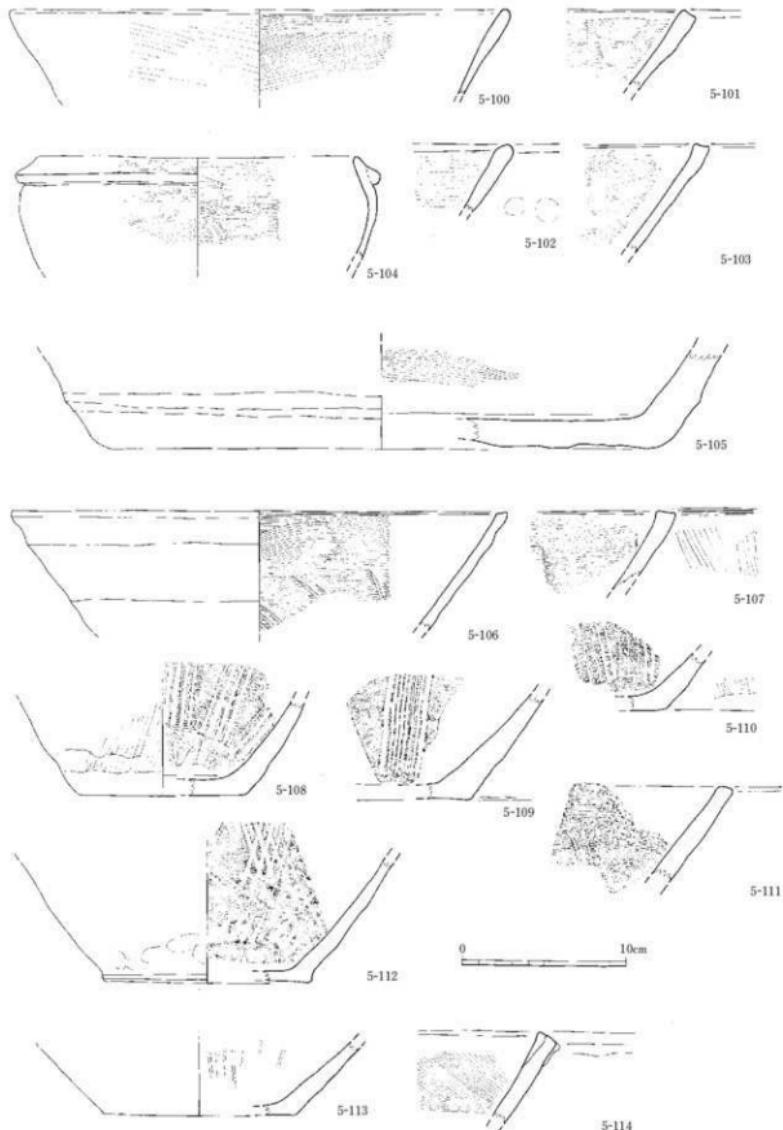
0 20cm



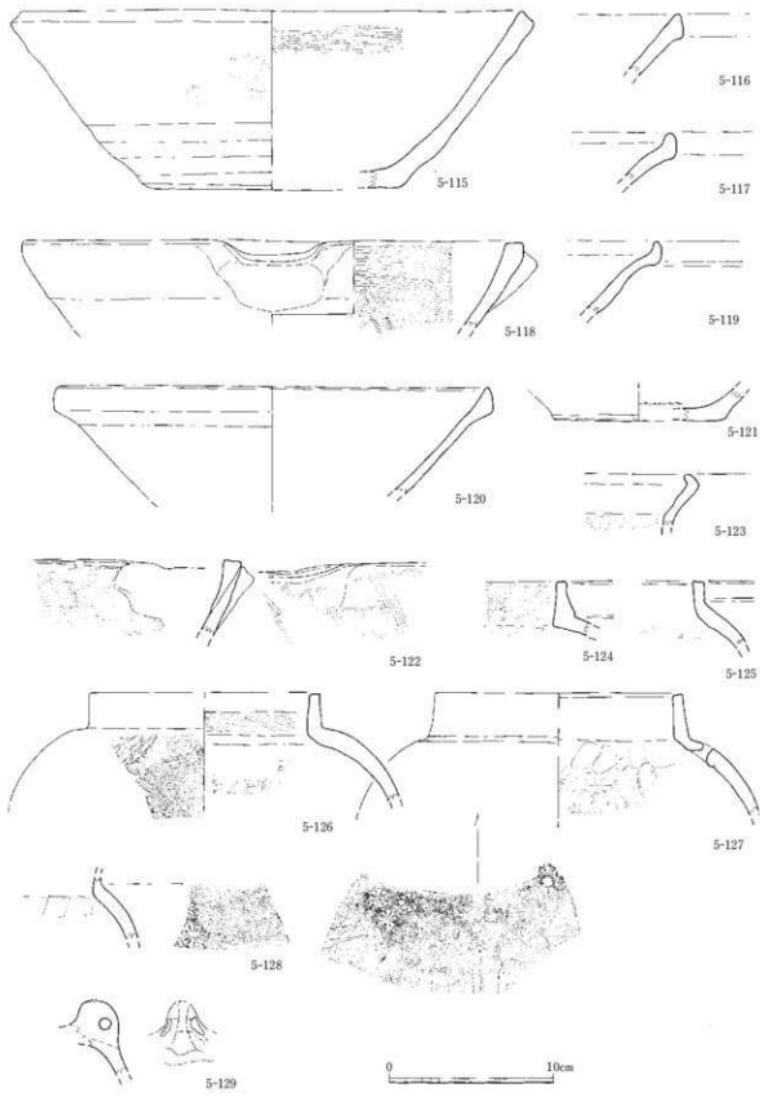
5-99

0 10cm

第35図 調査5区出土土器実測図6(1/3・1/4)



第36図 調査5区出土土器実測図7(1/3)



第37図 調査5区出土土器実測図8(1/3)

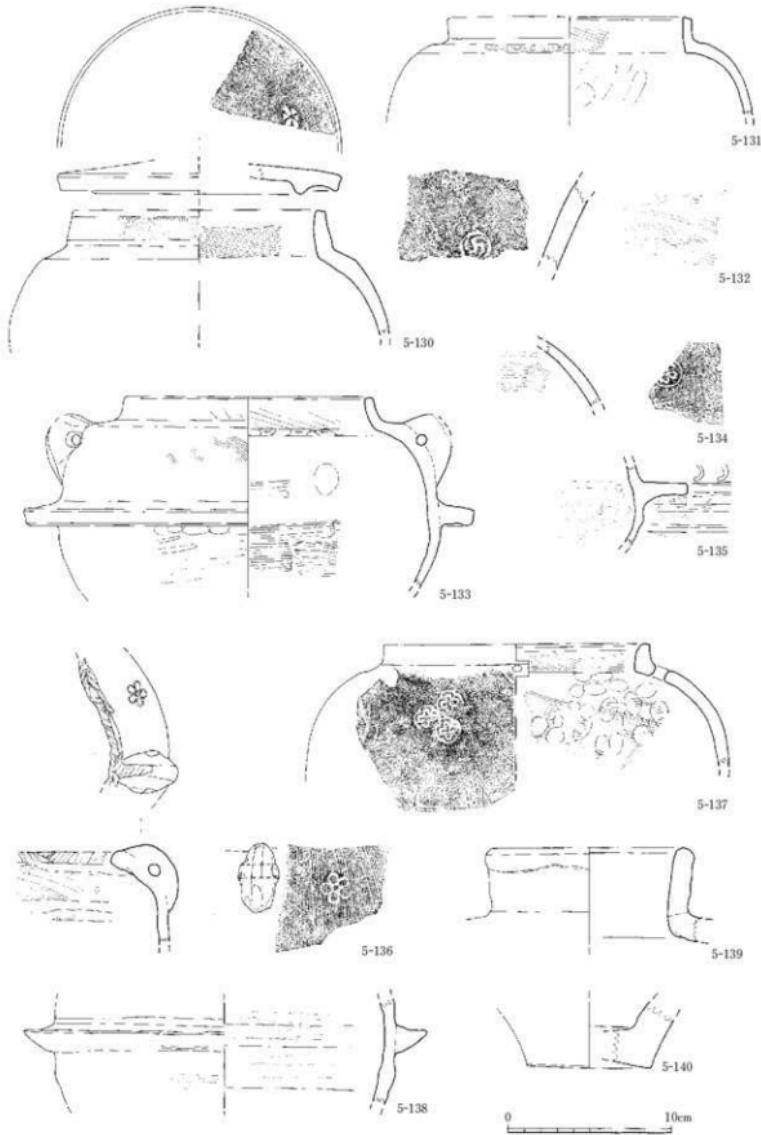
縁で口縁基部を粘土で補強し分厚く作る。124と126を除く茶釜は口縁部が短いか内傾することから、新しい時期が考えられる。124は時期的には13世紀から14世紀の所産であろう。土師質で整地層上面からの出土。125は瓦質の茶釜で、口縁部が短く内傾する。126は直に立つ口縁部を持ち、肩の張りは強く丸みを有す。肩部には木の葉文をヘラで描く。調整は外面がナデ、内面はハケが残る。出現期の茶釜の可能性があり、13世紀末頃に比定されると考えられる。

127も土師質で内傾する長めの口縁部を有し、肩部はややなで肩である。肩部には外から内側に孔を穿つ。形状から126よりも後出するタイプである。肩部には三つ揃いの菊花文を押印している。5区の柱穴からの出土である。128は瓦質の小片で口縁部は短く撫で肩である。肩部には菊花文をスタンプする。129は茶釜の把手で土師質である。130は石垣の外から出土した茶釜で、内傾する長めの口縁部に有段の張りの有る肩部を持つ。土師質で暗褐色の胎土である。復元口径は15.4cmで蓋とのセットで使用したと考えられる。蓋は小片であるが身受けの凸帯がめぐる。蓋の表面には花文を刻印する。

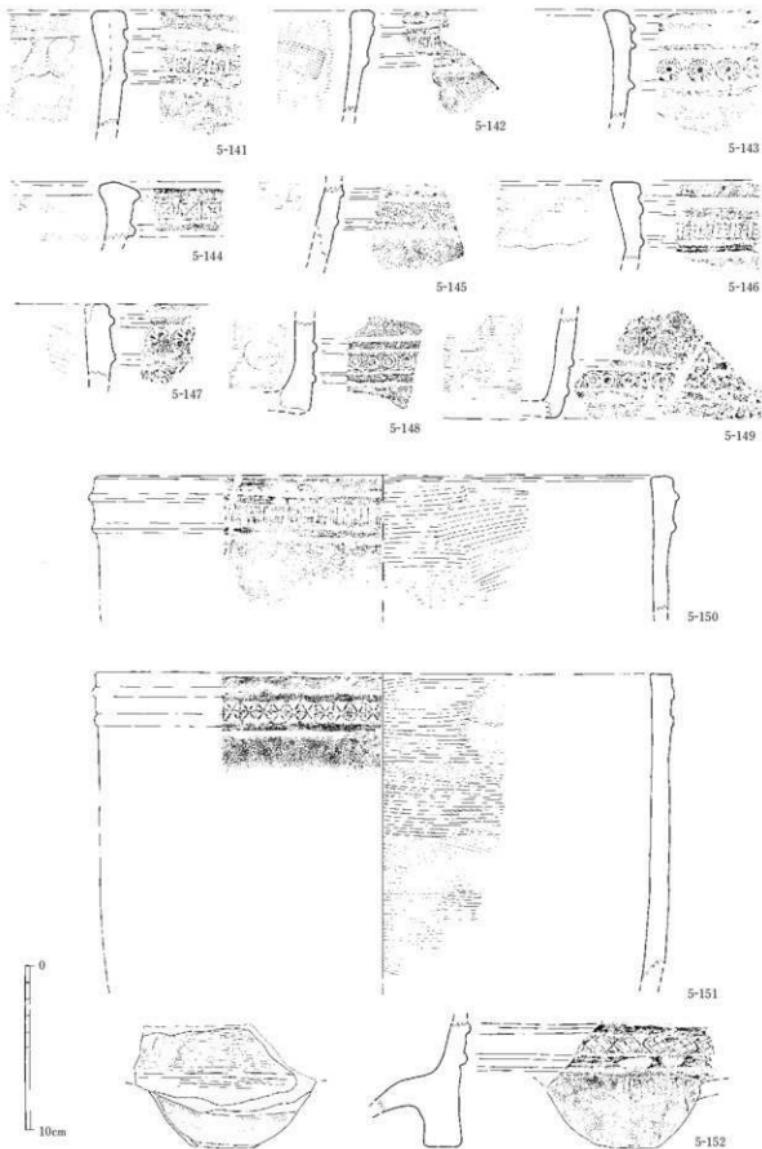
131は土師質で直立する短い口縁部に肩の張るタイプである。肩部は有段をなしハケを施す。茶褐色を呈し庭園造構からの出土である。132は小片で表面に花文と巴文を刻印する。火鉢の可能性もある。133は軟質の瓦質で一見すると土師質に見える下半部を欠損する茶釜である。短い内傾する口縁部に張りの有る肩部を有す。肩部にはやや大きめの把手を付ける。胴部には幅広の鐸を巡らす。口径15.2cmでナデとハケで仕上げる。石垣の外のテラスからの出土である。このタイプは15～16世紀頃の所産であろう。134には花文を押捺する。135は鐸の直上に押型文を配す。136は土師質で口縁部が欠損したため銳利な刃物で把手部まで削り再利用している。肩部には梅花文を刻印する。石垣外のテラスから出土した。137は直立する短い口縁部を持ち、張りの有る肩部には三つ揃いの花文を押印する。口縁部直下には孔を穿つ。復元口径16.3cmでテラスからの出土である。138は茶釜の胴部片で鐸は上向きで尖る。黄褐色の土師質で、外面に多量の煤が付着する。

茶壺(139・140) 139は古備前焼の茶壺であろう。口縁部は開き気味の玉縁で、頸部は締まり肩部以下を欠損するが大きく張ると思われる。茶褐色から淡灰褐色を呈し、復元口径12.8cmで焼き締められている。140は139と同様の焼成で茶褐色を呈するが、通常古備前焼の底部はどっしりとし安定しており、対してこの底部は上げ底で細まり不安定である。おそらく同一個体ではないであろう。前者は石垣外のテラスから、後者は館跡の北側外からの出土である。

火舎(141～155・157・161) 141は瓦質で口縁部を内傾、肥厚させた火鉢の口縁片で外面の凸帯間に千鳥格子の印刻を巡らす。胎土は灰黄褐色から焦茶色である。石垣の裏込め整地層の下層からの出土である。142は直上する口縁部で端部は肥厚させる。口縁下には2条の凸帯を巡らせその間にはヘラによる縱格子文を刻む。143は肥厚し内湾する口縁部を有す火鉢で瓦質である。外面口縁下には3条の凸帯を巡らせ下段の凸帯間に菊花文を刻印する。石垣の外からの出土である。144は口縁端部を肥厚させ内湾する浅めの火鉢で土師質である。外面凸帯間にハケのスタンプを巡らす。石垣外のテラスからの出土である。145は凸帯間に渦巻文を巡らしている。146は141と同類の火鉢で、口縁部の作りが若干異なり内面が屈折する。外面は同じで千鳥格子を配する。瓦質である。147は外面に花文を印刻する。148は底部片で



第38図 調査5区出土土器実測図9(1/3)



第39図 調査5区出土土器実測図 10(1/3)

凸帯間に竹管文をスタンプする。

150・151は同じタイプの火鉢で口縁端部を若干肥厚させ体部までは直線的に作る。外面の凸帯にはヘラ書きによる継格子の150と襷がけの刻印の151がある。前者が黄橙色、後者が暗黄褐色の土師質である。調整は外面がナデ、内面はハケで仕上げる。152は瓦質で火鉢の下端部分である。逆台形の大きな脚が付き、外面の凸帯には菱形文がスタンプされる。161は石垣内とテラスから出土した土師質のやや大振りの火鉢で、口縁端部を内側に肥厚させる。外面の凸帯を挟んで菱形文と菊花文を密に印刻する。精製されたきれいな火鉢である。復元口径36.0cmである。

153～155は浅目の火鉢の破片で153と154・155とでは口縁部のつくりが異なり、前者は端部を肥厚させ後者は単純な作りである。153は凸帯を挟んで花文はやや密に巴文は間隔をあけて刻印する。後者は凸帯を巡らすものの無文である。157は屈曲させ端部を丸く肥厚させる火鉢の脚台である。茶褐色を呈する。5区東側の巨石周辺から出土した。

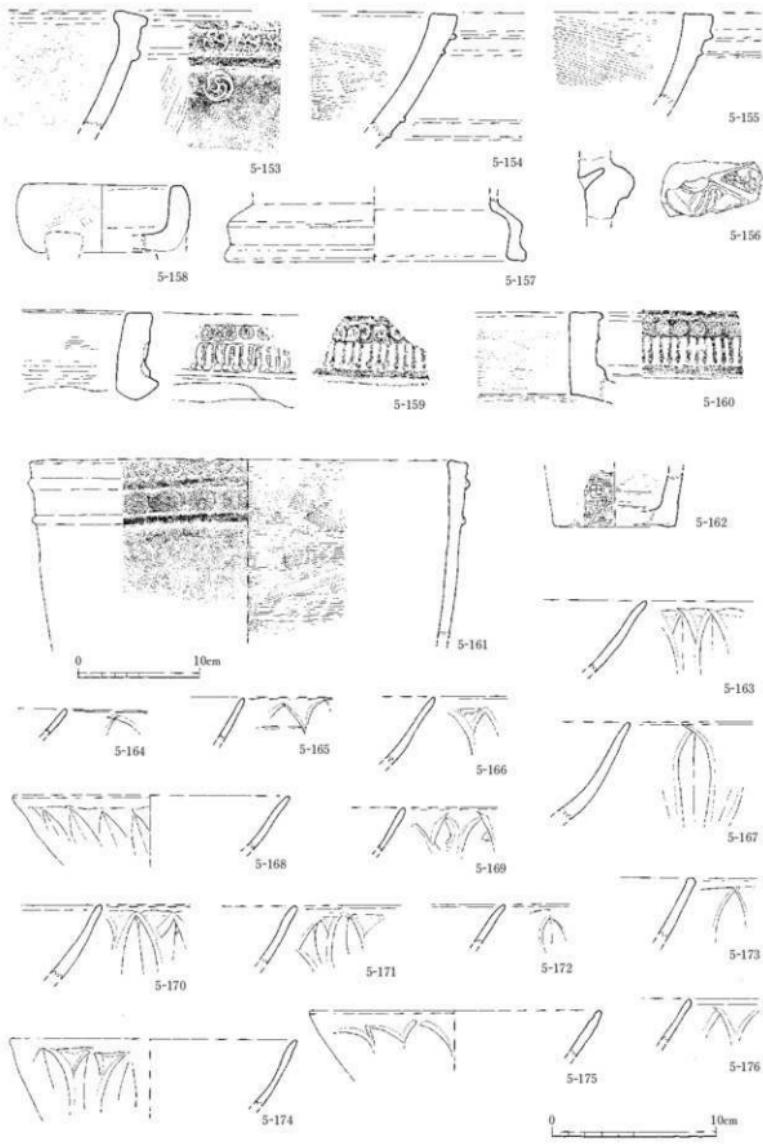
仏像片 (156) 当初風炉か飾り火鉢片と考えていたが、仏像の台座の一部の可能性がある。曲線的な彫り込みと鱗状の彫り込みが見られ内面には型持たせと考えられる孔が穿たれている。小片であり不明なところが多い。

香 爐 (158・162) 土師質の器壁の厚い線香立である。体部から口縁にかけてはやや膨らみ内湾気味に作る。底部には脚の外れた痕跡があり三脚あったものと思われる。復元口径は9.8cmで、石垣の下層からの出土である。162は香炉の底部片であろう。底部付近はヘラによる面取りをし、その上に雷文風のスタンプを刻印する。黄褐色を呈し土師質である。

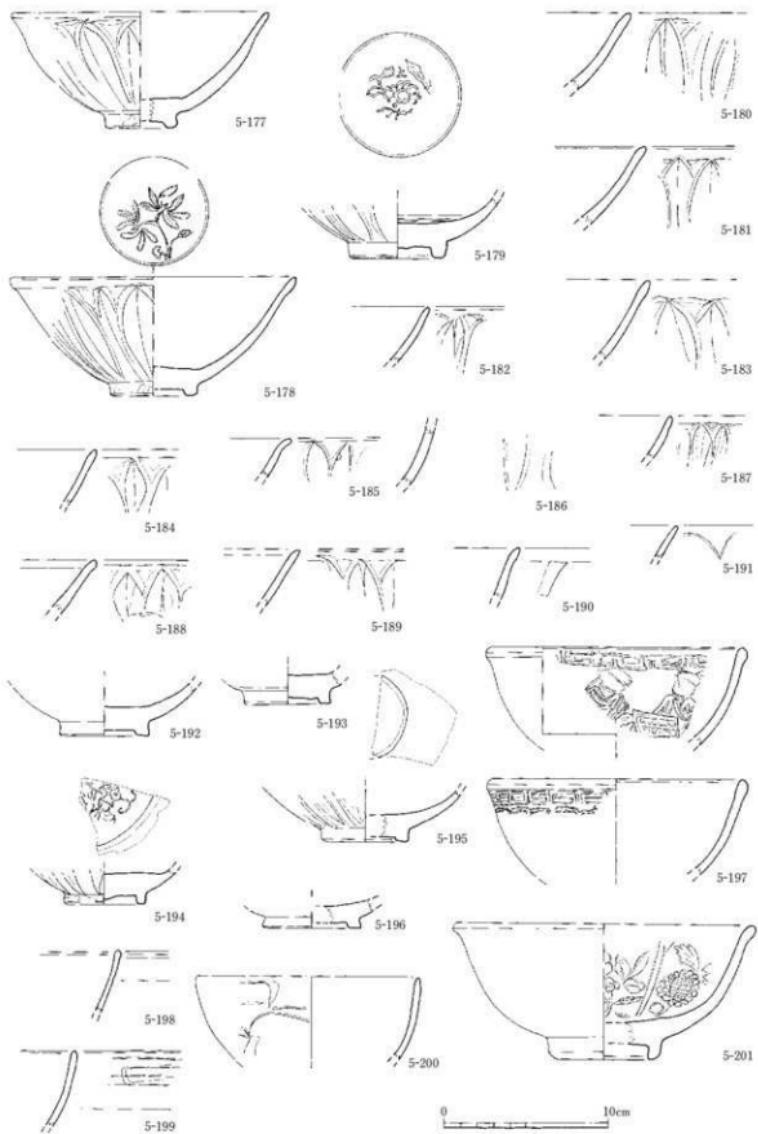
風 爐 (159・160) 両者とも短い口縁部の器壁の厚い土師質の風炉であり、外面の文様や刻印が同じであるが作りが若干異なることから両者とも掲載した。159は口縁部外面に菊花文を密に刻印し、その下部には板小口の刺突文を細かく入れている。その下には凸帯状の高まりが巡る。頭部には透かしの一部が見られる。灰黄褐色を呈する。160は直立する口縁部に端部を外側に肥厚させる。外側には159同様菊花文と刺突文を巡らし、頭部には丸い凸帯が巡る。頭部内面は明瞭な稜線が付く。色調は同じく灰黄褐色で、前者が庭園遺構から後者が整地層上面から出土した。

青 磁 (163～220) いづれも小破片の碗が多く、出土場所も整地層上層や下層、石垣下層、テラス、巨石傍、溝1などで5区と7区のものが接合したり、かなり広い範囲に散在していた。時期的に見ても古いものは13～14世紀頃のものや15～16世紀のものなどが渾然一体となって出土しており、出土数が多くて個々の説明は省略するが、出土の傾向や顯著な特徴があるものについて説明する。まず、13～14世紀頃の碗は163～191・193～196までがあげられる。すべての碗の外面には明瞭な鎬蓮弁を表し体部の張りは鈍く口縁部までを直線的に作る。見込には草花や葡萄唐草文を表現し、179の見込部には「上」と読めるスタンプがある。高台は低くスマートで露胎である。釉薬は明るい緑色からやや濃いオリーブ色の発色である。

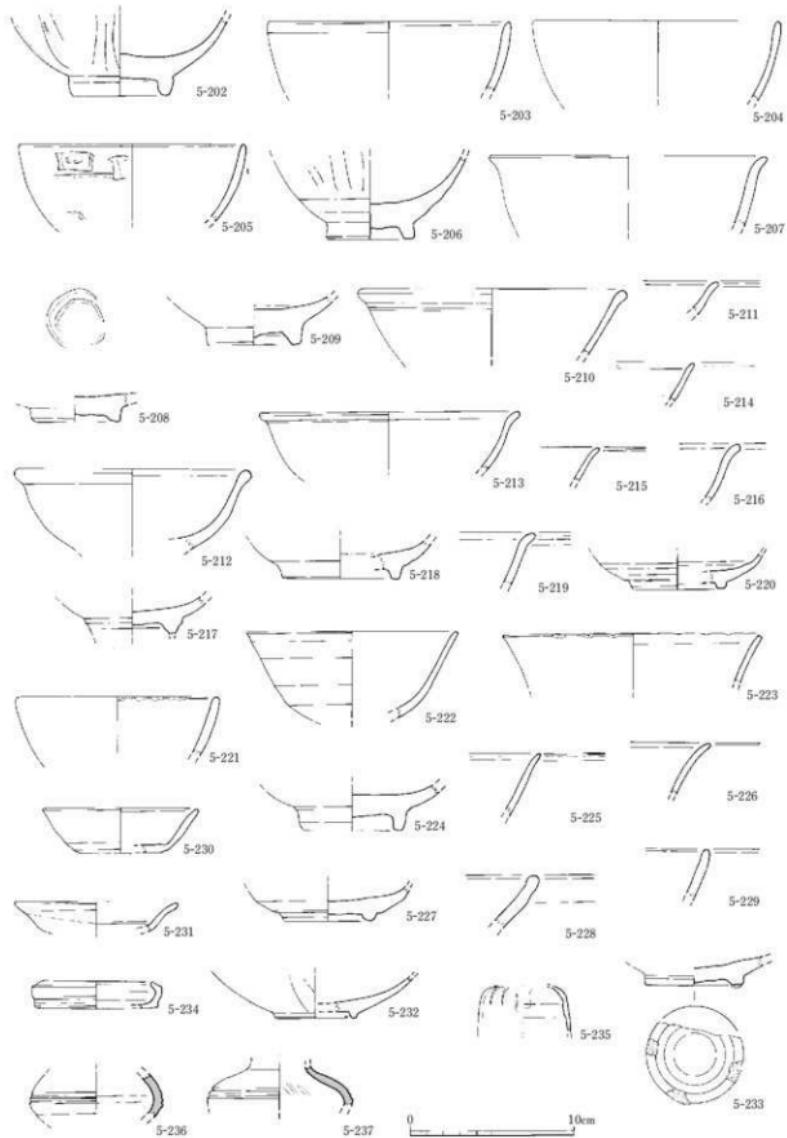
15～16世紀頃の青磁碗としては、197～220までがある。特徴は体部に膨らみがあり、上方に口縁部が延び、口唇部が玉縁状と尖り気味に作るタイプがある。197は所謂「人形手」と呼称される青磁碗で玉縁口縁である。見込側面には2人の人が碁か将棋に興じている姿をスタンプし、その直上に雷文を彫り込んでいる。外面口縁部には雷文と雲文を巡らす。庭園遺構



第40図 調査5区出土土器実測図 11(1/3)



第41図 調査5区出土土器実測図 12(1/3)



第42図 調査5区出土土器実測図 13(1/3)

からの出土である。16世紀代の所産であろう。199・200は簡略化した雷文を彫り込んでいる。201はやや大振りの高台に丸みのある体部と外反する口縁部を持つ。見込から側面にかけて草花を掘り込んでおり、その中のひとつは向日葵を表現しているようである。釉薬は緑灰色を呈し、高台の内側は露胎である。復元口径は18.6cmで石垣からの出土である。これも15～16世紀代の所産である。

202～206は丸みのある体部に上方に延びる口縁部を持つ。202と206は退化した蓮弁を205は退化した雷文を彫り込んでいる。207は口縁部が外反し濃緑色に発光する釉薬をかける。210・212・213は口縁部を外反させ口唇部を玉縁状に作る。石垣内からの出土である。217の青磁碗は5区の1号土坑内からの出土である。

白 磁 (221～227・229～233) 221～227・229・232・233は白磁碗で、15～16世紀代の所産であろう。221は口唇部内側に釉垂れが見られる。223は口唇部を削り輪花口縁を表現している。230・231は皿で前者は5区の溝1からの出土である。228は陶器である。234は235の水滴に関連する小皿であろう。235は水滴で書に関係すると思われる。

須恵器 (236・237) 236・237は同一個体で、この時期の須恵質土器は東播系の捏鉢ぐらいで他には存在しない。小形の須恵器の瓶である。混入品か、伝来品の可能性がある。

染 付 (238～247) 238は明時代の染付け皿で、小破片で見込に発色の良い青紫色の二重圈と絵柄を表現しているが何であるかは不明。釉薬は青白色である。高台は尖り気味で内側には釉薬を流し掛けている。高台の内側傍は露胎である。すばらしい染付け皿である。

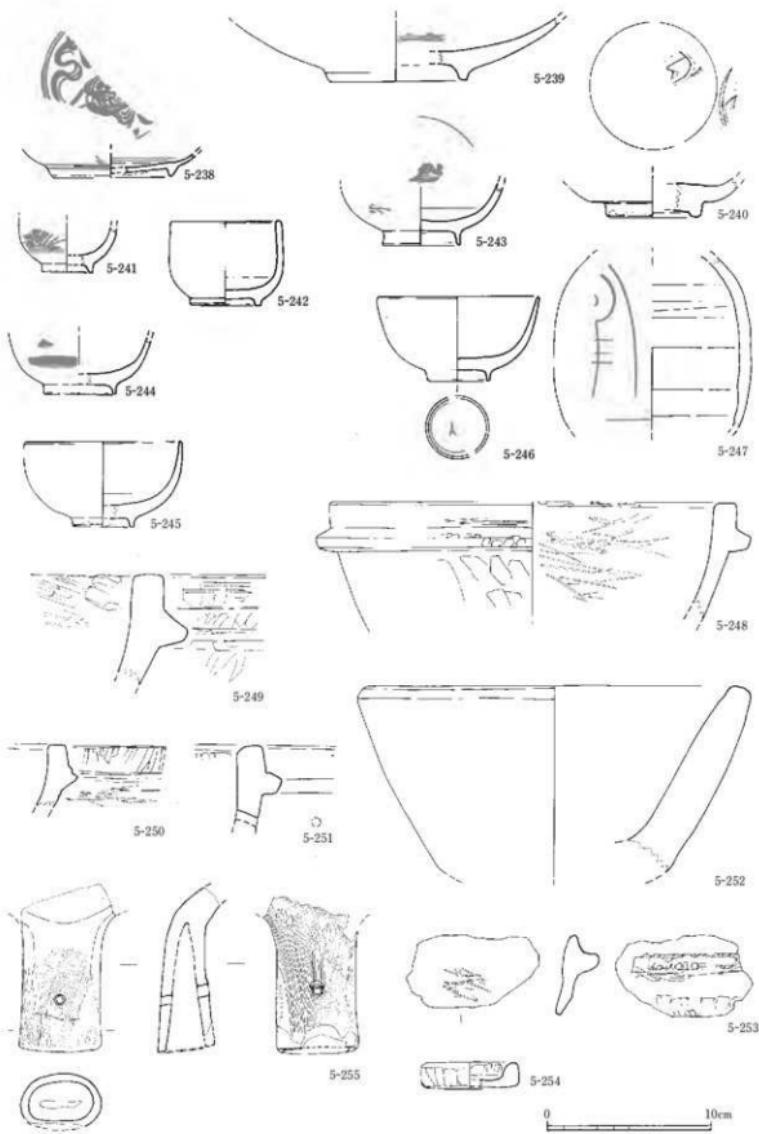
240は16世紀代の青磁碗で掲載場所を取り違えたものである。245を除く241～247は近世陶磁器の染付で、245は肥前の陶胎染付けである。247の瓶は何を描いているのかは不明。

石 鍋・捏 鉢 (248～254) 248～251は同じタイプの石鍋片である。直に延びた口縁下に断面が台形の削り出し凸帯をめぐらす。総じて質のよい滑石を使用している。248・251は整地層上層から、249は石垣の下層から、250は3号掘立柱建物の柱穴内からの出土である。253・254は石鍋の再利用である。前者は周縁を削って滑らかにしているが用途は不明である。後者は周縁を削って浅い器状の形を削り出している。253は整地層から254は庭園遺構からの出土である。

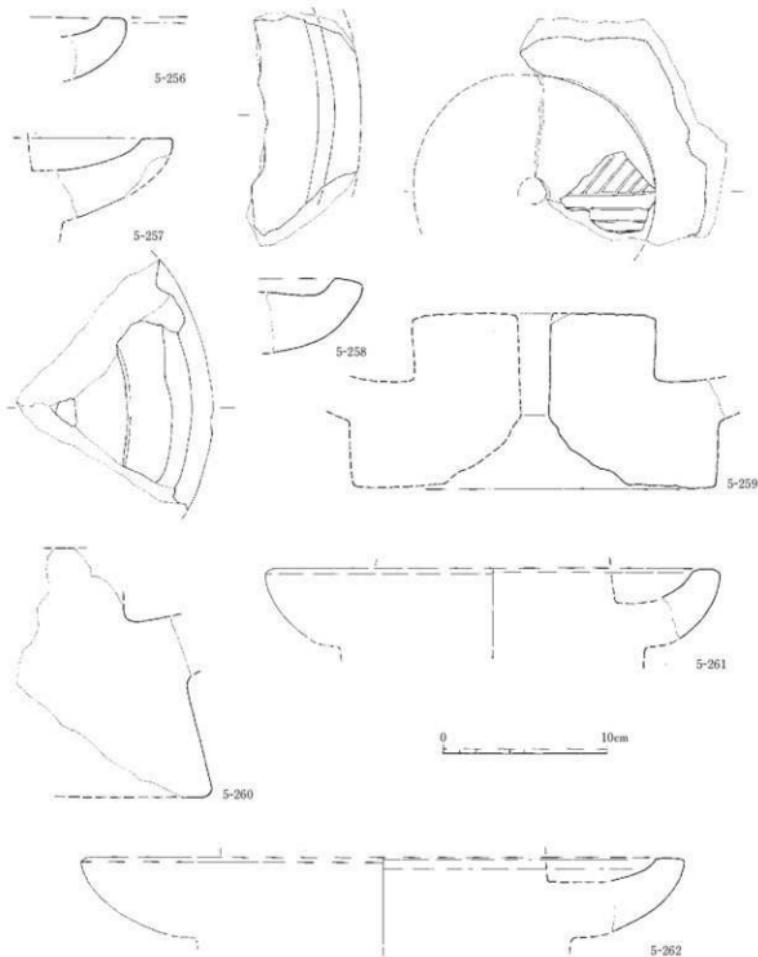
252の石製捏鉢は1/3を欠損している。底部から直に開く口縁部を有し厚く作る。砂岩質の石を使っており、石垣外のテラスからの出土である。

焙 烙 (255) 土師質で焙烙の柄の部分である。断面が梢円形で上下に目釘穴を穿っている。調整はやや粗めのハケで仕上げている。焙烙出現は15～16世紀が中心との指摘がある。しかし、把手付鍋の把手部分の可能性もあり、目釘穴は無いものの福岡市博多区の麦野下古賀遺跡8号竪穴出土のものと似た形態である。

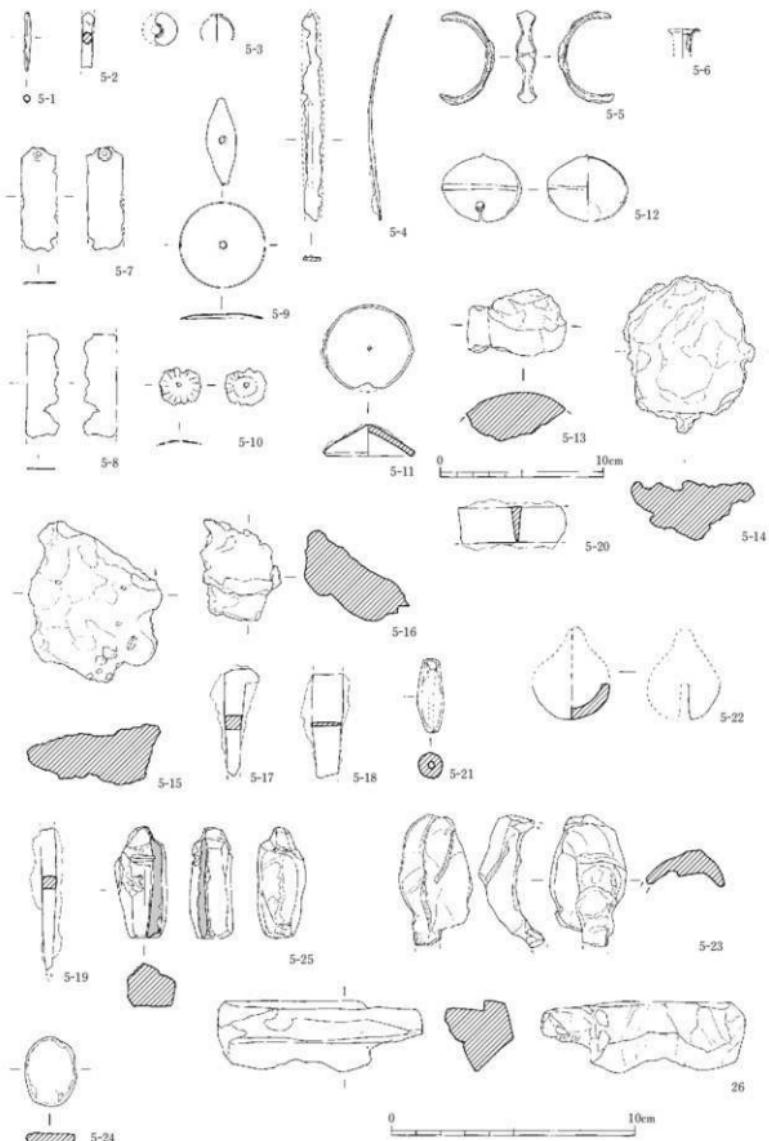
茶 白 (256～262) 5区からは茶白が小破片までを数えるとかなりの個体数が出土している。図示した茶白はすべてが破片で全容を知る資料はない。先に調査した網取遺跡からもかなりの数の茶白が出土しており、I-2でも述べたように、建久2年臨済宗の開祖である栄西和尚が宋からお茶の木を持ち帰り背振山石上坊に植えたとの言い伝えがあり、これをふまえると中世の五ヶ山でも茶の栽培が盛んで、茶白での抹茶の生産が行われていたことが考えられる。茶白はすべて砂岩質で、受け皿のある下白が大半である。出土場所は石垣の外のテラスからの出土が多い。



第43図 調査5区出土土器・石製品実測図(1/3)



第44図 調査5区出土石製品実測図 (1/3)



第45図 調査5区出土銅製品・鉄製品・土製品・石製品実測図(1/2・1/3)

② 5 区の銅製品（図版 40、第 45 図）

1 はテラスから出土した棒状の銅製品でかなり風化が進んでいる。一方が尖るが用途は不明である。長さは 2.4cm、径は 0.3cm。2 は整地層上面から出土した不明銅製品である。全体に磨耗している。径は 0.5cm。3 は整地層上面出土の銅製空玉の形状である。約 1/3 の遺存で不明な点があるが、上部に縁取りの孔を穿っており、径は 0.4cm である。厚さは 0.06cm で復元径は 1.35cm である。何かの飾り玉かもしれない。

4 は板状の銅製品である。現状では弓なりに曲がっているが本来は直状であろう。これ自体形状が不明瞭であるが、7 区南側石垣内から同様の製品が出土しており、大方の形状は掴める。図示した上端部の断面は方形で細まり完結する。板状の裏面には偏った突線状の細い梢円形の高まりを作る。高まりの長さは 4.1cm、幅は 0.3cm で両者ともほぼ同じ作りである。4 の現状の長さは 8.5cm、幅は 0.7 ~ 0.8cm、厚さは 0.2cm である。管の可能性が考えられる。

5 は三日月形に湾曲した銅製品であるが、本来は先端が接していたと考えられ、何かを緊縛する飾金具か指輪であろう。金具の中央には結束を表現する膨らみを作り、両先端部も幅広にする。現径 3.7cm、中央幅 0.8cm、厚さ 0.35cm である。整地層上面からの出土である。

6 はラッパ状に聞く留金具か先端金具であろう。先端部は緩く折り曲げ空には竹の痕跡が残る。石垣の外側から出土した。

7・8 は鉄地金張製の板状製品で、一方の端に留金具が付けられている。両者は接合しないが同一個体と考えられるが、完結した製品ではない。何らかの飾り金具であろう。幅は 1.5cm、厚さは 0.05cm である。5 区のテラスからの出土である。

9 は銅製の不明留金具の台座の部分で、筒状に折り曲げられた状態で出土した。復元すると直径が 3.4cm で、厚さは 0.05cm である。中央には径が 0.3cm の孔を穿っている。1 号埋石土坑傍の柱穴内（P - 29）からの出土である。

10 は円形の留金具の台座で表裏に菊花状の線刻を打出している。中央には 0.2cm の釘穴を穿っている。厚さは 0.05cm である。1 号掘立柱建物跡の床範囲内からの出土である。

③ 5 区の鉄製品（図版 40、第 45 図）

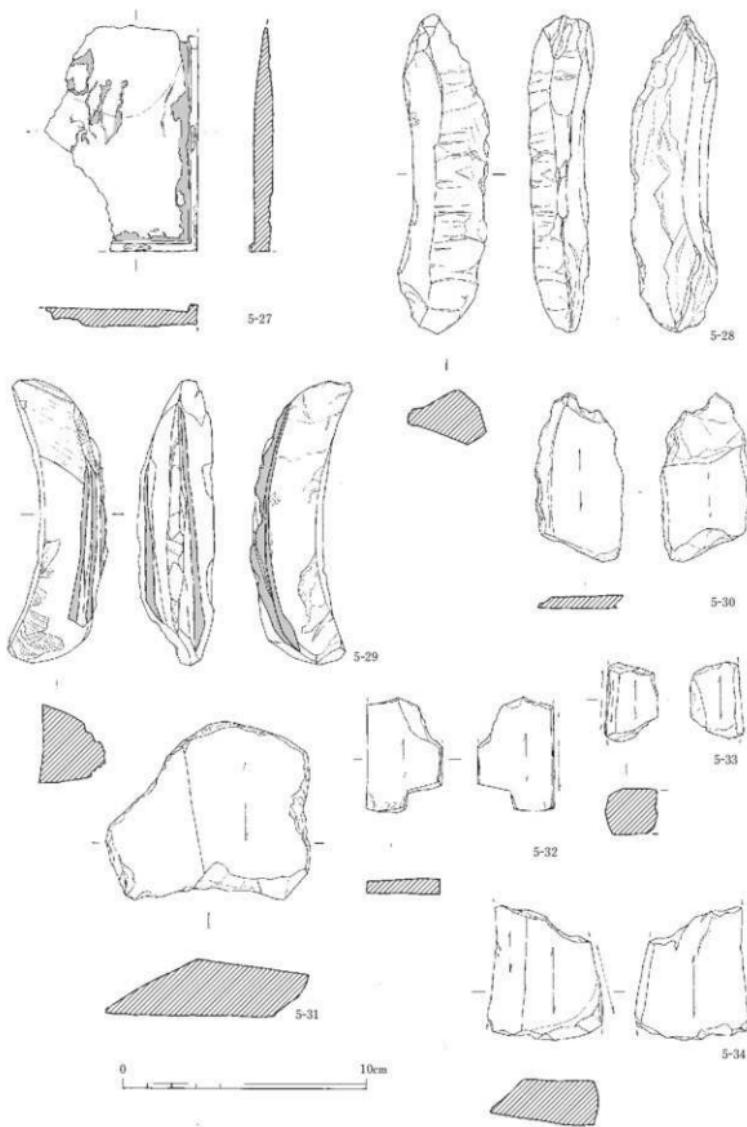
11 は 5 区整地層上面から出土した傘形鉄製品である。用途は不明で、直径が 3.6cm、高さは 1.3cm、厚さは 0.3cm である。円錐先端には孔を穿っていない。

12 は 5 区の箭頭のある花崗岩の大石傍の柱穴（1・2 号掘立柱建物跡床範囲内）から出土した鉄製の鉸である。吊手部分は欠損しているが他は完存している。中央には接合部と思われる不明瞭な稜線が走る。球舌は銹着していると考えられる。径は 3.3cm、高さは 2.2cm である。

17 ~ 20 は鉄器である。17・19 は釘であろう。前者は頭を「L」字状に曲げている。18 は扁平な板状の鉄で刃部が無いので用途は不明である。20 は刀子の刃部片である。17 は整地層下層から、18・19 は庭園遺構から、20 は石垣下層からの出土である。

④ 5 区の土製品（図版 40、第 45 図）

13 は鍛冶関連の輪の羽口片である。先端部に近く強く赤変している。これに伴う遺物には碗型滓（14 ~ 16）が数個出土している。このほか鐵滓も出土しており、鍛冶遺構の発見は無



第46図 調査5区出土石製品実測図(1/2)

いものの鍛冶を生業としていたことを彷彿させる。

21は小形の管状土錘である。近くに沢が流れおり魚網などに使われたのであろう。長さ3.0cm、重さは2.15gである。5区のテラス出土である。22は土鉢片である。庭園遺構からの出土。

23は内部が空中の手捏ね土製品である。部分的な破片で何を表しているのか不明であるが、図示した下方に突出部があり、これを脚を考えると何らかの動物を表現した可能性がある。胎土は精製され非常に細かく、淡茶褐色の色調である。整地層（第4トレンチ）から出土した。

⑤ 5区の石製品（図版40・41、第45～49図）

不明石製品（24～26） 24は石垣内下層から出土した不明石製品である。形状は楕円形で縁は整美な面取をし均一な厚さに加工している。蛇紋岩製で碁石の可能性がある。

25は滑石製石鍋の凸帶部分を再利用した製品である。一方を凸状に削り出し、柱状の上部一面に鋭い溝を掘り込んでいる。鍋の鋸の煤は残っていて下端には径0.4cm、深さ0.5cmの孔を穿っている。小形の人形を表現しようとしたのかも知れない。長さは4.6cm、幅は2.0cm、厚さは1.8cmである。

26は滑石製石鍋の鋸部分を使って製品を作ろうとしたものであろう。片方の鋸を棒状に削り出しているが、目的が不明である。整地層上層からの出土である。

硯（27） 方形板状硯片である。約1/3を欠損して海部は無い。陸部の内面立ち上がりは斜行しており、陸部の一部には墨痕が見られる。硯は紫色の石材で、所謂山口県厚狭郡から産する赤間石で作られたものである。整地層上層から出土している。硯に共伴すると考えられる道具に水滴があるが、5区の整地層から白磁の精美な水滴（235）とそれに関係する白磁小皿（234）が出土しており、一定程度の貴人の存在を彷彿させる。

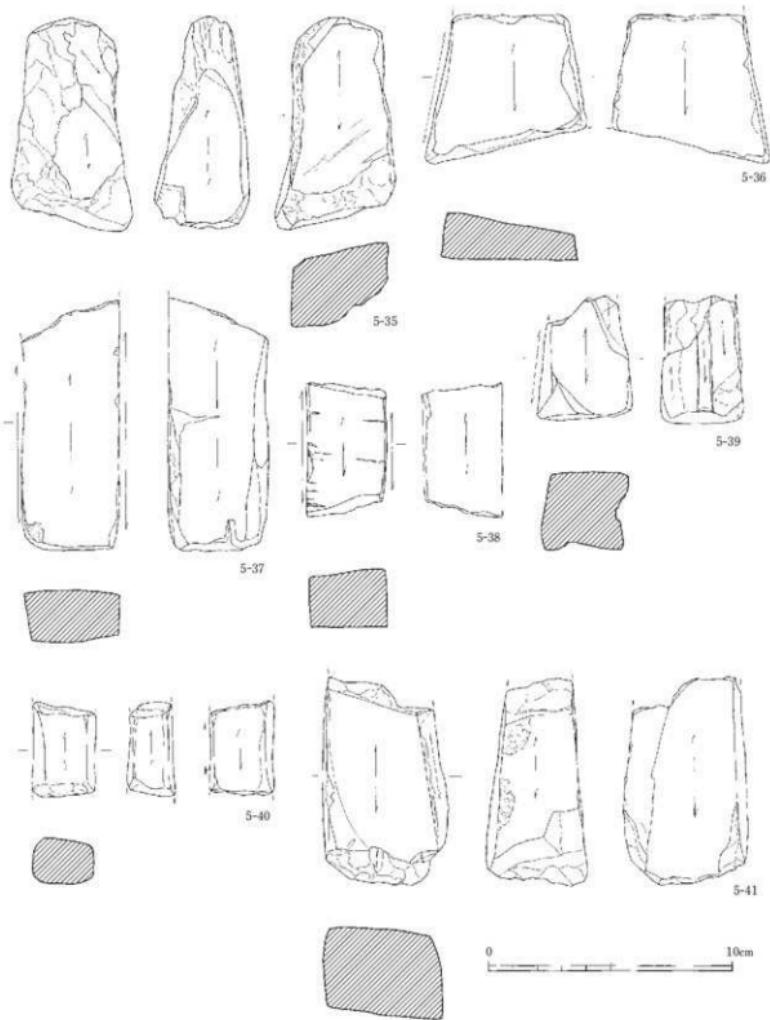
舟形石製品（28・29） 舟形石製品の未完成であろう。28は舟形を作り出す初期の段階で、ほとんど形をなしていない。僅かに舟の反りと舟底の原型が垣間に見える。側面の一方には鋭利な刃物による削り痕が見られる。やや銀色を帯びた黒緑色を呈し蛇紋岩であろう。長さは13.0cm、幅は3.0cm、厚さは2.2cmで庭園遺構からの出土である。

29は舟に近い形状をなしデッキの反りを鍋の内側とうまくマッチさせている。舟底は石鍋の凸帶と付着した煤を使ってうまく表現している。良質の滑石で1号掘立柱建物跡の床面内のP52からの出土である。長さは11.6cm、幅は3.1cm、厚さは2.2cmである。

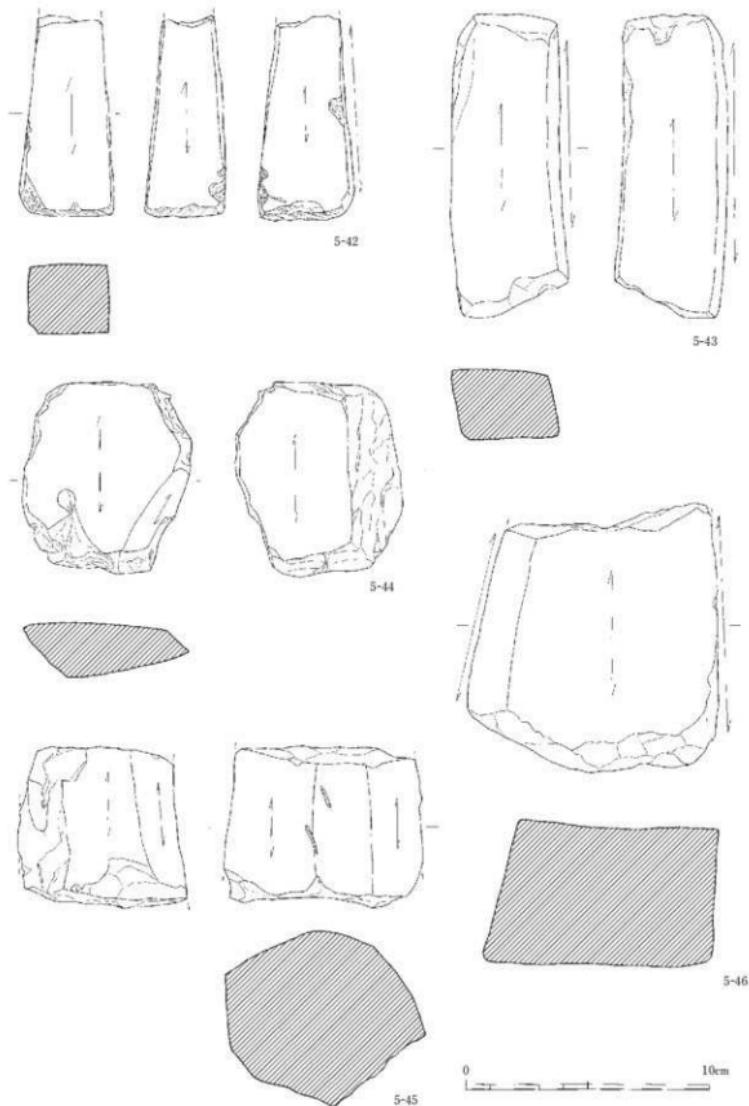
砥石・軽石（30～49） 当遺跡からは数多くの砥石が出土しており、大半が荒砥石から中砥石である。山間の地の所以であろうか。30は粘板岩製の仕上砥石で研ぎ面は2面で黒色を呈する。テラスからの出土である。32は整地層から出土の硬質砂岩の仕上砥石である。研ぎ面3面である。31・33は荒砥石、34は中～仕上砥石である。いずれも砂岩である。

35～39は中砥石で37は花崗岩質砂岩で他は砂岩である。38は刃物傷が多い。39は鋭利な刃物痕が1面に有る。35・36・39はテラスから出土。37は柱穴出土。38は石垣下層から出土である。

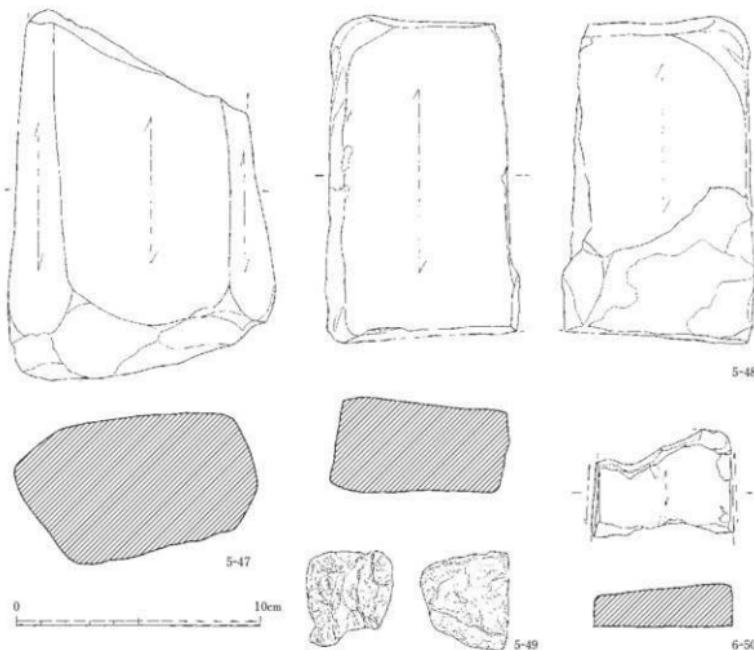
40・43・45～48は荒砥石である。40は上下が欠損しているが手持ちの荒砥石であろう。庭園遺構から出土。41は5区北側整地層からの出土。43は庭園遺構出土。45は全体に二次被熱を受け変色する。5区南端の巨石傍から出土。



第 47 図 調査5区出土石製品実測図1(1/2)



第48図 調査5区出土石製品実測図2(1/2)



第49図 調査5区・6区出土石製品実測図(1/2)

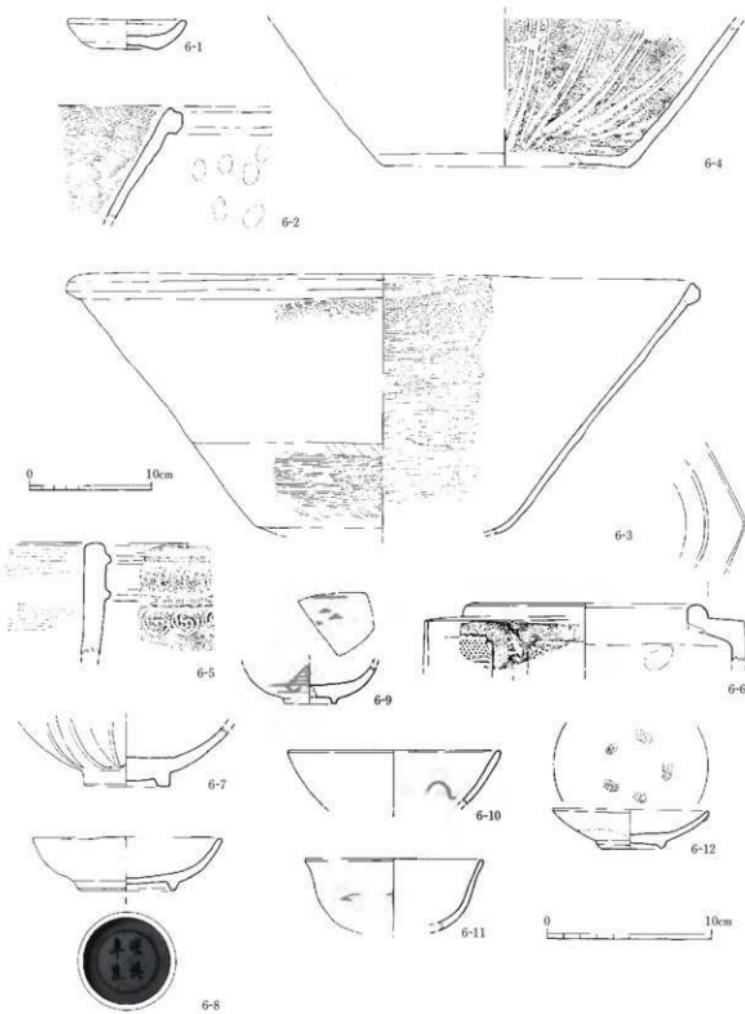
46は石垣内出土。47は火を受け赤変し、整地層出土。48は石垣下層からの出土で、二次被熱で赤変している。42・44は中砥石で整地層上層とテラスから出土した。49は庭園遺構から出土した軽石で、一方を擦って平坦にしている。

⑥6区の土器（図版37、第50図）

陶器皿 (1) 西新高取の小皿である。大きさに比して器壁が厚い。抉れた上げ底で、胎土は灰色、釉薬は灰黄色である。内外面に煤が付着し、灯明皿としての使用が考えられる。6区巨石傍からの出土で新しい時期の巨石祭祀の痕跡かもしれない。

土鍋 (2・3) 2は6区の斜面から出土した土鍋片である。口縁部を厚く肥厚させ、口唇部を凹面状に押さえる。調整は内面がヨコハケ、外面は指頭圧痕とナデである。3は断面台形状に肥厚させ、体部は直線的で不安定な平底を持つものであろう。胴部下半には製作時の粘土接合面に低い凸帶状の高まりを作る。調整は内外面をヨコハケで仕上げ、外面は広くナデ消している。斜面の窪みから出土した。

擂鉢 (4) 口縁部を欠損する。大き目の底部に体部は直線的である。内面には3本単位の擂目を粗く入れている。土師質で暗灰色を呈する。斜面からの出土である。



第 50 図 調査6区出土土器実測図 (1/3・1/4)

火 舎 (5) 直線的な口縁部で口縁外面には2本の凸帯を巡らし下段の凸帯の上下には密に花文と巴文をスタンプする。瓦質土器で黒褐色の色調を有す。巨石の傍から出土した。

香 炉 (6) 小破片のため全容は不明であるが、平面形状が六角形をなす香炉であろう。短く直口する口縁部に直角に屈折する肩部を持つ。肩部以下は不明である。拓影で示したように

各面を区画しその間に小さな珠文を散りばめている。その下部には何らか絵柄が彫り込まれているようだが分からぬ。瓦質で復元口径 15.0cm である。色調は黒灰色である。

青 磁 (7・8) 7 は 13~14 世紀代の龍泉窯青碗の底部片である。径の小さな低い高台で内面は釉を搔き取っている。表面には明瞭な鎧蓮弁を配する。釉薬は緑黄色で、6 区の巨石周辺からの出土である。8 は青磁の皿の完形品である。巨石傍の表土剥ぎの時に出土した。低く大きい高台が付く。疊付きは釉薬を搔き取っている。口径は 11.6cm、底径は 6.2cm、器高は 3.2cm で釉調は淡緑色、底部の裏には圈を巡らせ、中に「洪武年造」銘が書かれており、この範囲には釉薬の別かけをし白緑色を呈している。真偽がはっきりしないが 14 世紀~15 世紀代の所産の可能性がある。

染 付 (9~11) 近世陶磁器の碗である。乳白色の釉薬に緑と青の染付けで単純な絵柄を引いている。いずれも斜面の包含層からの出土である。

白磁皿 (12) 巨石の傍から出土した小形の近世陶磁器の皿で、内側の 5ヶ所に目跡が付く。灰白色である。口径 9.6cm、底径 3.9cm、器高 2.4cm である。

⑦ 6 区の銅製品（巻頭図版 4-(1)・図版 42、第 51 図）

銅 鏡 6 区に鎮座する花崗岩の巨石の東側にある、やや大振りの二個の石に挟まれた形で出土した。鏡は東に傾斜した形で置かれ、背を上にしていた。布や木箱の痕跡が無いことから直に埋納したものと考えられる。

鏡は内傾した厚縁で、外区には櫛歯文帯を挟んで突出する有輪珠文帯を巡らす。二段目の櫛歯文帯の内側には太い花形界線を巡らせて、内側に接する形で細珠文帯を巡らしている。内区には下から右回りに上方へと三つ重ねの菊花を三ヶ所に配し、左上には二羽の雀が向かい合って飛翔する。

鈕は亀を表現し、甲羅には花菱を表す所謂花菱文亀紐と考えられる。鈕には白く細い紐が残っている。鏡名は「花菱文亀紐菊花双雀鏡」であろう。15 世紀から 16 世紀初め頃の所産と考えられる。因みに、鏡径は 11.4cm、縁高 1.0cm を測る。

⑧ 6 区の石製品（第 49 図）

砥 石 (50) 巨石祭祀遺構の傍から出土した砂岩製の中砥石片である。上下とも欠損し、研ぎ面は 3 面である。幅 5.7cm である。

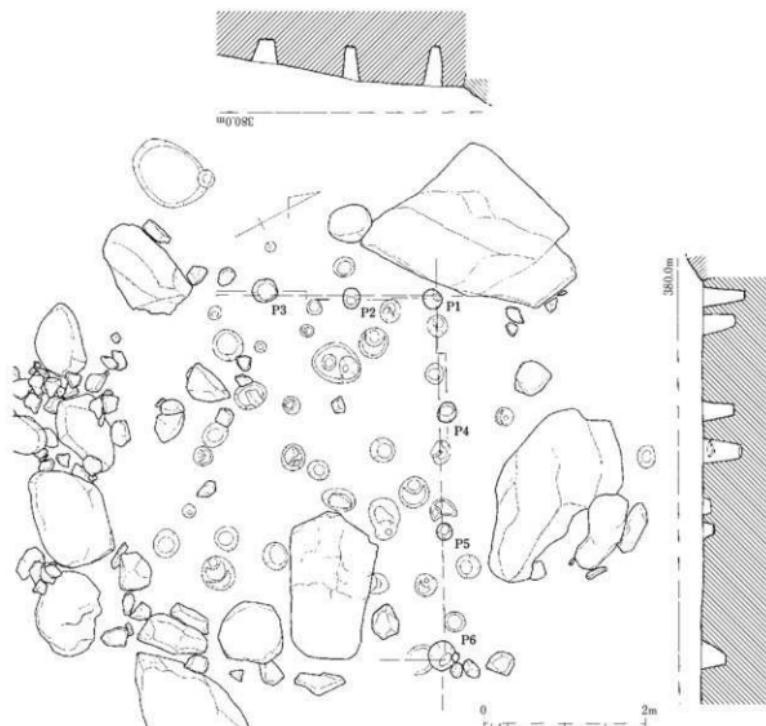


第 51 図 調査 6 区出土銅鏡拓影圖 (2/3)

(5) 7区・8区の遺構

①調査区の遺構概要 (図版 20-(1))

現況での5区と7区との比高差は30m以上あるが、5区の石垣を除去すると5区と7区との比高差はさほどでもない。調査の結果、7区の東側2/3は水田耕作で削平されており、遺構は遺存していないか、または本来遺構の空白区域とも考えられる。落差の少ない西側に主たる遺構が遺存し、南側緩斜面には若干の遺構が残っているに過ぎない。



第52図 7号掘立柱建物跡実測図(1/60)

第7表 7号掘立柱建物跡計測表

単位 cm

梁間柱間		梁間間	桁行柱間			桁行間
P1 - P2 105	P2 - P3 105	—	P1 - P4 140	P4 - P5 145	P5 - P6 160	P1 - P6 445

②掘立柱建物跡

7号掘立柱建物跡（図版
20-(2), 第52図）

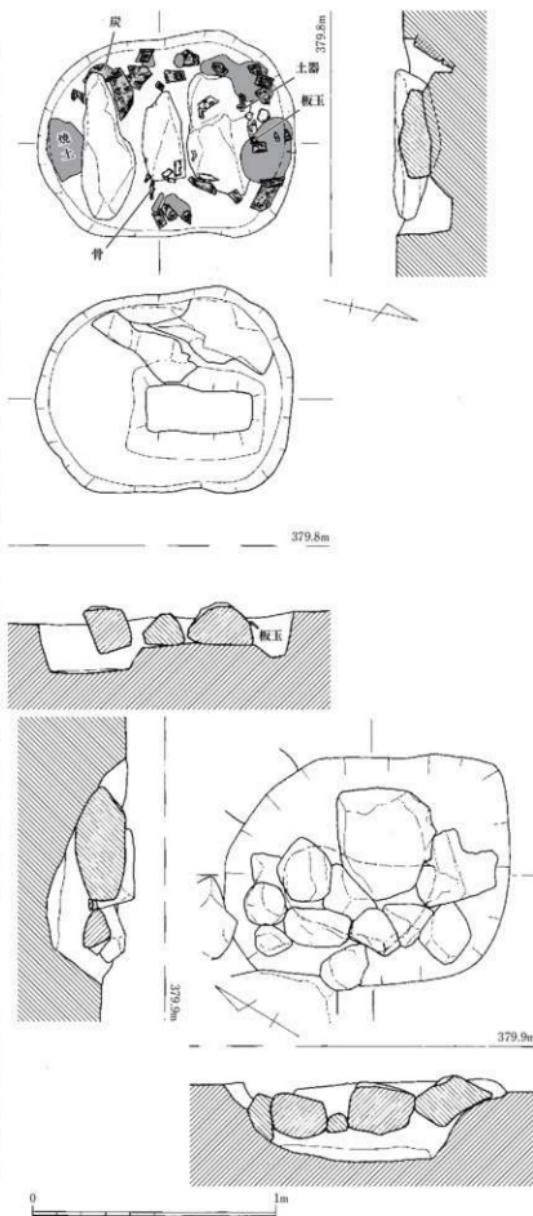
調査7区の西側で検出した掘立柱建物跡で、標高379.75m付近に位置する。写真で見る限り一見石に囲まれたように看取できる。その西側には南北に流れる一段低い個所に集石したような流路が造られている。建物と排水施設の間には柱穴が散見できるが建物として纏まらない。

7号建物の柱穴の径は小さく、規模も小さいことから簡易な掘立柱建物と考えられる。自然石に囲繞された縦3.70m、横4.50mの範囲内には数多くの柱穴が掘られているが、纏まりのあるものは少なく、掘立柱建物として可能性のある柱穴はP1～P6であるが、P3とP4は柱軸がずれている。さらに、東西を梁間、南北を桁行間とすれば、南側の桁行間は柱穴が不揃いで柱が建たない。簡易な礎石を使用していた可能性がある。柱穴内からは若干の中世頃の土師器片がある。

③土坑

火葬土坑（図版20-(3), 第53図）

調査7区の東側にある土坑で、2号巨石祭祀遺構の北側で検出した。周囲には全く造構が無く、削平を受けている



第53図 火葬土坑、2号集石土坑実測図(1/20)

と考えられる。

土坑の形状は楕円形に近く、大きさは $1.05m \times 0.89m$ で深いところで $0.20m$ である。土坑の底面には花崗岩のバイラン土を台形状に残して掘られ、その傍には地山石が露出しており、それを跨がすような形で三個の花崗岩が高さを同一にして並べられている。

土坑内の検出面からは焼土、炭化した木片、火葬骨片や骨粉が全面的に出土した。また、敷かれた北側の石の傍には折れた板状玉が副葬されていた。これらのことから、この土坑は飼育されていた小動物を火葬したことが考えられるが、火葬骨は骨粉や骨片状であり何の骨か判断できない。副葬品を伴うことから大事にされていたのであろう。時期は不確定であるが、中世の土師器が1片出土している。

2号集石土坑（図版 22-(1)、第 53 図）

7号掘立柱建物と重複した土坑である。新旧関係は不明確であるが、傍の柱穴を切っており建物よりは新しいと考えられる。平面形状は不整形で、大きさは $1.15m \times 0.94m$ 、深さは $0.3m$ である。中には大小の花崗岩の角礫が 12 個ほど充填されていた。出土遺物は無く、何のための土坑なのかが分からぬ。

④排水（水路）遺構（図版 22-(2)・(3)、第 54 図）

7 区の最西端にある遺構で、5 区の庭園遺構に造られた流路に続く施設である。5 区と 7 区の接続部分は上部が削平されて底部がわずかに残っており、石が敷き詰められたように看取できる。排水施設は緩斜面状に掘られ、大小の角礫が投げ込まれた状態で出土した。

水路は南北方向に掘り込まれており、上層から中層にかけては暗褐色から茶褐色の覆土が堆積していた。最下層は水流の痕跡である砂が堆積しており、もともとこの部分は水流があり窪地となっていた可能性がある。検出した長さは $13.0m$ 、幅は $3.0m \sim 4.0m$ である。ここを境に西側には遺構が全く無い。出土遺物は、土師器・陶磁器片・風炉片が若干ある。



発掘調査風景

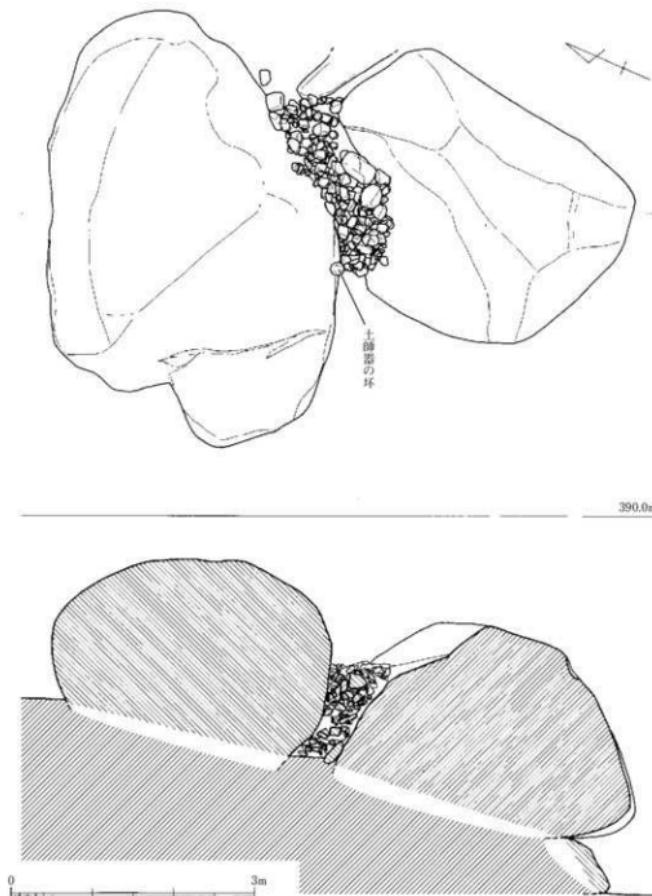


第 54 図 調査 7 区排水(水路)構造実測図 (1/60)

⑤祭祀遺構

2号巨石祭祀遺構（図版 23 -(1)・(2)、第 55 図）

調査 7 区と 8 区の境付近の緩斜面上に花崗岩の巨石が二個接するように並んでいる。北側の巨石は、長さ 5.50m、幅は 3.60m、高さは約 2.50m で南側のそれは長さ 3.80m、幅 2.90m、高さは 2.60m を測る。7 区側の二個の巨石の西側は全く石が見当たらぬ緩斜面を呈している。二個の巨石の間は下方の地山レベルで 50cm、上方で 80cm の空間があり、その間に大小の花崗岩の角礫を充填していた。その下方には 30cm 四方の空間があり、何か腐食するものを埋め込んでいた可能性がある。充填された角礫内からは 13 ~ 14 世紀代の青磁の破片が出土し、西側



第 55 図 2 号巨石祭祀遺構実測図 (1/60)

の角礫の傍からは上から落下した形で 13 ~ 14 世紀代の土師器の壊が出土している。

二ヶ所の祭祀遺構については、一方では巨石間に石の詰め物をし、他方では和鏡を奉納していた。出土遺物から指摘できることとしては、7 区で検出した巨石祭祀は 5 区の石垣構築以前の館跡に伴うもので、6 区の巨石祭祀は石垣が築かれた時点での館跡に併存祭祀の可能性が考えられ、時期差があると推測される。

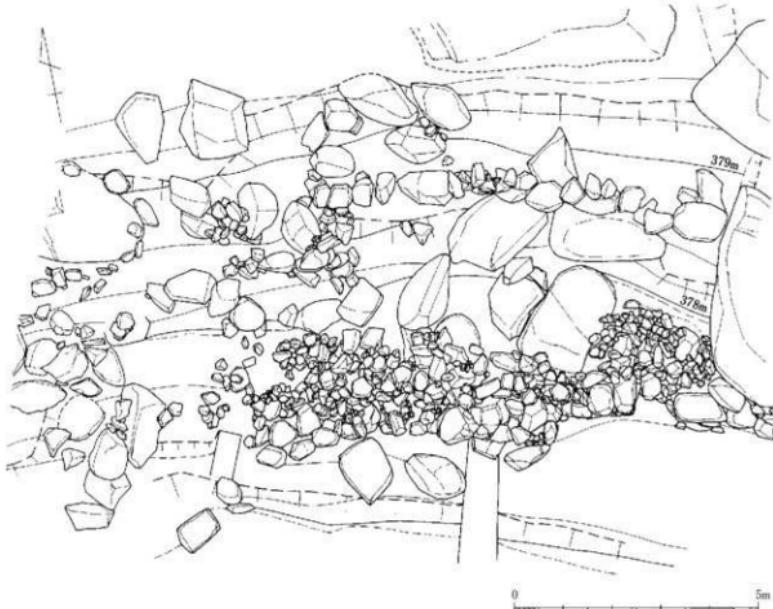
⑥石垣と石敷遺構

石垣（図版 23-(3)・24-(1)・(2)、第 56 図）

巨石祭祀遺構に接する形で東側に展開する、石垣と言うよりも石列の表現が適している遺構である。石列は一段乃至二段で組まれ、すべてが花崗岩の角石である。石列は緩斜面に一定程度盛土した後、石を並べ裏側を 1.5m 幅で整地している。整地の方法は 5 区の館跡のそれと同様であるが、必ずしも整地と石列時期が館と同時期であるかは確証が無い。しかし、整地層内から中世頃の土器類が出土していること、石列の総延長は 16.0m ほどで巨石付近は崩壊して遺存していないが、水田耕作当時の写真と比較すると、石列と現代の畦道とは一致しておらず中世の所産が考えられる。

石敷遺構（図版 24-(1)、第 56 図）

石列から 1.20m 下方に東西 10.0m、南北 2.0m の範囲に明らかに人为的に大小の花崗岩の角礫を敷き詰めた遺構が遺存する。この石敷遺構が何のために造られたかは定かでないが、自然



第 56 図 調査 8 区の石垣と敷石遺構実測図 (1/100)

石に開繞されたように看取でき、ここからも中世の土器類が出土していることから、そのころの所産の可能性がある。

(6) 7・8区の出土遺物

① 7区の土器・石器 (図版37・38、第57~60図)

土師皿・壺 (1~19) 1・2は皿の中でも径が小さく1が5.6cm、2は6.5cmとこの一群では最も小さく、径の小さいタイプでは、上げ底で口縁部までが直に延びるタイプと6・7のように内湾気味に開くものとがある。1・3・6は排水構造、2は巨石傍、4・5・8・9は南側石垣、7は南側整地層から出土している。やや径の大きなタイプは10~19までがある。このタイプにも底部から口縁部が直に開くものや膨らみを持ちながら延びるタイプがある。この一群の12~14、17・18は13~14世紀代に比定されるであろう。12・13の口径13.8cm、14が15.0cm、17が13.7cm、18が13.0cmで、10~12は7区の斜面から、13は7号掘立柱建物の柱穴から、14は南側石垣内、17・18は7区巨石傍からの出土である。

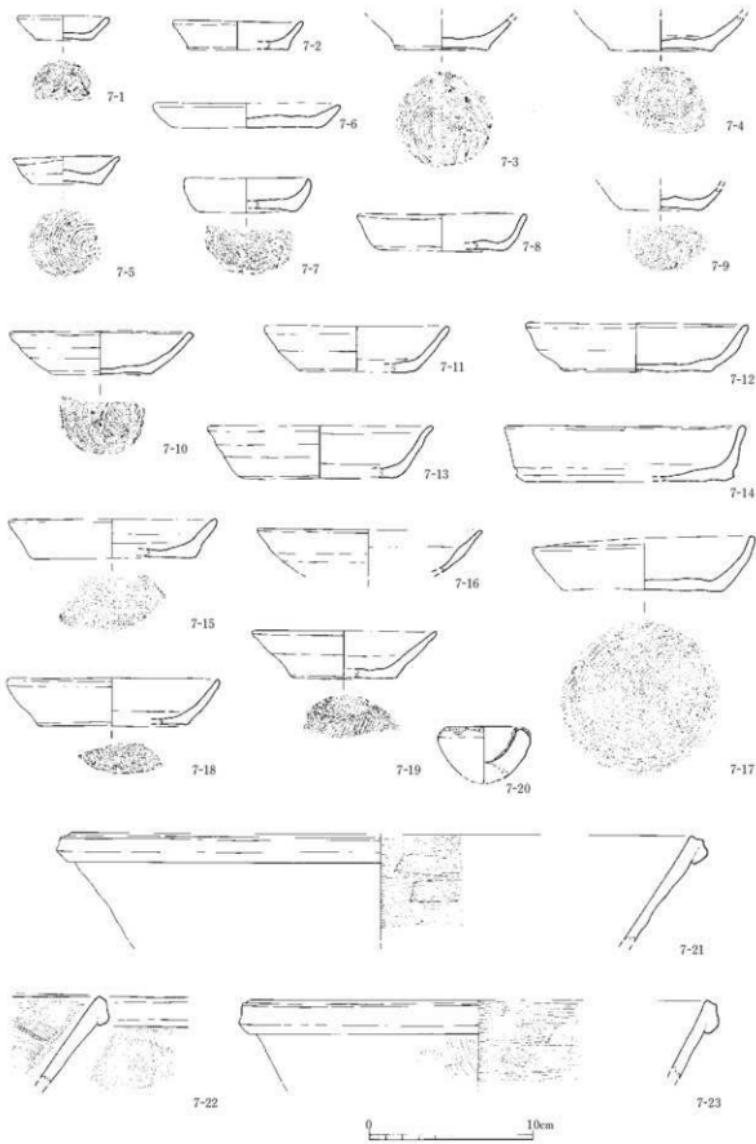
埴堀 (20) 7区南側石垣内から出土した埴堀である。胎土に砂、石英粒を含み、灰色を呈する。器の内側と口縁部に鉄滓が付着する。復元口径5.8cmである。埴堀、碗型溝、輪の羽口のセットが揃い、館の一角での小鍛冶が考えられるが、調査の結果そのような構造は検出できていない。

土鍋 (21~32) 4タイプの口縁部がある。口縁部を垂れ気味に肥厚させるタイプ (21~24・26~29)、「く」字状に肥厚するタイプ (25)、内側に肥厚させるタイプ (30)、以上はいずれも土師質である。これに対して、口縁下に舌状の把手を付け直上に2孔を穿つタイプ (31~32) とがありこれは瓦質である。前者は14世紀中頃から出現するタイプで、後者直口鍋は16世紀代に比定できるものである。30のタイプは形状から捏鉢の可能性がある。出土場所は21~23が巨石傍、24は火葬土坑内から、25~29が南側石垣内か整地層から、30は西斜面から、31・32は巨石周辺石垣内からの出土である。

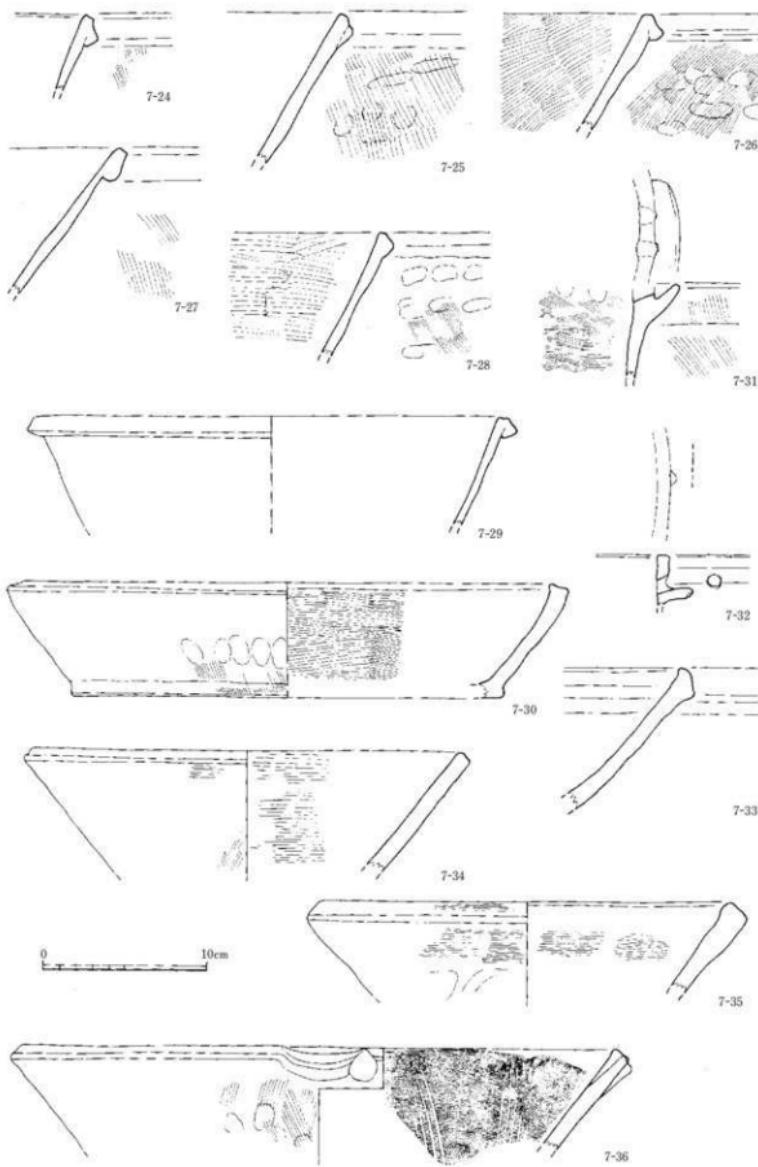
捏鉢・擂鉢 (33~38) 捏鉢は口縁部の形態から3タイプがある。33は瓦質土器で、形状は東播系の捏鉢であるが須恵質でないことから模倣品の可能性がある。34は体部から口縁部にかけて直線的に延びるタイプで、内外面にハケ目が残る。瓦質土器で巨石傍からの出土である。35は口縁部を上方に肥厚させるもので、須恵質であり東播系の模倣捏鉢かも知れない。7区の包含層から出土した。

擂鉢は36~38がある。36は瓦質の片口土器で5本単位の擂目を刻む。内面はハケ目、外面上にはハケと指圧痕が残る。7区の斜面から出土。37は口縁部を肥厚させ底部にかけて直線的に細まるタイプで15世紀代の所産であろう。擂目は4本単位で刻む。土師質で南端整地層からの出土である。38は瓦質の擂鉢で5本単位の擂目を刻む。南側石垣内から出土した。

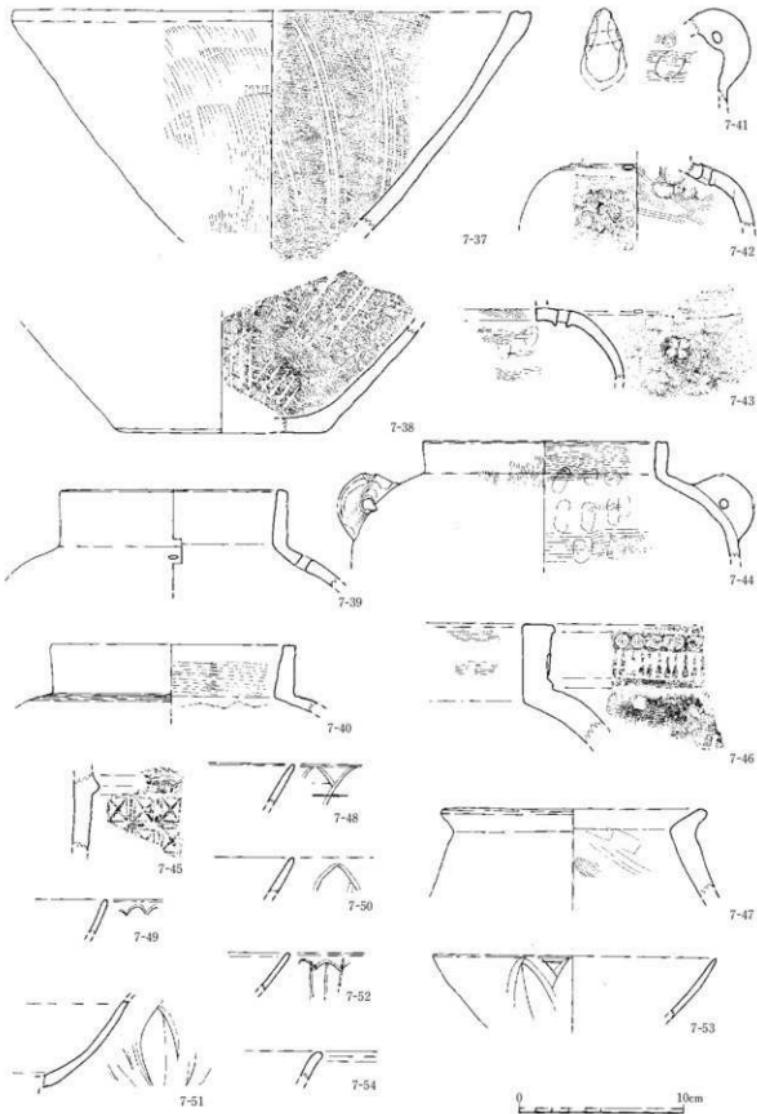
茶釜 (39~44) 39は土師質の長く直に延びる口縁部を持つ茶釜である。タイプとしては5区石垣内下層出土の茶釜(126)と7区(40)に類似する。肩部には整美孔を穿つ。小片のため孔の数は不明。復元口径は14.0cmである。南側石垣内からの出土で、口縁部の作りから14世紀前後頃の所産であろう。40は若干開き気味の長い口縁部を持つ茶釜で肩部に沈線を巡らす。復元口径15.0cmで、南側石垣内からの出土である。口縁部の特徴から39と共に存か若



第 57 図 調査7区出土土器実測図 1(1/3)



第 58 図 調査7区出土土器実測図 2(1/3)



第 59 図 調査7区出土土器実測図 3(1/3)

干後出するタイプであろう。

42は小形の茶釜の肩部片で、肩部には孔を穿ちその下に沈線を巡らす。沈線下には菊花文を花文状に刻印する。瓦質土器で南側石垣内からの出土である。43は南側石垣内から出土した肩部片で、孔を穿つ個所に1本の沈線を巡らす。瓦質で肩部に三つ揃いの花文をスタンプする。44は直立する短い口縁部を持ち肩部は大きく張る。肩部には1孔を穿った把手が付く。軟質の瓦器で復元口径15.0cmである。

火舎 (45) 瓦質の火鉢の上半部片である。断面三角凸帯が巡り、直下には方形区画に櫛がけの印文を二段にわたりスタンプする。西斜面の包含層から出土した。

風炉 (46・47) 7区の排水遺構から出土した風炉の破片である。5区の整地層上層から出土した160の風炉と口縁部の作りや形状、縦格子の刻目、菊花の刻印とも酷似しており、同一個体の可能性がある。瓦質である。47は用途のはっきりしない器種である。一見肩部が内傾し「く」字状に外反する口縁部の甕のように判断されるが、中世にこのような土師器の器種は知らない。器表面が二次被熱と風化が激しく剥離は著しい。全容がつかめないが簡易な風炉的な用途が考えられる。排水遺構からの出土で、復元口径16.3cmである。

青磁 (48～54) 54は小破片で不明瞭であり、口縁部の外反度から15～16世紀代の所産かもしれないが、その他は13～14世紀代の龍泉窯の鷺蓮弁文の青磁碗である。48は排水遺構出土でオリーブ色。49・50は南石垣内出土で緑灰色。51は巨石祭祀の詰石内から出土した碗で釉薬も透明感がある黄緑色で、出土した土師器の坏と共に2号巨石祭祀の時期の決め手となる資料で、祭祀時間が13～14世紀頃であることが分かる。53も巨石傍から出土している。

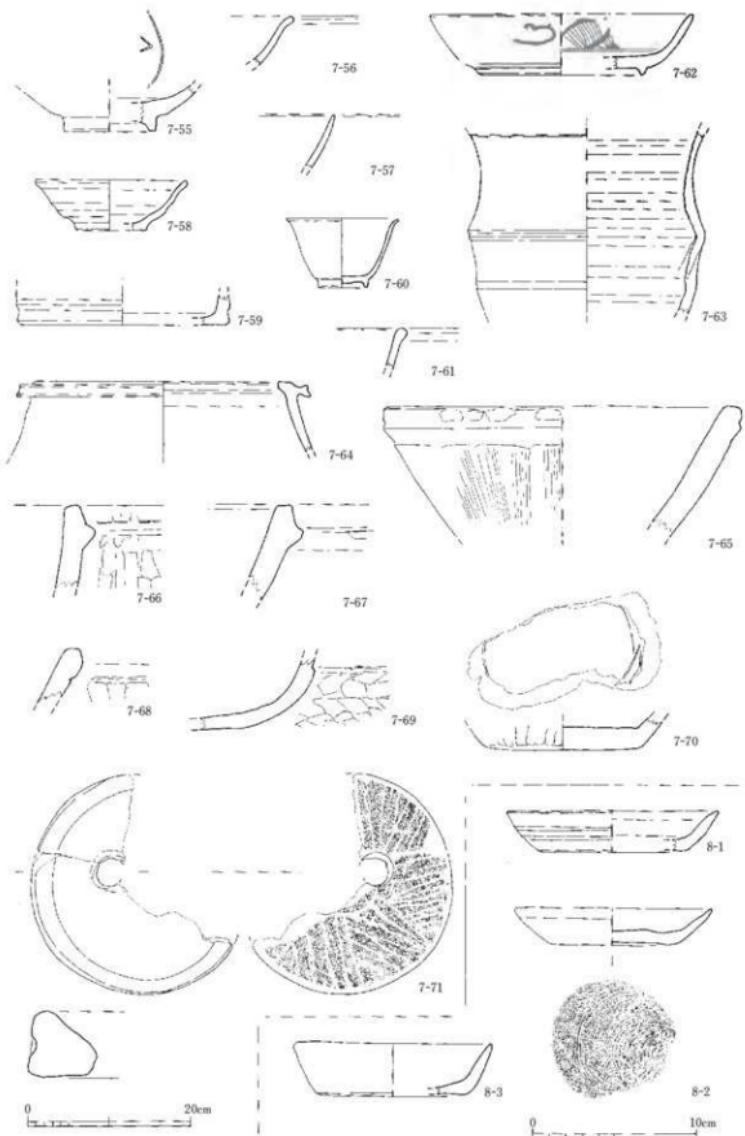
近世陶磁器 (55～64) 55は近世肥前青磁碗である。見込に圓が巡る。釉薬は緑灰色である。南端の整地層出土。57は近世磁器碗である。排水遺構出土である。59は石垣出土の香炉か。60は近世磁器、62は染付け皿、63・64は肥前陶器である。

石鍋 (65～70) 滑石製石鍋片である。65・68は口縁下の凸帯が退化し胴部が斜頸するタイプで15～16世紀頃のものであろう。66・67は5区出土の石鍋よりも形態的にやや後出タイプで口縁下の凸帯が退化している。67は体部が浅くなりやや新相を示す。巨石祭祀の積石内出土であり14世紀代の所産か。70の底部は66の口縁部が付くと考えられる。

茶臼 (71) 茶臼の上臼である。側面には回転軸の浅い孔を穿つ。摺り面には不規則な摺目を刻んでいる。7区の西斜面からの出土である。

② 7区の銅製品（図版42、第61図）

簪 (1) 7区の南側石垣内から出土した銅製品で、5区の石垣内から出土した銅製品と酷似しており簪であろう。5区の出土品より遺存状態がよく、上部は両方から細まり上端で完結する。端部は断面が方形である。図示した一方の面には偏った形で長楕円形の突起部が作られる。下端は欠損しており、どれほどの長さになるかは不明であるが、先端は尖るであろう。現存長は7.9cm、幅は0.8cm、厚さは0.12cmである。5区石垣内上層出土の製品と作りがまったく同じである。



第60図 調査7区・8区出土土器実測図 (1/3・1/6)

③鉄製品（図版42、第61図）

鉄 錫(2) やや大形の柳葉形の鉄錫で茎を欠損する。刃長は6.5cm、幅は2.0cm、厚さは0.4cmである。当該遺跡で武器はこの鉄錫1本で8区の包含層からの出土である。

鉄 釘 (3~6) 上部が「L」字状に曲がることから釘であろう。3は7区石垣から、4は排水遺構、6は8区の包含層からの出土である。5は両端が尖り気味で断面が方形であるが何かは不明。

④石製品（図版42・43、第61図）

板状玉 (7) 7区の火葬土坑から出土した板状玉である。火葬土坑内には骨片や骨粉（墓坑の規模から獸骨であろう）と共に水平に置かれた状態で出土しており、明らかに副葬品であることが理解される。表裏とも頗る平滑に磨き上げており、図示した表は赤茶色で裏は淡茶色を呈する。下端は切断痕が残り上端は欠損している。石材は色合いから山口県厚狭郡山陽町で産する赤間石であろう。現長は8.4cm、幅は3.2cm、厚さは0.5~0.6cmである。用途は不明である。

硯 (8) 方形板状硯である。7区の南側石垣（巨石傍）から出土した。海から陸の一部が遺存していて陸の下半が欠損する。5区から出土した整美な板状硯に比べて厚手で作りが粗い。粘板岩製で全体が黒色を呈している。幅は5.2cmである。

砥 石 (9~14) 石垣内から出土した砂岩製の中砥石である。現状での研ぎ面は1面のみで、図示した下面は自然面を残し上面が剥離していることから研ぎ面があったのであろう。10も石垣内から出土した硬質砂岩製の手持ちの仕上げ砥石である。研ぎ面は6面である。

11は火葬土坑付近から出土した粘板岩製の砥石であろう。しかし平滑に研磨されており、砥石にしては0.3cmと薄すぎる。別の用途の可能性もある。12は7区の巨石傍から出土した硬質砂岩製の手持ちの仕上げ砥石である。1/2を欠損し淡赤茶色を呈する。13は7区南側石垣内から出土した砂岩製の中砥石である。全体に煤が付着し、研ぎ面4面である。

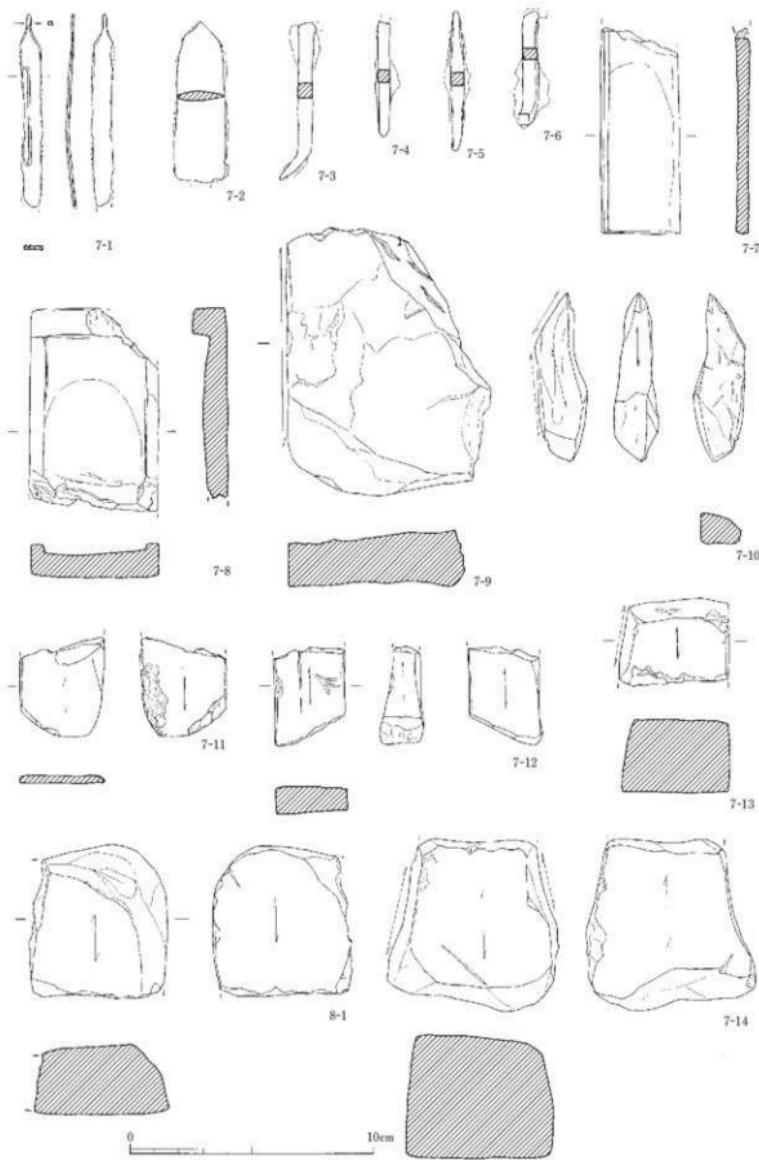
⑤8区の土器（図版39、第60・62・63図）

土師皿・坏 (1~5) 1~3は8区の南端整地層から出土した土師器の坏片である。すべて系切底で体部から口縁部にかけて丸みの有るタイプで、復元口径が12.0cm~13.0cmで14世紀頃の所産であろうか。2号巨石祭祀に関わる遺物であろう。4は底部から直線的に延びる皿で南端の整地層出土である。5は4と同じようなタイプのやや大振りの皿である。復元口径12.2cmである。石垣下層からの出土である。

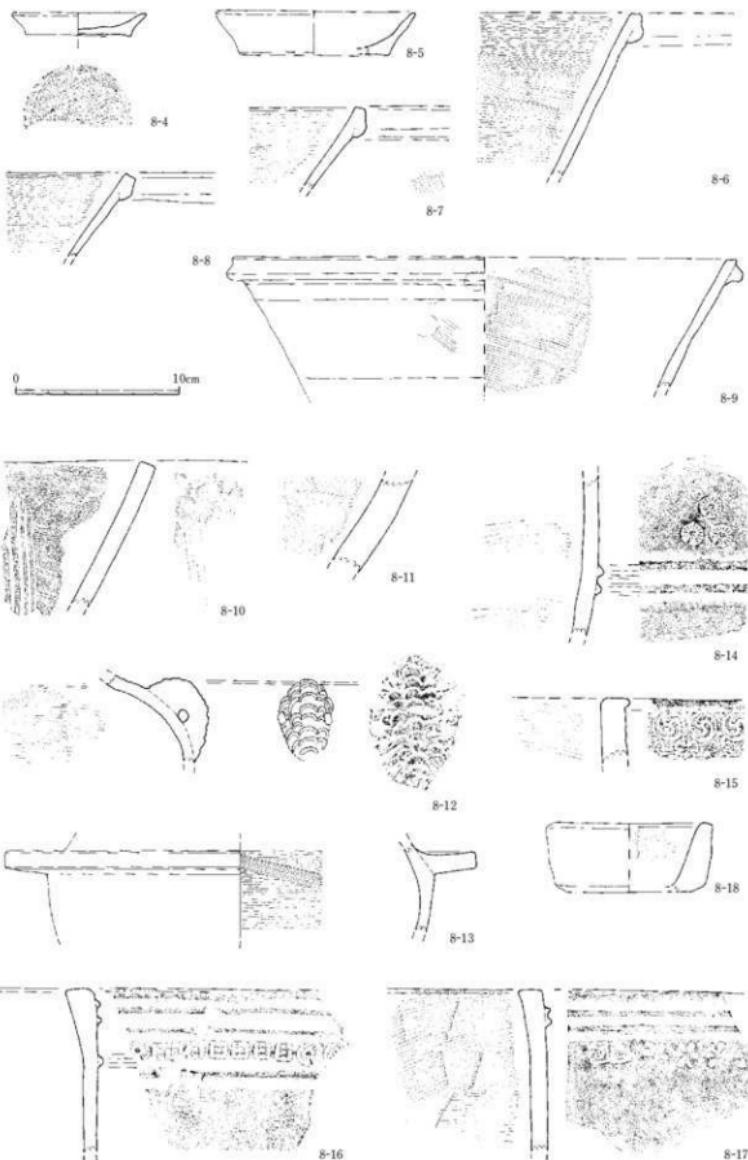
土 鍋 (6~9) 6~8は同じタイプの口縁部を持つ土鍋である。垂れ気味の肥厚した口縁部に直線的に細まる胴部を有す。不安定な平底をなすタイプであろう。調整は内面がヨコハケ、外表面はナデで仕上げる。6・7は包含層、8は石垣下層からの出土である。9は断面台形の凸帯を貼付したような口縁部である。14~15世紀代の所産であろう。

擂 鉢・捏 鉢 (10・11) 10は体部から口縁部まで直線的に作る擂鉢で土師質である。内面には4本単位の擂目を刻む。南端整地層出土である。11は8区の石垣内出土の厚手の捏鉢の破片であろう。

茶 釜 (12・13) 12は8区の石敷遺構から出土した茶釜の肩部片で、ヘラで松ぼっくり状



第61図 調査7区・8区出土銅製品・鉄製品・石製品実測図(1/2)



第62図 調査8区出土土器実測図1(1/3)

の刻みを入れている。おそらく獸を表現したものと考えられる。瓦質土器である。13は胴部片で広い鍔が巡る。瓦質土器で南端整地層から出土した。

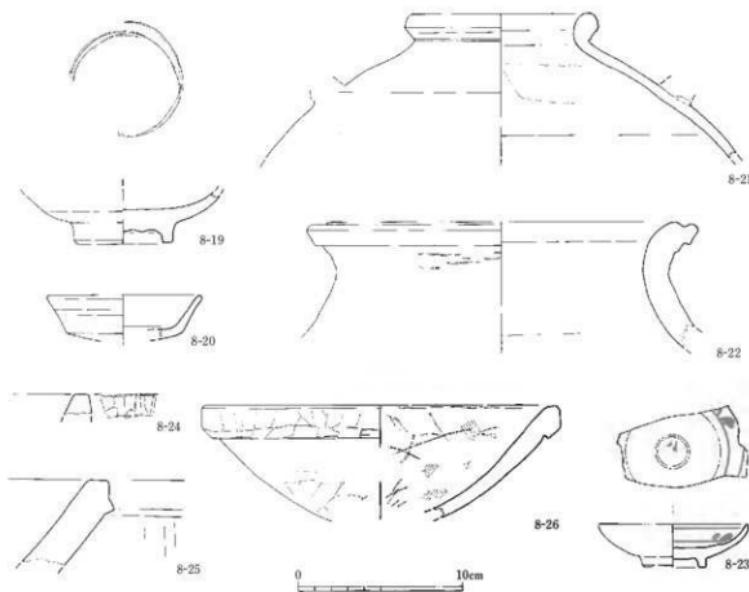
火鉢(14～17) 14は火鉢の下半に近い胴部片で、2条の断面台形の凸帯が巡りその上には三つ揃いの菊花文を刻印する。瓦質土器で包含層からの出土である。15は口縁部片で口唇部を外側に肥厚させ直下には巴文と花文を密にスタンプする。瓦質で整地層からの出土である。

16は口縁部を内湾させるタイプの火鉢で、外面に3本の断面台形の凸帯を貼付する。下段の凸帯間に方形内に井桁状のスタンプを7個刻印し両端には菊花文を押印している。包含層出土で瓦質土器である。17は内湾する口縁部を内側に若干肥厚させる火鉢である。肥厚部分には刻み目を入れている。口縁部外面には「M」字状の凸帯を巡らせ直下には雷文と花文を刻印している。土師質で表面に橙色の化粧土を塗布しており整美な火鉢である。包含層からの出土である。

香炉(18) 8区の石敷遺構から出土した香炉(線香立)の破片である。5区石垣下層出土の158の香炉に酷似するが、脚が付くかは不明である。底部は薄く作るが体部から口縁部は厚作りで、土師質である。

青磁(19) 8区包含層から出土した龍泉窯の青磁碗の底部片である。胴下半の曲線から15～16世紀頃の所産であろう。見込には薄っすらと圓線が見える。高台の内側は露胎で釉薬は灰黄緑色である。

白磁(20) 底部から反り気味に外反する口縁部を有する皿で、低い高台が付くと思われる。



第63図 調査8区出土土器実測図2(1/3)

胎土は灰黄色で釉調は乳白色を呈する。復元口径 9.5cm で近世磁器である。

陶 器 (21・22) 黒釉陶器の茶壺である。玉縁口縁部で大きく肩が張り、肩部には耳が付くが個数は不明である。近世陶器であろう。包含層からの出土である。22は形状から見て常滑焼の壺であろう。口縁部を摘み出し二重口縁をなす。頸部は綺麗な肩部をなすであろう。淡い焦げ茶色を呈し、復元口径 24.0cm である。

染 付 (23) 近世の染付皿で見込と内側面には草を表現していると思われる。南端の整地層から出土した。

石 鍋 (24～26) 滑石製石鍋で口縁部を垂れ気味に肥厚させるか小さな三角凸帯を削りだす。体部は細まり全体に浅く作る。整地層からの出土で 15～16 世紀頃の所産であろう。

⑥ 8 区の石製品 (図版 43、第 61 図)

砥 石 (1) 石敷造構内から出土した砂岩製の荒砥石である。研ぎ面は 2 面で、左側と下部を欠損する。

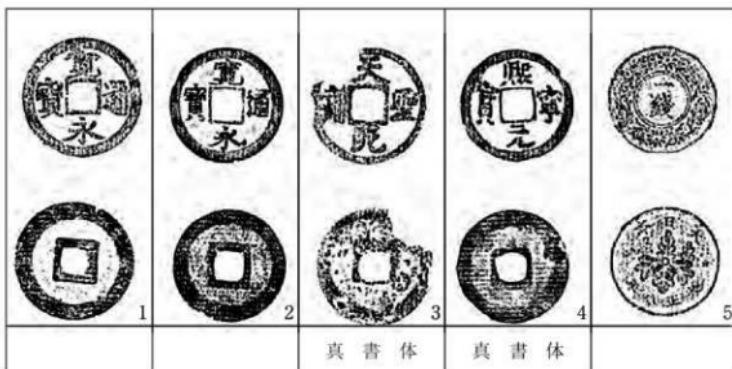
(7) その他の出土遺物

① 古 錢 (図版 43、第 64 図)

1・2 は 1 区と 3 区から出土した寛永通寶である。2 の方が一回り小振りである。3 は 5 区整地層上面から出土した天聖元寶で、一部が欠けている。真書体で無背である。初鑄年は 1023(天聖元年) 年である。4 は 5 区南側整地層から出土した熙寧元寶で完形品である。真書体で表し無背である。初鑄年は 1068(熙寧元年) 年である。5 は 大正 8 年の一錢硬貨である。

② 繩文時代の石器 (図版 43、第 65 図)

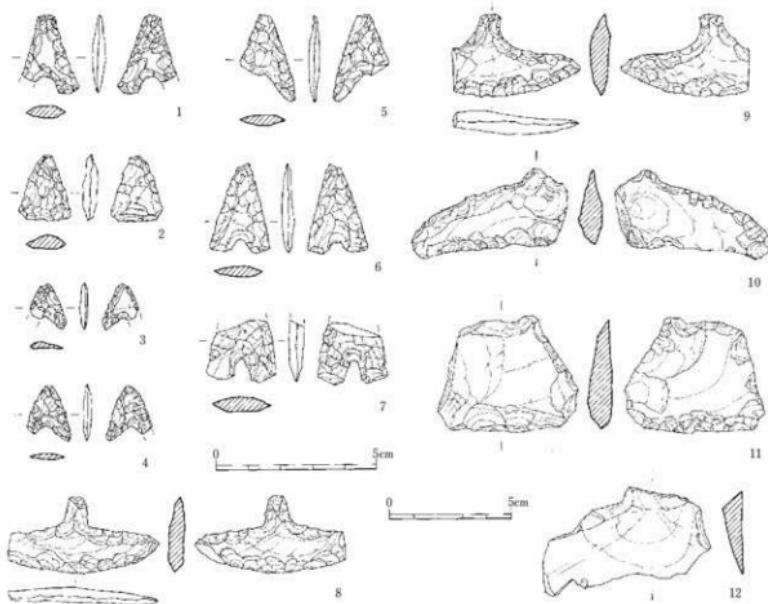
石 鐵 (1～7) 1 は 所謂トロトロ石器と呼ばれるもの。3 区出土。石材は灰色を呈するチャート。先端部は丸みをもつ。剥離面には横方向の擦跡が残り、稜はつぶれる。2 は 安山岩製の平



第 64 図 調査 1 区・3 区・5 区・8 区出土古銭拓影図 (実大)

基鏃。7区出土。片面の剥離は粗い。3は黒曜石製の凹基鏃で、長さ1.4cmと小形。表採品。片面は主要剥離面を残す。4は姫島産黒曜石製の凹基鏃。5区出土。5・6は安山岩製の凹基鏃。細長い形態であり、5は抉りが深く脚端が尖る。5は5区、6は3区出土。7は安山岩製の凹基鏃で先端部は欠損。5区出土。6・7の脚端は幅広い。石鏃の形態はバラエティーに富み、時期幅が想定される。

石匙(8~12) 8・9は安山岩製の石匙。端部を欠損するが、ほぼ同規模・形態と想定される。横長剥片を用い、主要剥離面を残して成形する。8は7区、9は6区出土。10は周縁に調整剥離を加える安山岩製の縱長剥片。8区出土。11は台形に整形されるスクレーバーで、圓化した下辺に刃をつける。5区出土。12は圓化した右上辺に使用痕を残す安山岩剥片。圓化した反対面未調整である。5区からの出土である。



第65図 東小河内遺跡出土の縄文時代の石器実測図(2/3・1/2)

2 炭焼窯跡の調査

近世炭焼窯跡（図版 24-(3)・25-(1)、第 66・67 図）

東小河内集落の裏山標高 420m～422m で調査した炭焼窯跡である。集落との比高差は約 40m である。炭焼窯跡本体の左側の標高 422m には花崗岩の簡易な石垣を築き、窯本体の前面にも石垣でテラスを設け、下からの通路としている。窯の左側には崩壊を防止するための石垣を弧状に築いており、窯本体と石垣の間約 1.0m をバイラン土で固めている。

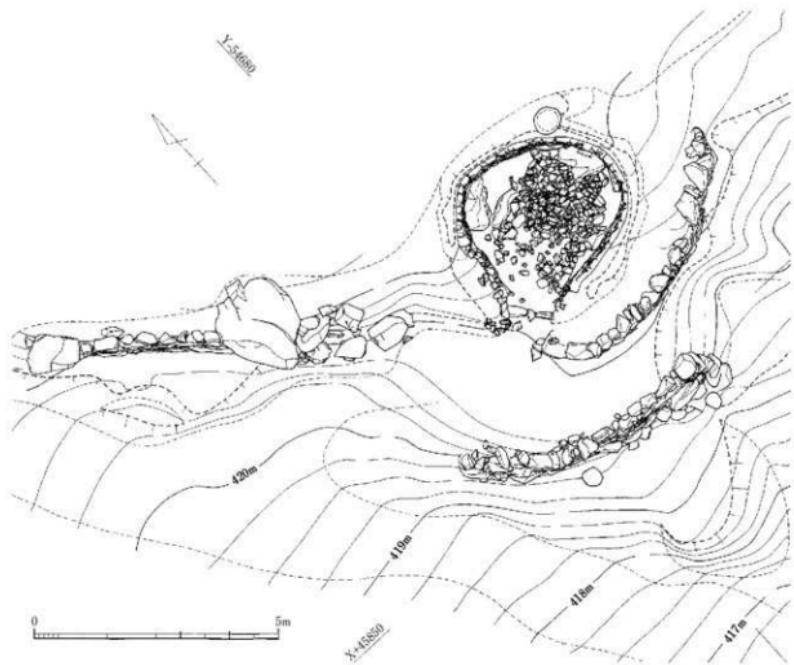
窯本体は歪な円形を呈し、焚口は南西に向いている。窯の構築方法は、まず急峻な斜面をテラス状に削り、大振りの花崗岩の角礫を雜に敷き詰める。その周りを巾着形に大振りの花崗岩を巡らす。それに沿ってやや小振りの花崗岩を積み上げ、古墳の横穴式石室の形に構築する。奥壁には煙り出しの空間を作る。それを延長して地表に申し煙突にする。煙突の先端は石を立てて周囲より一段高くして流水や雨水の流入を防ぐ工夫をしている。その後、床面に小振りの花崗岩礫を敷いている。最終段階で原材料を詰め込んだ後、本体上部にドーム状の覆いが作られるが痕跡はない。窯の規模は、幅が 3.20m、奥行きが 3.50m、側壁の高さが 1.20m、燃焼部の幅は 0.80m である。

五ヶ山における近世の炭焼窯は、谷の至る所に散見でき、文献から見ても筑前国続風土記拾遺一に「山谷曠闊なるに依て農民薪炭を販き或ハ紙をすき・・・」とあり、江戸期頃には炭焼きが行われていたことが分かると共に昭和期にかけても脈々と続けられていた。

今回、五ヶ山ダム用地内を調査した結果、東小河内遺跡や倉谷地区の尼寺跡遺跡から中世頃の炭焼窯跡を確認した。中世の炭焼窯跡は近世のそれとは異なり、丘陵の斜面をドーム状に掘り込み、平面形状は前面を入れて杓文字形である。煙突は二タイプあり、ひとつは奥壁の下方に穴を開けそのまま割り貫いて表面に出すもの、このタイプは奥壁の煙道口の両側に板石を立てている。もうひとつは奥壁に縱方向の溝を掘りそこに三段ほどの石組みを古墳の横穴式石室の帽石状に構築し、それを粘土で封印して煙道とするタイプである。煙突の先端には石を立てて上からの流水を防ぐ工夫をしている。東小河内遺跡では排水溝と考えられる傍の溝から、尼寺跡遺跡では窯の覆屋と考えられる柱穴からそれぞれ中世の土鍋片が出土しており、炭焼窯の上限期を中世にまで遡ることが判明した。



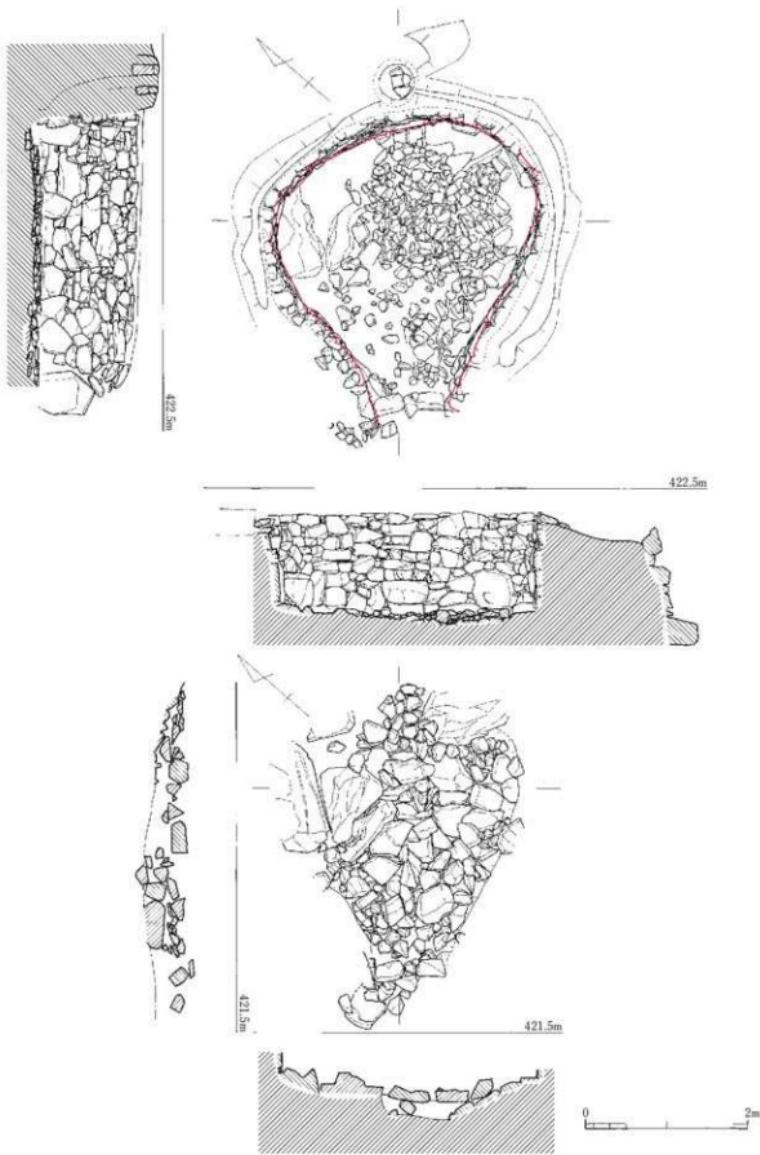
尼寺跡遺跡 3 区の中世炭焼窯跡全景



第66図 東小河内谷近世炭焼窯跡と地形測量図(1/100)



尼寺跡遺跡3区の5・6号炭焼窯跡(中世)



第67図 近世炭焼窯跡実測図(1/60)

IV 総括

①五ヶ山の由来と往時の背景

五ヶ山の名の由来は、筑前國續風土記拾遺卷之（十四）に「民居は本村を網取と云う。道十里 桑河内 東小河内 大野 落合に在。落合は大野の内なり。網取より大野まで五村あるによりて五ヶ山村の名あり。」とあり、網取から大野までの村の数で呼称されるようになった。五つの村の内、網取村が最も規模が大きく平坦部も広い。その次に谷の広さから見て東小河内村が戸数が多いようである。

五ヶ山ダムに関連する発掘調査では、この二つの村から13世紀から16世紀頃の遺跡が発見され、村の発祥が中世に遡ることが確実になった。出土した遺跡の内容は両者とも中世の館跡で、周囲を管見すると勝尾城の支城である中世山城の一ノ岳城（網取遺跡から直線距離にして1.8km、東小河内遺跡から直線距離にして2.8km）や虎ヶ岳城（網取遺跡から直線距離で1.5km、東小河内遺跡から直線距離にして2.9km）が築かれており、これらの中世山城とは無縁ではないと考えられる。

また、東小河内谷の入り口には、白土城（猫城）の伝承があり、平成25年度に那珂川町が調査を行ったが、中世山城としての位置づけが明確ではないようである。平成20年度に白土城直下を試掘したが、山城の曲輪に関する遺構・遺物は皆無であった。

一方、一ノ岳城について筑紫文書（1652）の筑紫良泰筑紫家由緒などでは、筑紫惟門と五ヶ山との由来が詳細に記述されており「筑紫惟門が五ヶ山に退いたあと1559年に勝利を取めた云々」や他の文献では、「1567年に五ヶ山にて自害した云々」とあり、15世紀から16世紀頃にかけて五ヶ山を舞台に緊張状態が繰り広げられていたことが分かる。この時期に符合するかのように網取遺跡や東小河内遺跡に館が築かれ、活発な生業が営まれていた。このように当時の五ヶ山周辺の緊張状態と網取遺跡や東小河内遺跡の存在とは無関係ではあるまい。

また、網取・東小河内遺跡から出土した鉄滓や碗型鍛冶滓、鞴の羽口、坩埚の存在は鍛冶の生業が見て取れる。さらには、建久2年に臨濟宗の開祖栄西が中国から背振山石上坊にもたらしたとされるお茶を元に、五ヶ山一帯で盛んにお茶が栽培されたと推測され、「筑前國續風土記拾遺 第十四卷」には、「山谷曠洞なるに依て農民薪炭を販き或ハ紙をすき茶を製し云々」とあることから中世に遡って茶臼を使った抹茶生産が行われ、証左として多くの茶臼の出土を見たのである。

更には、「農民薪炭を販き云々」とあるように、東小河内遺跡からは小形の素掘りの炭焼窯跡が出土し、平成23年度に調査した倉谷の尼寺跡3区からは、總まと中世炭焼窯跡が発見された。また、「筑前國續風土記拾遺 第十四卷」の観音堂の項には「東小河内の観音堂は人家の際寺裏と云う所に在。古寺址なり。・・・其奥蔵の内に土を築き竈の形の如くなるか頗たるあり。いにしへ火葬の竈なりしかといへり云々」とあり、これも中世の炭焼窯の可能性が推測されることから、東小河内谷においても倉谷同様の炭焼きが生業として盛んに行われ、市で販売していたと考えられる。

②遺跡の特徴

平成19年度に調査した網取遺跡では、15世紀から16世紀を中心とする方形区画溝に囲繞された館跡と推測される遺跡を発掘した。まさにこの遺跡は、本城の勝尾城と支城の一ノ岳城

一帯を巻き込む緊張状態が続いた時期と符合するものである。今回の東小河内遺跡の調査は、これと同じような内容の遺跡を調査したことになるが、東小河内遺跡は網取遺跡よりは時期的に2世紀ほど古くなると共に、濠の代わりに柵列や石垣で館を囲繞する防御策をとるなど、若干内容を異にする。

東小河内遺跡をつまびらかに説明すると、大略13～14世紀（Ⅰ期）と15～16世紀（Ⅱ期）の二時期に別れる。つまり、Ⅰ期の丘陵の緩斜面を段状に落差をつけて整形し、その周間に柵列を巡らし門を付設して防御する館とⅡ期の段差のある個所に石垣を巡らし門と柵列を設置した形の館である。

Ⅰ期の館は、石垣下と整地層下から検出した5号と6号掘立柱建物跡が柱間軸が同じで近接していることから建て直しであろう。3号・4号が同時併存かは定かでないが、柱間軸がずれていることから同時期ではないであろう。Ⅰ期の建物は他にも存在するはずであるが掘めていない。

Ⅰ期に併存する遺構としては、柵列・門跡のほかにピット内から出土した遺物から7号掘立柱建物跡がある。この建物は他の建物に比べて柱穴も小さく石に囲繞されたような形で建てられている。西側には水が流れる13世紀から16世紀にかけての排水遺構があり、風炉や青磁碗などが出土していることから、茶を嗜む所としての用途が推測される。

さらには、7区の一角に鎮座する二つの巨石祭祀がⅠ期の館跡と併存すると考えられる。根拠としては、両巨石の間の詰石から13世紀から14世紀頃の龍泉窯の青磁碗と、詰石からこぼれ落ちたと考えられる同時期の土師器の壊が出土したことからも指摘できる。

8区の石列と敷石については新旧の出土遺物が渾然一体となって出ており時期決定が出来ないが、1号祭祀遺構との関連も指摘できよう。

Ⅱ期の館は、1号から4号までの掘立柱建物跡が考えられるが、重複関係からどの建物が同時に併存かは理解できない。明らかなのは1号と2号、3号と4号が重複することから併存ではないことが分かるぐらいである。その他にも掘立柱建物の存在が考えられるが的確な建物は把握できていない。

そのほかⅡ期に並行すると考えられる遺構としては2号巨石祭祀がある。この巨石信仰祭祀遺構は1号巨石祭祀より後出すると考えられる。周開からは13世紀から16世紀までの遺物が散在しているが、唯一巨石傍に奉納されていた和鏡が時期の決め手となる。

和鏡は外区に柳葉文を挟んで突出する有圓珠文帯を、その内側に太い花形界縁を巡らせる。その内側には細珠文帯が巡る。久保智康「中世・近世の鏡」－日本の美術394－によると花形界縁に突出珠文帯を巡らすタイプはⅡ類に属し、14世紀後半頃から16世紀初め頃まで残るとの指摘があり、これらを考え合わせると鏡の年代は15世紀頃と判断される。

1号巨石祭祀の東側に広がる庭園遺構は、Ⅰ期の所産とは考えにくく石垣が築かれた後に設営したものであろう。これは庭園遺構と1号・2号掘立柱建物跡の桁軸に整合性が見られることからも指摘できよう。庭園遺構の西端から7区に続く排水遺構は本来流水があり、これをうまく取り込んで庭園としたものであろう。

もうひとつ指摘しておきたい事象がある。館のほぼ中央付近の3号掘立柱建物跡から那珂川を挟んだ正面の山祇神社の境内に佐賀県指定の天然記念物「小川内の大杉」がある。この館の真正面にあたり、佐賀県から樹齢700年から800年との指摘があり、何故かⅠ期の館建設と符合するのである。

図 版



(1) 東小河内遺跡
1区～8区俯瞰
(東から)



(2) 調査1区全景
(東から)



(1) 調査 2 区全景（東から）



(2) 調査 2 区全景（西から）



(3) 調査 3 区全景（北から）



(1) 調査3区・4区俯瞰



(2) 東小河内遺跡からみた
佐賀県東小川内集落跡
(東から)



(1) 東小河内遺跡 5区～8区俯瞰（西から）



(2) 佐賀県小川内からみた
東小河内遺跡遠景
(西から)



(1) 調査1区石組造構（東から）



(2) 調査1区石組造構石蓋除去
後の状態（東から）



(3) 調査1区1号土坑（南から）



(1) 調査 1 区 2 号土坑（南から）



(2) 調査 3 区埋甕土坑（南から）



(3) 調査 4 区埋甕土坑（北から）



(1) 東小河内遺跡 5区～7区俯瞰
(南から)



(2) 調査5区中世石垣出土状態
(土層左端が現代の石垣裏込)



(3) 調査5区整地層と石垣裏込石
(SN01、北西から)



(1) 調査 5 区整地層
(SN02、東から)



(2) 調査 5 区整地層
(SN03、北西から)



(3) 調査 5 区整地層
(SN04、東から)



(1) 調査 5 区石垣下の整地層
(南から)



(2) 調査 5 区整地層面の柱穴群
(北から)



(3) 整地層面出土の火舍



(1) 整地層面出土の土鍋



(2) 整地層面出土の土師器



(3) 庭園造構出土の青磁碗



(1) 1号埋石土坑（東から）



(2) 1号埋石土坑完掘状態
(北から)



(3) 2号埋石土坑と円形抉りの
大石（南東から）



(1) 2号埋石土坑の埋石除去後の
状態と円形抉りの大石
(北西から)



(2) 調査 5区炭化物土坑 (西から)



(3) 調査 6区炭焼窯跡土層堆積
状態 (南西から)



(1) 調査 6 区炭焼窯跡と覆屋の
柱穴 (南から)



(2) 調査 6 区炭焼窯跡と覆屋の
柱穴及び溝状遺構 (東から)



(3) 調査 5 区中世石垣とテラス
(南西から)



(1) 中世石垣とテラス中央部
(南から)



(2) 東側中世石垣とテラス
(南西から)



(3) 東端中世石垣とテラス
(南から)



(1) 中世石垣とテラス全容
(北西から)



(2) 中世石垣とテラス (北西から)



(3) テラスの盛土状態 (北西から)



(1) テラスの盛土と下層柱穴
(SN04、南東から)



(2) 調査 5 区整地層下層の焼土



(3) 初期館跡のテラスの柵列痕
(横線は二期テラスの盛土底面)



(1) 中世石垣と階段状裏込
(西から)



(2) 石垣の階段状裏込 (北から)



(3) 西端石垣と庭園造構 (南から)



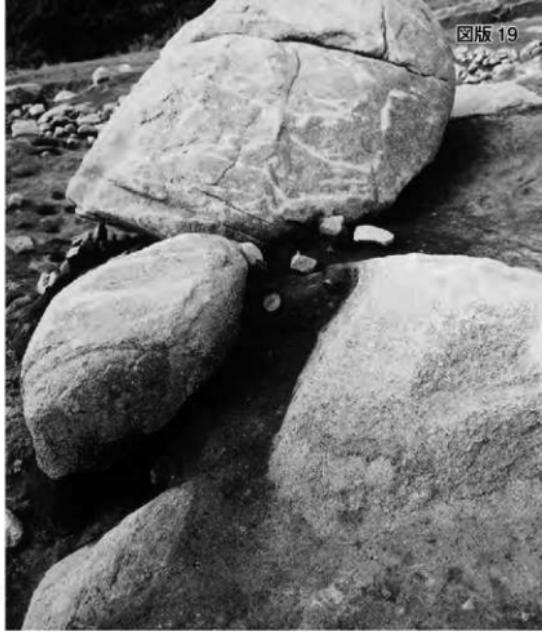
(1) 庭園遺構（北東から）



(2) 庭園遺構（南から）



(3) 館跡西端の石列（東から）



(1) 1号巨石祭祀遺構（鏡を奉納、東から）



(2) 1号巨石祭祀遺構鏡出土状態
(東から)



(3) 1号巨石祭祀遺構（南から）



(1) 調査5区～7区の全景
(北西から)



(2) 7号掘立柱建物跡 (北から)



(3) 調査7区火葬土坑検出時
(東から)



(1) 調査 7 区火葬土坑（東から）



(2) 火葬土坑副葬品出土状態



(3) 火葬土坑石除去後の状態



(1) 調査 7 区 2 号集石土坑
(南から)



(2) 調査 7 区排水(水路)造構
(北から)



(3) 調査 7 区排水(水路)
造構石除去後 (北から)



(1) 2号巨石祭祀遺構（南西から）



(2) 2号巨石祭祀遺構の詰石
(中層から青磁碗、下層から
土師器の壊出土)



(3) 調査7区～8区の土層堆積
状態（西から）



(1) 調査 8 区の石組と石敷遺構
(西から)



(2) 調査 8 区の巨石傍の石組
(南東から)



(3) 近世炭焼窯跡 (北から)



(1) 近世炭焼窯跡（南から）



(2) 発掘調査風景

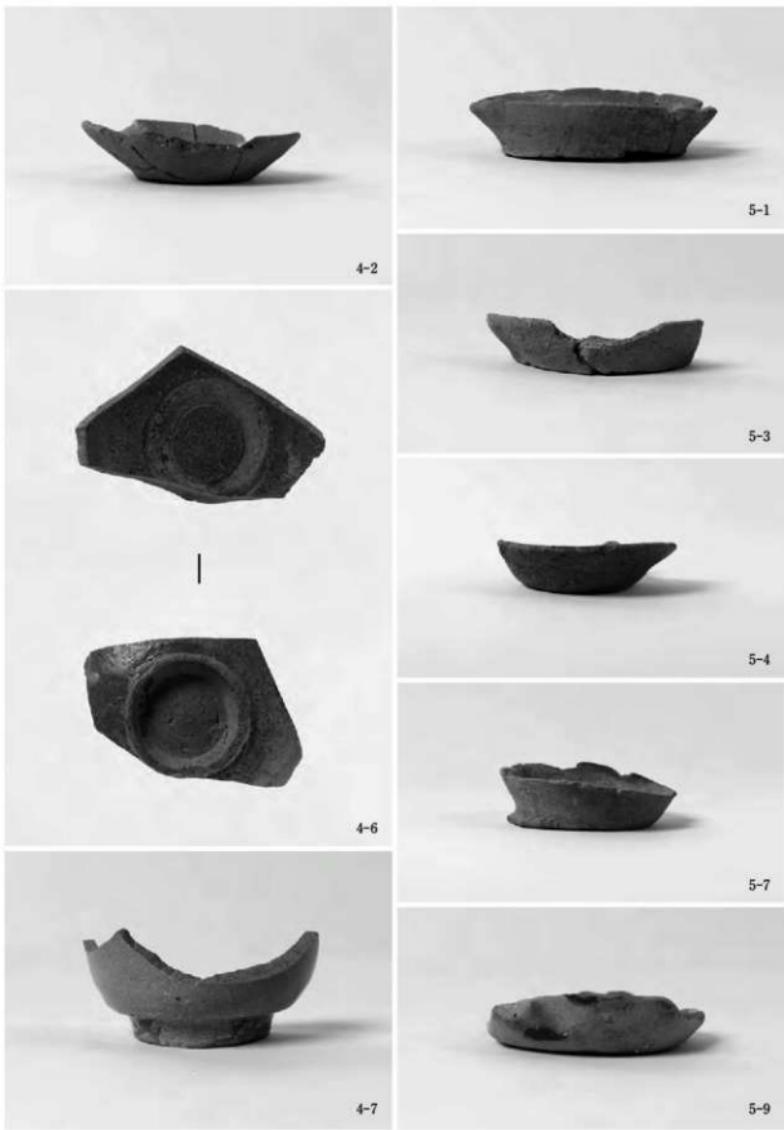


(3) 東小河内遺跡からみた
小川内山祇神社の大杉
(佐賀県指定天然記念物)

図版 26

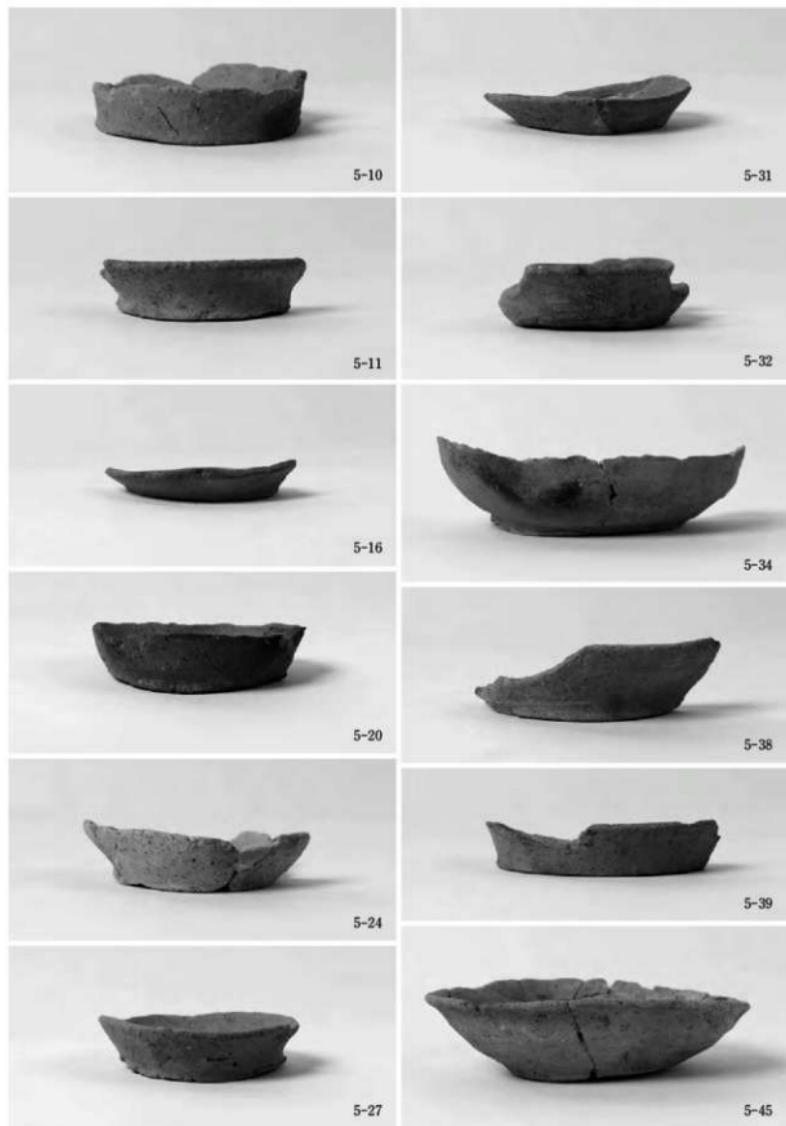


調査1区・2区・4区出土遺物



調査4区・5区出土遺物

図版 28

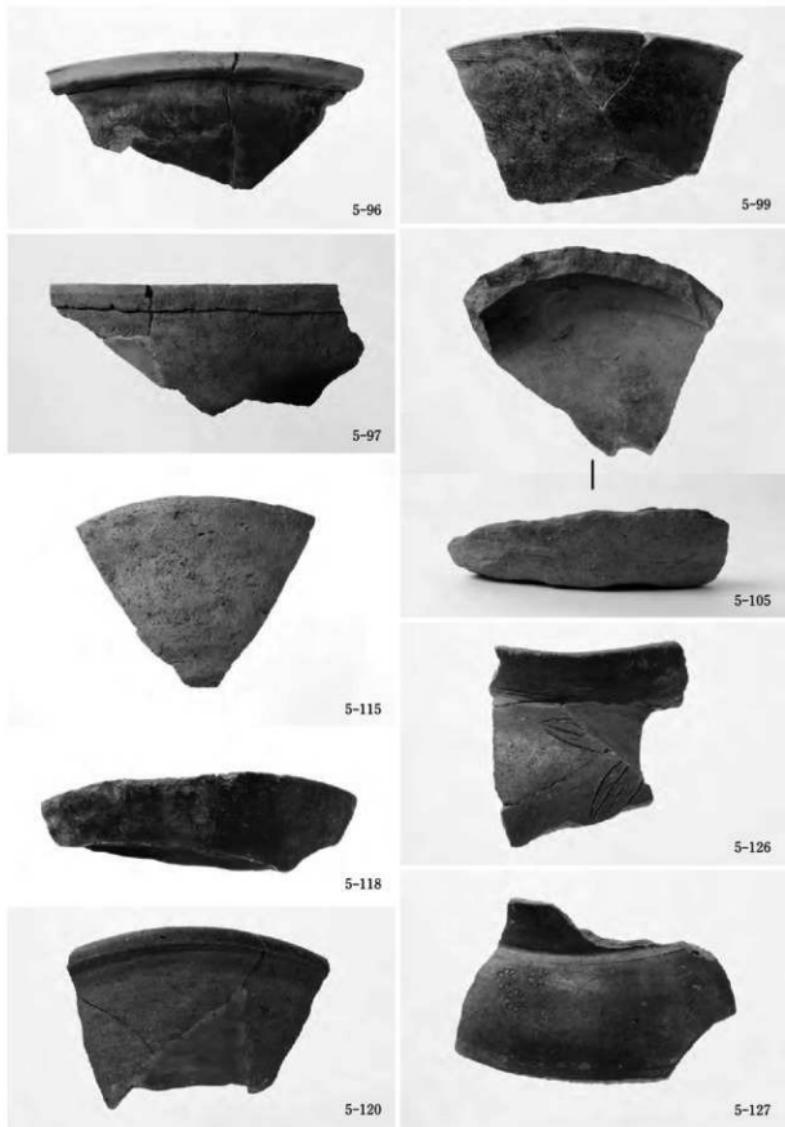


調査5区出土遺物



調査5区出土遺物

図版 30

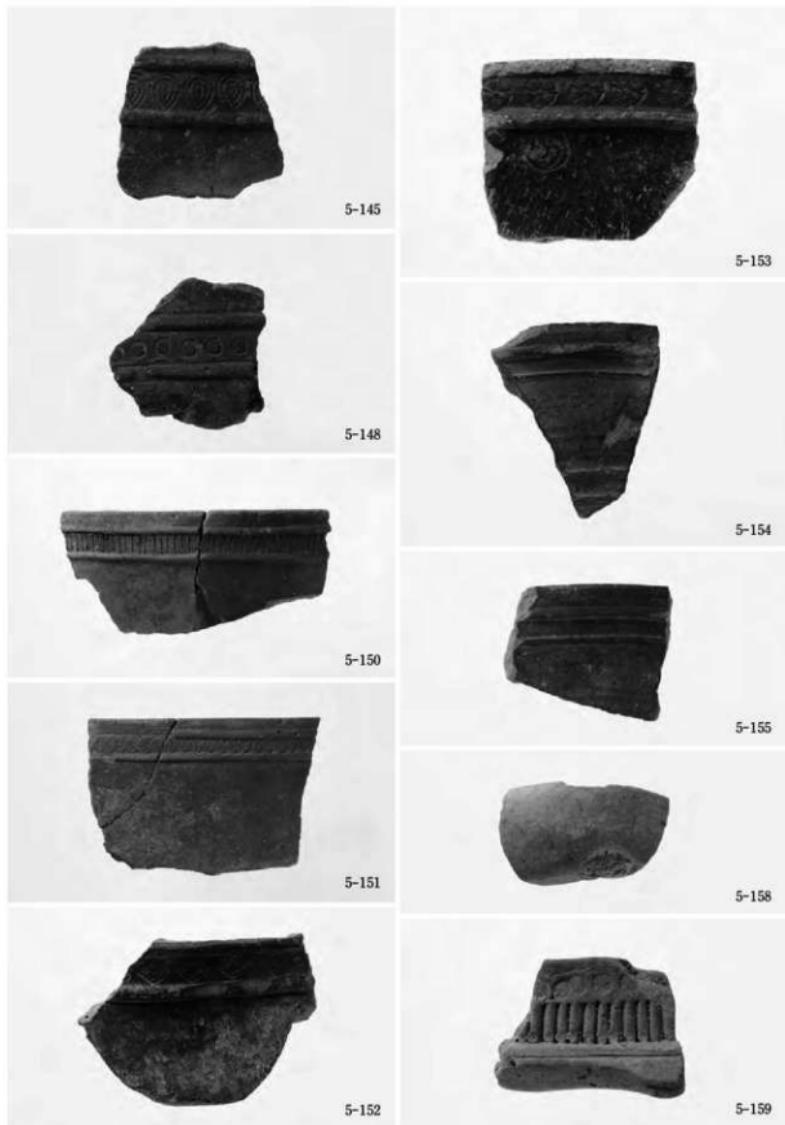


調査5区出土遺物

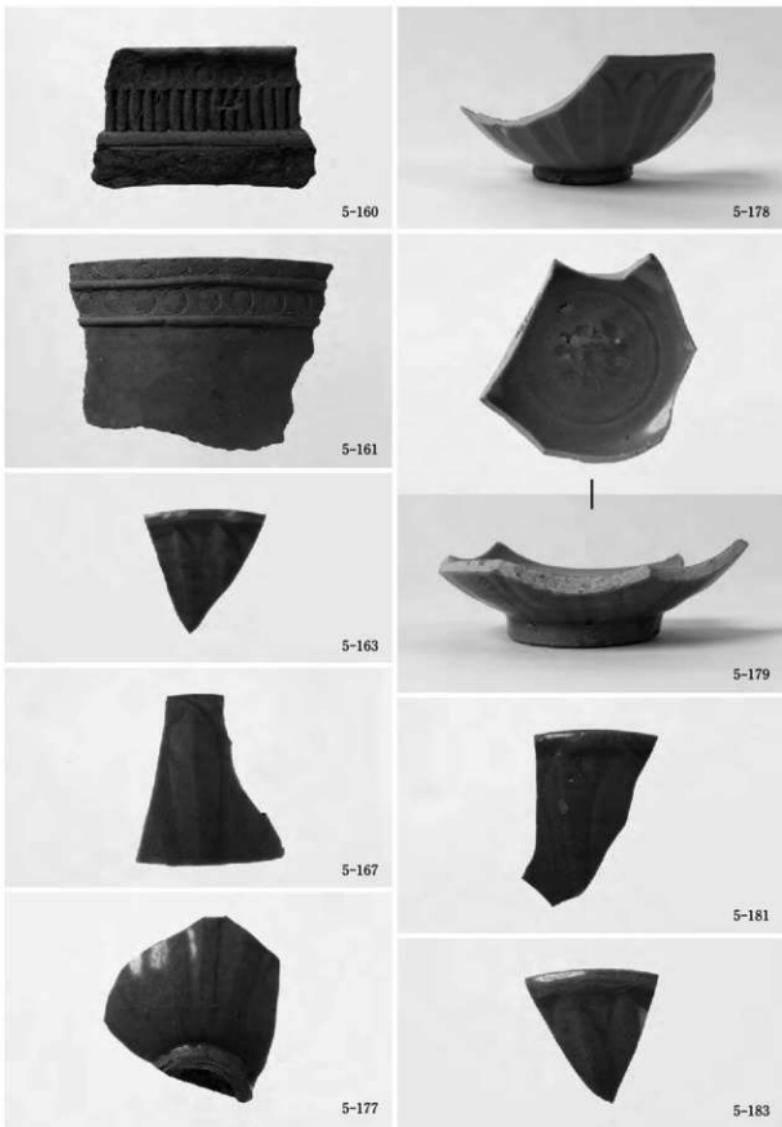


調査5区出土遺物

図版 32

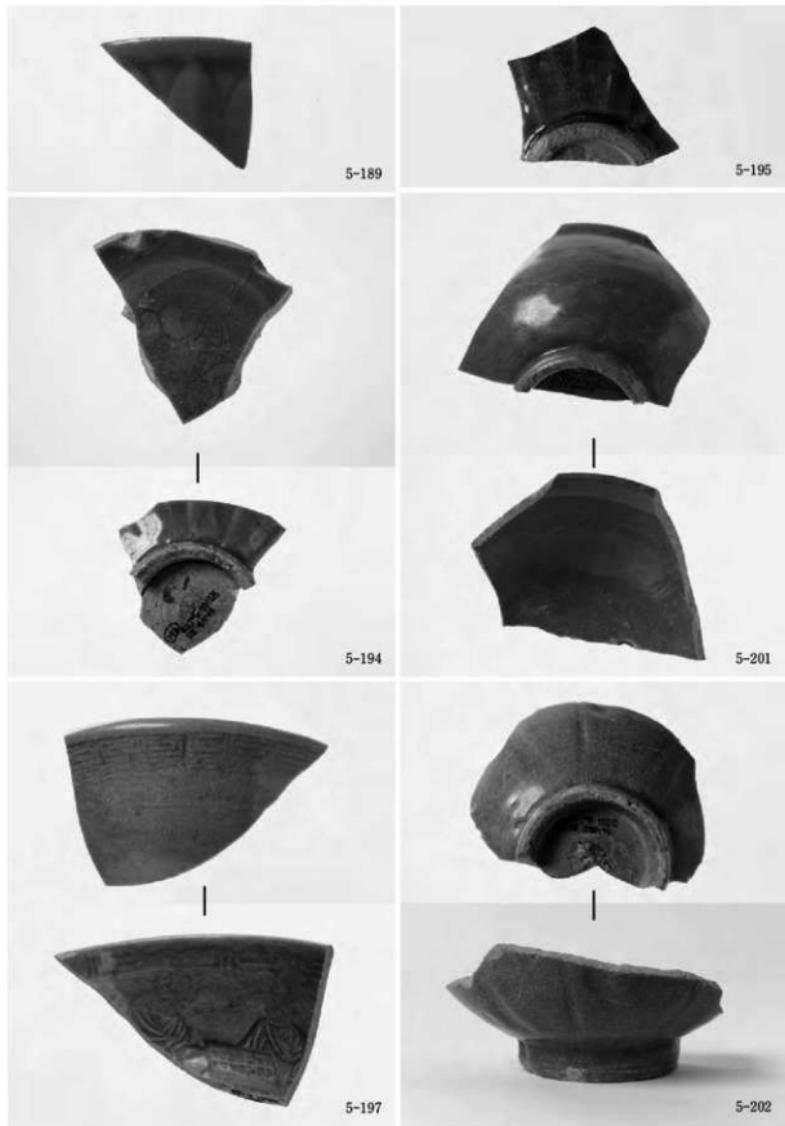


調査5区出土遺物

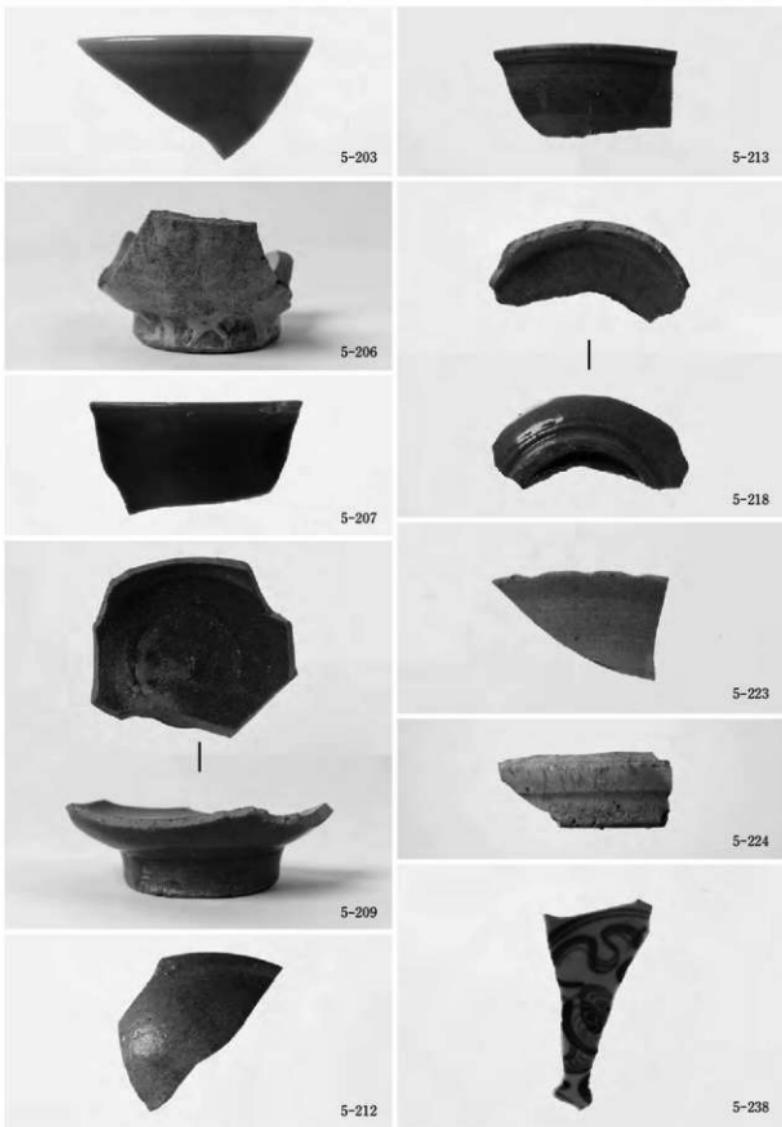


調査5区出土遺物

図版 34

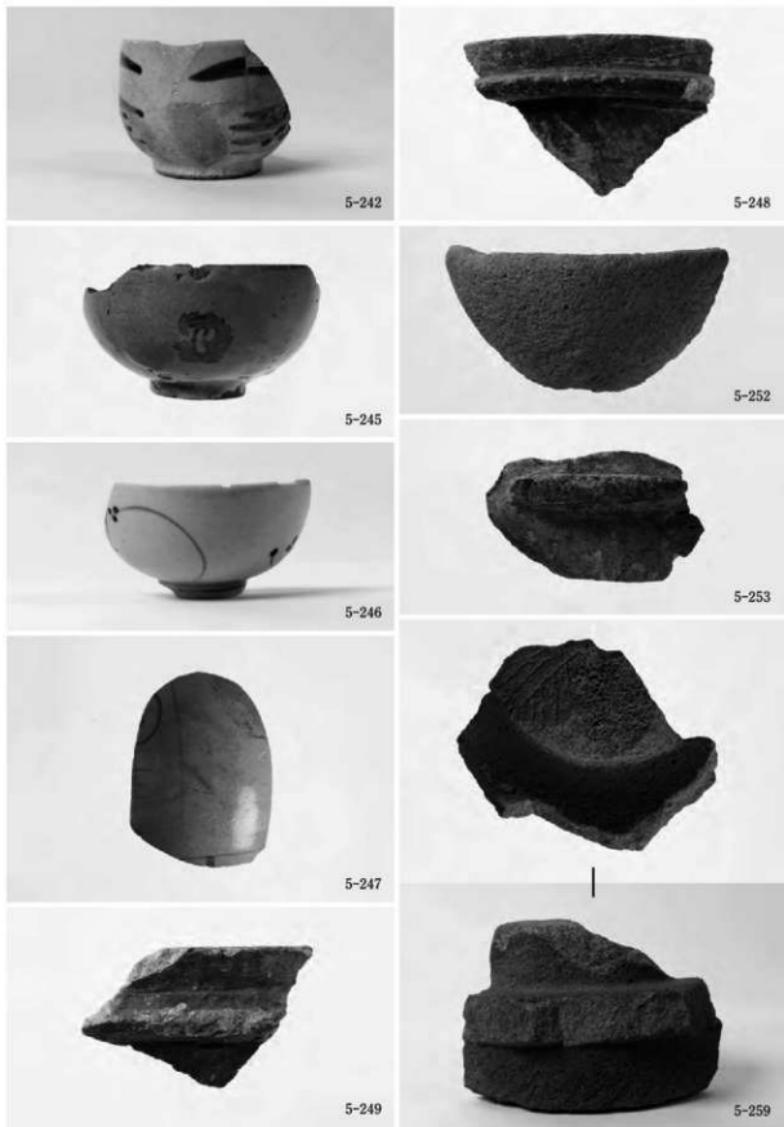


調査5区出土遺物

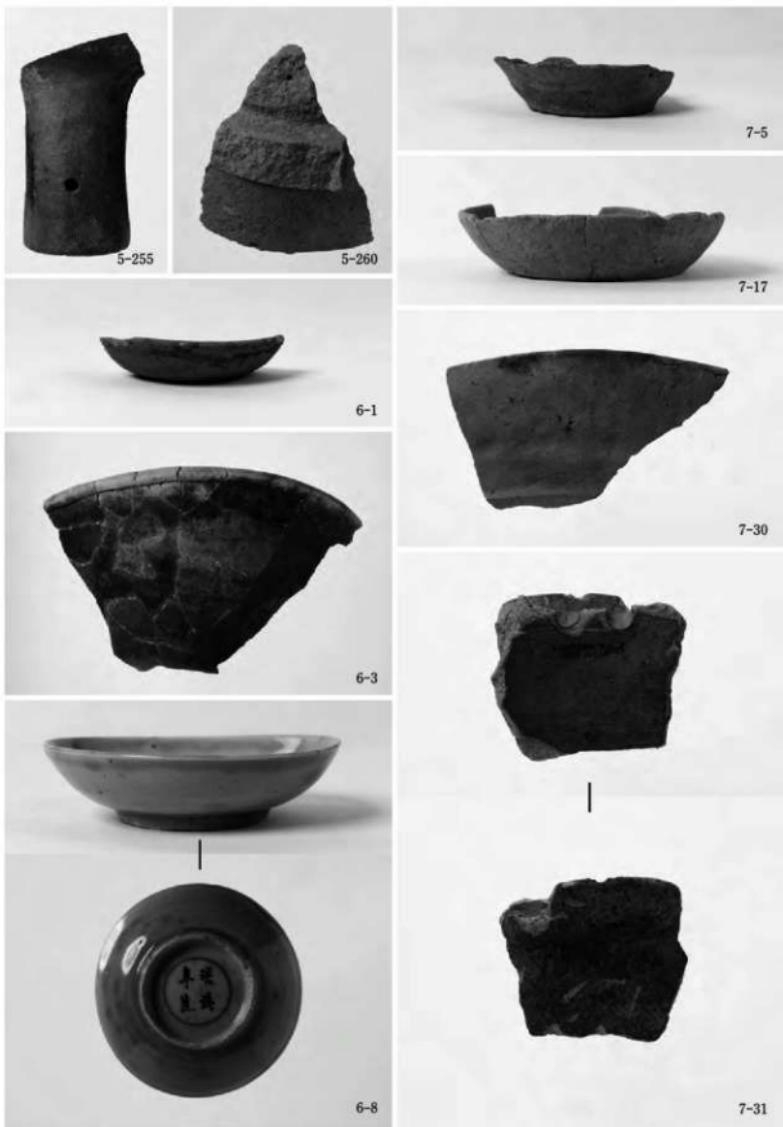


調査5区出土遺物

図版 36

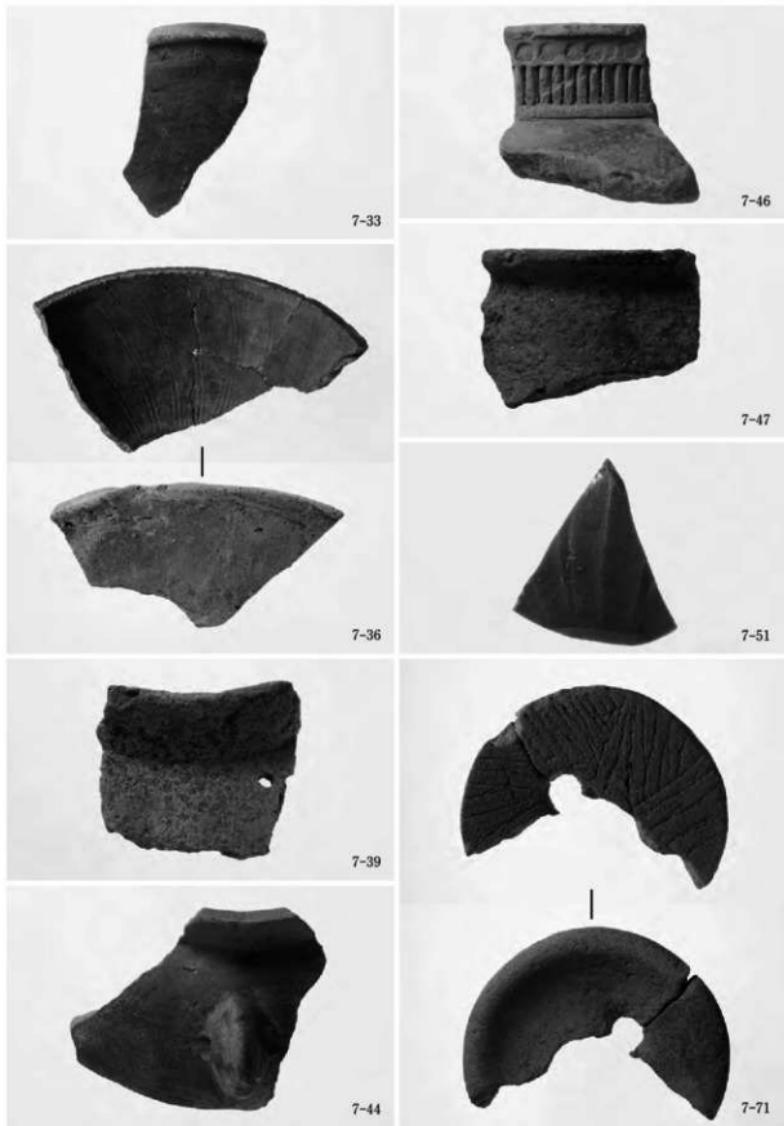


調査5区出土遺物

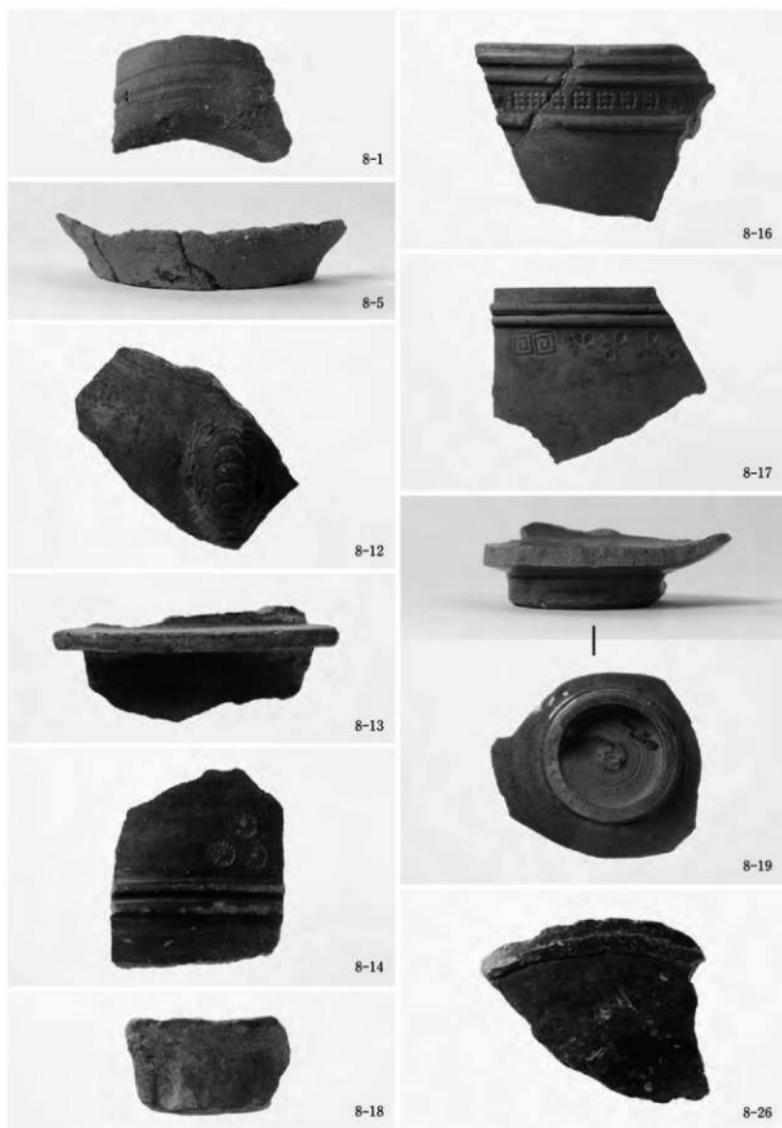


調査5区～7区出土遺物

図版 38



調査7区出土遺物



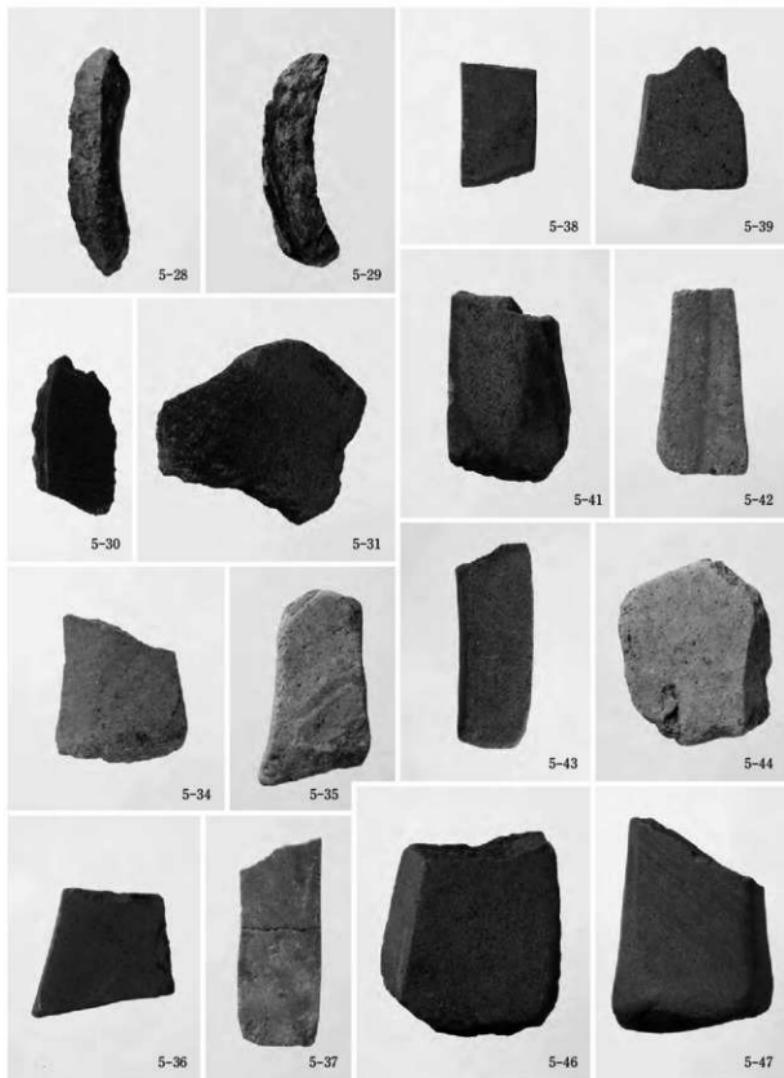
調査8区出土遺物

図版 40



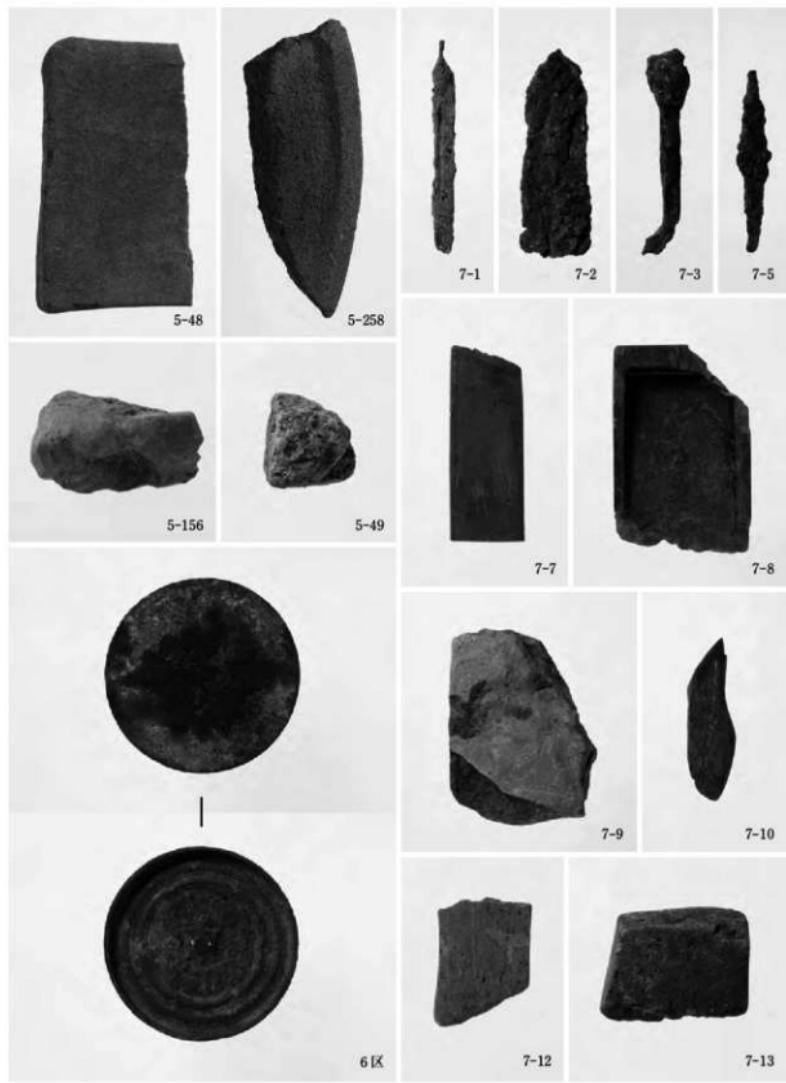
調査1区～5区出土銅製品、鉄製品、石製品、土製品

図版 41

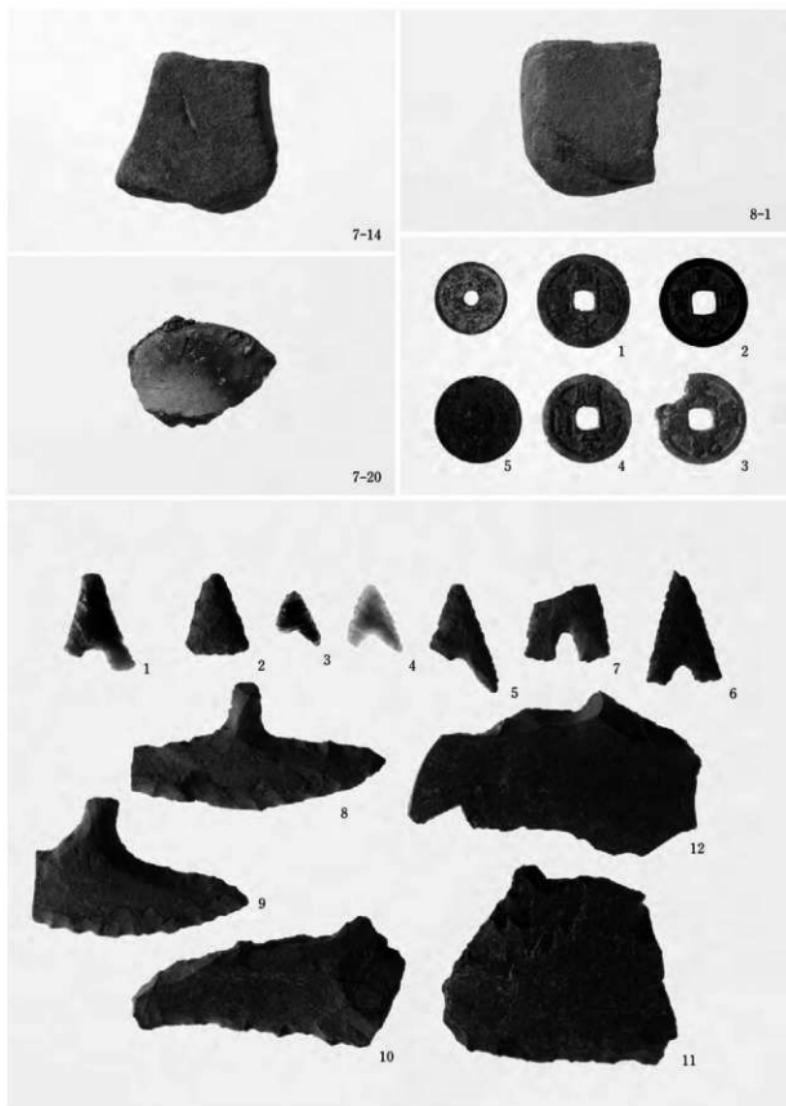


調査5区出土石製品

図版 42



調査5区～7区出土石製品、鉄製品、銅製品、土製品



調査7区・8区出土石製品、土器と古銭、縄文時代の石器

報告書抄録

ふりがな	ごかやま							
書名	五ヶ山Ⅱ							
副書名	福岡県営五ヶ山ダム関係文化財調査報告Ⅲ							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第248集							
編著者名	岸本圭・佐々木隆彦							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3							
発行年月日	2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
東小河内遺跡	ふくおかみちくし さんざか 福岡県筑紫郡都城 かわきゅうくみやまし かこうち 川町字東小河内	403059	0329	33° 24' 57"	130° 24' 31"	2010.0618 ~ 2011.0315、 2011.0826 ~ 2012.0228	5.100	ダム建設
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
東小河内遺跡	館 跡	中 世	掘立柱建物、石垣・欄 列、祭祀遺構、庭園遺 構、土坑、埋石土坑、 排水遺構、敷石遺構、 門跡	土師器、陶磁器、鏡、 銅製品、鉄製品、土製 品、石製品			13~16世紀の館跡 巨石祭祀に和鏡を奉納 中世の石垣	

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2117104
登録年度 25	登録番号 15

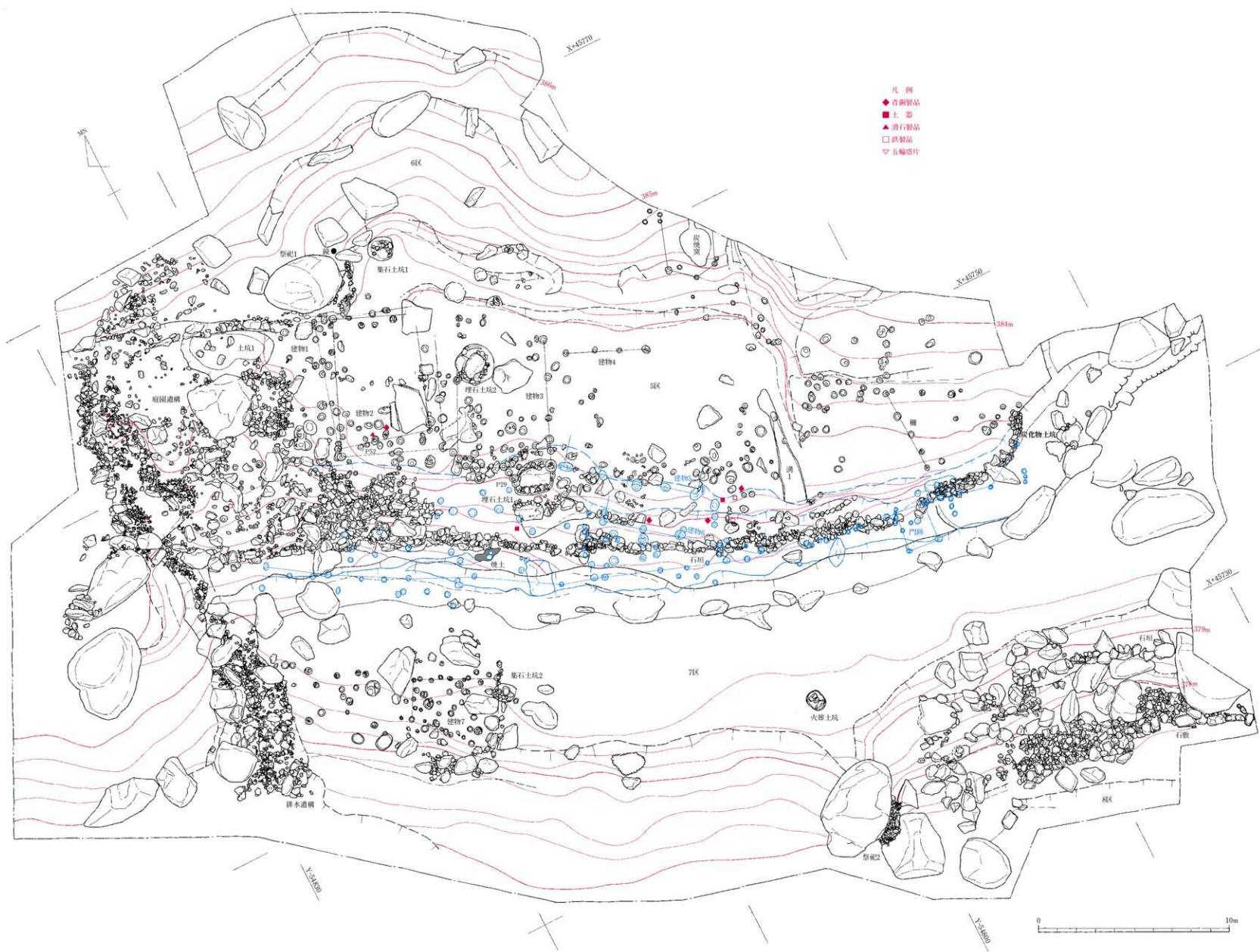
五ヶ山 II

福岡県文化財調査報告書 第248集

平成26年3月31日

発行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 久野印刷株式会社
福岡市博多区奈良屋町3番1号



付図 東小河内遺跡5区～8区遺構配置図 (1/150)